
行田市

築道下遺跡 IV

行田南部工業団地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

— V —

〈第1分冊〉

2000

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



築道下遺跡



築道下遺跡 F 区



F 区第13号掘立柱建物跡



F・G 区出土横瓶

序

埼玉県では、豊かな彩の国の実現を目指して「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しい92（くに）づくり」を基本理念とし、各種の施策を進めております。

テクノグリーン構想は、「創造性に満ちた活力ある産業社会づくり」という基本方向に沿って計画された事業で、自然環境などと調和させながら、先端技術産業などの導入を軸とした、産業の振興を図るものであります。

行田市野地区に計画された、行田南部工業団地の造成は、このテクノグリーン構想を積極的に推進するとともに、行田市の掲げる「水と緑の快適創造都市」の実現に向け、工業基盤の整備や工業機能の高度化を図り、地域の活性化と県土の均衡ある発展に資することを目的とした事業であります。

行田市は、古くから足袋の町として栄えてまいりましたが、現在は被服に限らず、広く商工業の都市として発展を続けております。一方、利根川と荒川の二大河川に挟まれるという地の利から、周辺には近世の忍藩を十万石たらしめた、広大な水田地帯が拓けております。

この肥沃な大地の恵みは、市内あまたの文化遺産によって物語られるところでもあります。国宝金錯銘鉄剣の出土で知られる埼玉古墳群、古代の古刹とされる旧盛徳寺跡、万葉集に歌われた小崎沼や埼玉の津、さらには忍の浮城として名高い忍城跡など、県名発祥の地にふさわしく、まさに歴史と文化の宝庫であります。

工業団地造成事業地内も例外ではなく、すでに築道下遺跡、ハッ島遺跡の所在が確認されておりました。関係機関では造成工事の実施に先立ち、両遺跡の取り扱いについて、慎重な協議を重ねてまいりました。そ

の結果、現状での保存が困難となる範囲については、やむを得ず記録保存のための発掘調査を行なうこととなりました。当事業団は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県企業局の委託を受けて、対象となる埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

ここに報告します築道下遺跡は、元荒川に沿った自然堤防上に営まれた集落遺跡であります。三年間にわたる発掘調査により、古墳時代から中世に至るおびただしい数の遺構・遺物が発見されました。この集落跡は、竪穴住居跡約800軒、掘立柱建物跡約240棟からなり、埼玉県内では最大規模を誇っています。また、規則的に配置された古代の大型建物跡、中世の墓跡、土師質土器焼成遺構などの発見は、当地域ばかりでなく、埼玉県の歴史を考える上で重要であります。

本書は平成8年度刊行の第I巻、平成9年度刊行の第II巻、同時刊行の第III巻に引き続き、築道下遺跡の調査成果をまとめた第IV巻となります。本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財保護思想の普及・啓発、および教育機関の参考資料として広くご活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県企業局、行田市教育委員会各位に深く感謝申し上げます。

平成12年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県行田市に所在する築道下遺跡の発掘調査報告書（第IV巻）であり、築道下遺跡のうち、E・F・G・H（DII）区を対象範囲とする。なお築道下遺跡の報告書は、以下のように分割刊行されている。
『築道下遺跡I』（1997）
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第188集
築道下遺跡A・B・C・D区
『築道下遺跡II』（1998）
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第199集
築道下遺跡B・C区
『築道下遺跡III』（2000）
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集
築道下遺跡C区
2. 遺跡のコード番号と代表地番および各年度の発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
築道下遺跡（No.68—144）
行田市大字野字高畑3744番地5
平成7年4月28日付 教文第2—23号
平成8年4月18日付 教文第2—12号
平成9年4月15日付 教文第2—14号
3. 発掘調査は、行田南部工業団地造成事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県企業局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、I—3に示す組織により実施した。
発掘調査事業については、平成8年4月1日から平成9年3月31日までを今井宏・中村倉司・岩瀬譲・山本靖・松澤浩一が担当し、平成9年6月から平成10年3月31日までを劔持和夫・西井幸雄・山本・伊藤暁が担当した。
5. 整理報告書作成事業は山本が担当し、平成10年10月1日から平成12年3月24日まで実施した。
6. 発掘調査はA～Hの8区に区分けを行って実施した。このうちH区はD区に南接するためDII区として計画したが、発掘着手時には既にD区の報告書が刊行されており、継続する遺構番号の煩雑さやD区とDII区の混同を避けるため、H区として発掘を実施し、本書もH区として報告する。
7. 遺跡の基準点測量・航空写真は株式会社アイシー、樹種同定・土壌分析はパリノ・サーヴェイ株式会社、土器の胎土分析は株式会社第四紀研究所、巻頭の遺物カラー写真撮影は小川忠博氏にそれぞれ委託した。
8. 発掘における遺構撮影は各担当者、遺物写真は山本が撮影した。
9. 出土品の整理および図版の作成は山本が行い、劔持和夫、兵ゆり子、上野真由美の協力を得た。
10. 本書の執筆は、I—1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、ほかを山本が行った。
11. 本書の編集は、山本が行った。
12. 本書にかかる資料は、平成12年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
13. 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します（敬省略）。
荒川正夫 海野芳聖 大沢伸啓 大沢昌弘
門脇伸一 栗原文藏 恋河内昭彦 斎藤國夫
田部井 功 塚田良道 鳥羽政之 中島洋一
堀口萬吉 山崎 武 山中敏史
行田市教育委員会

凡例

本書における挿図指示は次のとおりである。

1. X・Yによる座標表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. グリッドは座標に基づき、10m×10m方眼を設定した。各グリッドの呼称は北西隅の杭番号である。
3. 遺構の表記記号は次のとおりである。
SA…柵列跡 SB…掘立柱建物跡 SD…溝跡
SE…井戸跡 SK…土壙 SJ…住居跡
SX…性格不明遺構
4. 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。例外的なものについては、個別に示した。
遺構全測図・溝跡…1/200
住居跡・井戸跡・土壙・溝跡断面・茶毘跡
…1/60
掘立柱建物跡…1/80
5. 住居跡の主軸は、カマドが設置された壁と直交する軸線とし、主軸方位は座標北を基点に、東西に偏する角度を示した。
6. 掘立柱建物跡の規模は推定される心心間の距離を示し、軸方位は桁・梁方向にこだわらず、座標北を基点に東西へ偏する最低角度を示した。
7. 土層図に示したレベル数値は、すべて標高(m)を表す。

8. 遺物挿図の縮尺は、次のとおりである。例外的なものについては個別に示した。
土器・木製品…1/4 砥石…1/3
土製品・鉄器・石製品…1/2
9. 土器実測図の網かけは次のとおりである。
10%…釉附着範囲・附着物範囲
20%…赤彩範囲
40%…黒色処理範囲・火だすき痕
10. 遺物観察表は次のとおりである。
 - ・口径・器高・底径の計測値の単位はcmである。
 - ()内の数値は、口径・底径が推定値、器高は残存高を示す。
 - ・胎土は肉眼で観察できる物質について、以下のように示した。
W…白色粒 B…黒色粒 R…赤色粒
片…片岩粒 針…白色針状物質
 - ・焼成は3段階に分けた。
A…硬質 B…良好 C…不良
 - ・色調は、『新版標準土色帖 1997年版』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修)に照らし、最も近い色相を記したが、厳密ではなく概ねである。
 - ・残存率は5%単位で表した。

目次

(第1分冊)

序	
例言	
凡例	
I 発掘調査の概要	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 発掘・整理報告書作成の経過	2
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	5
II 遺跡の立地と環境	7
III 遺跡の概要	11
IV E区の遺構と遺物	13
1. 住居跡	20
2. 掘立柱建物跡	22
3. 土壌	25
4. 井戸跡	30
5. 溝跡	36
6. その他の遺構と遺物	45
V F区の遺構と遺物	50
1. 住居跡	73
(第2分冊)	
2. 掘立柱建物跡	261
3. 柵列跡	347
4. 土壌	352
5. 井戸跡	426
6. 溝跡	472
7. その他の遺構と遺物	499

(第3分冊)

VI G区の遺構と遺物	513
1. 住居跡	517
2. 掘立柱建物跡	531
3. 土壌	539
4. 井戸跡	555
5. 溝跡	560
6. その他の遺構と遺物	568
VII H区の遺構と遺物	575
1. 住居跡	577
2. 掘立柱建物跡	580
3. 柵列跡	587
4. 土壌	588
5. 井戸跡	592
6. 溝跡	595
7. その他の遺物	597
VIII まとめ	598
1. 集落の展開	598
2. 掘立柱建物跡の検討	611
附篇	626
1. 掘立柱建物跡出土木材樹種同定	626
2. 土壌分析	629
3. 胎土分析	633

挿図目次

第 1 図	埼玉県の地形	7	第 36 図	E 区溝跡(7) (第 8 図)	40
第 2 図	周辺の遺跡	9	第 37 図	E 区溝跡(8) (第 9 図)	40
第 3 図	調査区配置図	12	第 38 図	E 区溝跡出土遺物(1)	42
第 4 図	E 区全体図(1)	14	第 39 図	E 区溝跡出土遺物(2)	43
第 5 図	E 区全体図(2)	15	第 40 図	E 区溝跡出土遺物(3)	44
第 6 図	E 区全体図(3・4)	16	第 41 図	E 区茶毘跡(1)	45
第 7 図	E 区全体図(5・6)	17	第 42 図	E 区茶毘跡(2)	46
第 8 図	E 区全体図(7)	18	第 43 図	E 区茶毘跡(3)	47
第 9 図	E 区全体図(8)	19	第 44 図	E 区ピット出土遺物	49
第 10 図	E 区第 1 号住居跡・出土遺物	20	第 45 図	E 区表採遺物	49
第 11 図	E 区第 2 号住居跡	21	第 46 図	F 区全体図(1)	50
第 12 図	E 区第 1 号掘立柱建物跡・出土遺物	22	第 47 図	F 区全体図(2)	51
第 13 図	E 区第 2 号掘立柱建物跡	23	第 48 図	F 区全体図(3)	52
第 14 図	E 区第 3 号掘立柱建物跡	23	第 49 図	F 区全体図(4)	53
第 15 図	E 区土壇(1) (第 4 図)	25	第 50 図	F 区全体図(5)	54
第 16 図	E 区土壇(2) (第 5 図)	26	第 51 図	F 区全体図(6)	55
第 17 図	E 区土壇(3) (第 6 図)	27	第 52 図	F 区全体図(7)	56
第 18 図	E 区土壇(4) (第 6 図)	27	第 53 図	F 区全体図(8)	57
第 19 図	E 区土壇(5) (第 7 図)	28	第 54 図	F 区全体図(9)	58
第 20 図	E 区土壇(6) (第 8 図)	28	第 55 図	F 区全体図(10)	59
第 21 図	E 区土壇出土遺物	29	第 56 図	F 区全体図(11)	60
第 22 図	E 区井戸跡(1) (第 4 図)	30	第 57 図	F 区全体図(12)	61
第 23 図	E 区井戸跡(2) (第 5 図)	30	第 58 図	F 区全体図(13)	62
第 24 図	E 区井戸跡(3) (第 6 図)	31	第 59 図	F 区全体図(14)	63
第 25 図	E 区井戸跡(4) (第 6 図)	31	第 60 図	F 区全体図(15)	64
第 26 図	E 区井戸跡(5) (第 7 図)	32	第 61 図	F 区全体図(16)	65
第 27 図	E 区井戸跡(6) (第 7 図)	32	第 62 図	F 区全体図(17)	66
第 28 図	E 区井戸跡(7) (第 8 図)	33	第 63 図	F 区全体図(18)	67
第 29 図	E 区井戸跡出土遺物	34	第 64 図	F 区全体図(19)	68
第 30 図	E 区溝跡(1) (第 4 図)	36	第 65 図	F 区全体図(20)	69
第 31 図	E 区溝跡(2) (第 5 図)	36	第 66 図	F 区全体図(21)	70
第 32 図	E 区溝跡(3) (第 6 図)	37	第 67 図	F 区全体図(22)	71
第 33 図	E 区溝跡(4) (第 6 図)	38	第 68 図	F 区全体図(23)	72
第 34 図	E 区溝跡(5) (第 7 図)	39	第 69 図	F 区第 1 号住居跡・出土遺物	73
第 35 図	E 区溝跡(6) (第 7 図)	39	第 70 図	F 区第 2 号住居跡	74

第71图	F区第2号住居跡出土遺物	75	第108图	F区第38号住居跡出土遺物	106
第72图	F区第3号住居跡・出土遺物	76	第109图	F区第40・42号住居跡	107
第73图	F区第4号住居跡出土遺物	76	第110图	F区第40号住居跡出土遺物	107
第74图	F区第4号住居跡	77	第111图	F区第41号住居跡・出土遺物	108
第75图	F区第5・6・7号住居跡	78	第112图	F区第43・44号住居跡	109
第76图	F区第5・6・7号住居跡出土遺物	79	第113图	F区第44号住居跡出土遺物	109
第77图	F区第8・9・10号住居跡	80	第114图	F区第45号住居跡・出土遺物	110
第78图	F区第8・9・10号住居跡出土遺物	81	第115图	F区第46号住居跡・出土遺物	111
第79图	F区第11号住居跡・出土遺物	83	第116图	F区第47号住居跡	112
第80图	F区第12号住居跡・出土遺物	84	第117图	F区第48号住居跡・出土遺物	113
第81图	F区第13号住居跡・出土遺物	85	第118图	F区第49・54号住居跡	114
第82图	F区第14号住居跡	86	第119图	F区第50号住居跡・出土遺物	115
第83图	F区第15号住居跡	87	第120图	F区第51号住居跡・出土遺物	116
第84图	F区第16号住居跡・出土遺物	88	第121图	F区第52号住居跡・出土遺物	117
第85图	F区第17・18・25号住居跡	89	第122图	F区第53号住居跡・出土遺物	118
第86图	F区第17・18・25号住居跡炭化材出土狀況	90	第123图	F区第55号住居跡・出土遺物	118
第87图	F区第17・18・25号住居跡出土遺物	91	第124图	F区第56号住居跡	120
第88图	F区第19号住居跡	92	第125图	F区第56号住居跡出土遺物	121
第89图	F区第20・21・23号住居跡	93	第126图	F区第57号住居跡・出土遺物	122
第90图	F区第20号住居跡出土遺物	94	第127图	F区第58・59・62号住居跡	123
第91图	F区第23号住居跡出土遺物	94	第128图	F区第58・59・62号住居跡出土遺物	124
第92图	F区第22号住居跡・出土遺物	94	第129图	F区第60号住居跡	125
第93图	F区第24号住居跡・出土遺物	95	第130图	F区第61・67号住居跡	126
第94图	F区第26号住居跡	96	第131图	F区第61号住居跡出土遺物	127
第95图	F区第27号住居跡・出土遺物	96	第132图	F区第63号住居跡・出土遺物	128
第96图	F区第28号住居跡・出土遺物	97	第133图	F区第64・65号住居跡	129
第97图	F区第29号住居跡・出土遺物	98	第134图	F区第64・65号住居跡出土遺物	130
第98图	F区第30号住居跡	99	第135图	F区第66号住居跡	131
第99图	F区第31・32号住居跡	100	第136图	F区第68・69号住居跡	132
第100图	F区第31号住居跡出土遺物	100	第137图	F区第70号住居跡	133
第101图	F区第33号住居跡	101	第138图	F区第71・72号住居跡	134
第102图	F区第34・35号住居跡	102	第139图	F区第72号住居跡出土遺物	135
第103图	F区第34号住居跡出土遺物	103	第140图	F区第73・81号住居跡	136
第104图	F区第35号住居跡出土遺物	103	第141图	F区第73号住居跡出土遺物	137
第105图	F区第36号住居跡	104	第142图	F区第74号住居跡	138
第106图	F区第37号住居跡	104	第143图	F区第74号住居跡出土遺物	139
第107图	F区第38・39号住居跡	105	第144图	F区第75号住居跡・出土遺物	140

第145図	F区第79号住居跡・出土遺物	141	第182図	F区第112・114号住居跡・出土遺物	175
第146図	F区第76・77・78号住居跡・出土遺物	142	第183図	F区第115号住居跡・出土遺物	176
第147図	F区第80号住居跡・出土遺物	144	第184図	F区第116号住居跡	177
第148図	F区第82・83号住居跡	145	第185図	F区第117号住居跡・出土遺物	178
第149図	F区第82号住居跡出土遺物	146	第186図	F区第118号住居跡出土遺物	179
第150図	F区第83号住居跡出土遺物	146	第187図	F区第118・120号住居跡	180
第151図	F区第84・85・86号住居跡	147	第188図	F区第121・122号住居跡	182
第152図	F区第84号住居跡出土遺物	148	第189図	F区第123号住居跡・出土遺物	183
第153図	F区第85号住居跡出土遺物	148	第190図	F区第124号住居跡	183
第154図	F区第86号住居跡出土遺物	148	第191図	F区第125号住居跡・出土遺物	184
第155図	F区第87号住居跡	149	第192図	F区第126号住居跡・出土遺物	185
第156図	F区第88号住居跡	150	第193図	F区第127号住居跡	187
第157図	F区第89・119号住居跡	151	第194図	F区第128号住居跡・出土遺物	188
第158図	F区第89号住居跡出土遺物	152	第195図	F区第129号住居跡・出土遺物	190
第159図	F区第119号住居跡出土遺物	152	第196図	F区第130号住居跡・出土遺物	191
第160図	F区第90号住居跡・出土遺物	153	第197図	F区第131号住居跡・出土遺物	192
第161図	F区第91号住居跡・出土遺物	154	第198図	F区第132号住居跡・出土遺物	193
第162図	F区第92・93号住居跡	155	第199図	F区第133・140・141号住居跡・ 出土遺物	194
第163図	F区第92号住居跡出土遺物	156	第200図	F区第134号住居跡・出土遺物	196
第164図	F区第93号住居跡出土遺物	156	第201図	F区第135号住居跡・出土遺物	197
第165図	F区第94号住居跡・出土遺物	157	第202図	F区第136号住居跡	198
第166図	F区第95号住居跡・出土遺物	158	第203図	F区第136号住居跡カマド	199
第167図	F区第96・97号住居跡	159	第204図	F区第136号住居跡出土遺物	199
第168図	F区第96号住居跡出土遺物	160	第205図	F区第137号住居跡	200
第169図	F区第97号住居跡出土遺物	160	第206図	F区第137号住居跡出土遺物	201
第170図	F区第98号住居跡・出土遺物	161	第207図	F区第138号住居跡	202
第171図	F区第99号住居跡・出土遺物	162	第208図	F区第139号住居跡・出土遺物	203
第172図	F区第100号住居跡・出土遺物	163	第209図	F区第142号住居跡・出土遺物	204
第173図	F区第101・102・103号住居跡	165	第210図	F区第143号住居跡・出土遺物	205
第174図	F区第101号住居跡出土遺物	166	第211図	F区第144・145・146・147号住居跡	206
第175図	F区第104・113号住居跡	167	第212図	F区第147号住居跡出土遺物	206
第176図	F区第105号住居跡	168	第213図	F区第148・149号住居跡	207
第177図	F区第106号住居跡・出土遺物	169	第214図	F区第148・149号住居跡出土遺物	208
第178図	F区第107号住居跡・出土遺物	170	第215図	F区第150号住居跡・出土遺物	209
第179図	F区第108号住居跡・出土遺物	171	第216図	F区第151号住居跡・出土遺物	210
第180図	F区第109・110号住居跡・出土遺物	172	第217図	F区第152号住居跡・出土遺物	211
第181図	F区第111号住居跡・出土遺物	173			

第218图	F区第153号住居跡	·····212	第245图	F区第176号住居跡出土遺物	·····236
第219图	F区第154号住居跡·出土遺物	·····213	第246图	F区第178·179·180·187·196号住居跡 出土遺物	·····237
第220图	F区第155·156·157·158号住居跡	·····214	第247图	F区第178·179·180·187·196号 住居跡	·····238
第221图	F区第156号住居跡出土遺物	·····215	第248图	F区第181·182·183·186号住居跡	·····240
第222图	F区第157号住居跡出土遺物	·····215	第249图	F区第181·182·183·186号住居跡 出土遺物(1)	·····242
第223图	F区第158号住居跡出土遺物	·····215	第250图	F区第181·182·183·186号住居跡 出土遺物(2)	·····243
第224图	F区第159·172号住居跡	·····217	第251图	F区第184号住居跡·出土遺物	·····244
第225图	F区第172号住居跡出土遺物	·····217	第252图	F区第188号住居跡	·····246
第226图	F区第160号住居跡·出土遺物	·····218	第253图	F区第189号住居跡·出土遺物	·····247
第227图	F区第161·162号住居跡	·····220	第254图	F区第190·191·192·193·194·195号 住居跡	·····248
第228图	F区第161号住居跡出土遺物	·····221	第255图	F区第190·191·192·193·194·195号 住居跡出土遺物(1)	·····250
第229图	F区第163号住居跡	·····222	第256图	F区第190·191·192·193·194·195号 住居跡出土遺物(2)	·····251
第230图	F区第163号住居跡出土遺物	·····223	第257图	F区第197号住居跡·出土遺物	·····253
第231图	F区第164号住居跡·出土遺物	·····223	第258图	F区第198号住居跡·出土遺物	·····254
第232图	F区第165号住居跡·出土遺物	·····224	第259图	F区第199·200号住居跡	·····255
第233图	F区第166·168·169号住居跡	·····225	第260图	F区第199号住居跡出土遺物	·····255
第234图	F区第166·168·169号住居跡出土遺物	226	第261图	F区第201号住居跡·出土遺物(1)	·····256
第235图	F区第170号住居跡	·····227	第262图	F区第201号住居跡出土遺物(2)	·····257
第236图	F区第170号住居跡出土遺物	·····228	第263图	F区第202号住居跡	·····259
第237图	F区第171号住居跡·出土遺物	·····229	第264图	F区第202号住居跡出土遺物	·····260
第238图	F区第173号住居跡	·····230			
第239图	F区第174号住居跡	·····231			
第240图	F区第174号住居跡出土遺物	·····232			
第241图	F区第175号住居跡(1)	·····233			
第242图	F区第175号住居跡(2)	·····234			
第243图	F区第175号住居跡出土遺物	·····234			
第244图	F区第176·177号住居跡	·····235			

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県では、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。工業の振興では、都心からおおむね50km以遠の県北地域を対象圏域として、豊かな自然環境との調和を図りながら、付加価値の高い工業団地の整備を進め、地域産業の技術の高度化や先端技術産業などの導入を進めるテクノロジー構想を推進している。

その一環として埼玉県企業局では、工場誘致と適切な工場配置を行うために、行田市大字野地内に行田工業団地の造成を計画した。県教育局生涯学習部文化財保護課ではこのような開発事業に対応するため、開発関係部局と事前協議を行い、文化財の保護について遺漏のないように調整を進めてきたところである。

行田工業団地の造成計画にあたり、平成6年2月1日付け企局土二第280号で、企業局土地造成課長から教育局生涯学習部文化財保護課長あて、行田工業団地造成予定地における「埋蔵文化財の有無及び取扱いについて」の照会があった。

工業団地予定地内には、古墳から平安時代にあたる集落跡である築道下遺跡及び八ッ島遺跡の二遺跡がすでに周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていたが、それぞれの範囲については不明であった。遺跡の範囲を明らかにすることは、開発事業との円滑な調整を図る意味でも重要なことでもあった。照会を受けて文化財保護課では平成7年3月6日～9日の4日間にわたって、造成予定地内の遺跡範囲確認調査を実施した。範囲確認調査の結果、築道下遺跡の立地する元荒川の左岸の自然堤防上には、ほぼ例外なく古墳から平

安時代にわたる集落跡が存在することが判明し、周知の包蔵地の範囲が西から南東側に大きく広がることが明らかになった。

この結果を踏まえて、平成7年3月15日付け教文第125—1号をもって文化財保護課長から企業局土地開発第二課長あて次のように通知した。

1 埋蔵文化財の所在

工業団地用地内には築道下遺跡(68—144)、八ッ島遺跡(68—146)が所在する。

2 取り扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する地区については、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること。

なお、発掘調査の実施については当課と協議すること。

その後の協議により、緑地や公園として現状保存の図られる場所を除き、記録保存のための発掘調査もやむを得ないと結論に至った。発掘調査は平成7年4月1日から平成10年3月31日までの3ケ年にわたった。

発掘調査にかかわる通知は以下のとおりである。

(平成7年度)

平成7年4月28日付 教文第2—24号

(平成8年度)

平成8年4月18日付 教文第2—12号

(平成9年度)

平成9年4月15日付 教文第2—14号

(文化財保護課)

2. 発掘・整理報告書作成の経過

発掘事業

行田南部工業団地造成にかかる埋蔵文化財包蔵地は、築道下遺跡・ハッ島遺跡の2遺跡である。発掘調査は、平成7年4月から開始され、平成10年3月をもって終了した。調査面積は、築道下遺跡が約64,300㎡、ハッ島遺跡が約51,000㎡、総面積は約115,300㎡である。このうち、築道下遺跡E区6,300㎡・F区23,150㎡・G区2,600㎡・H区500㎡、合計32,550㎡が本書の対象地域で、発掘事業は平成8・9年度にわたって実施された。

E区

発掘調査は平成8年4月～5月に現道部分を除く5,920㎡を実施し、平成10年2月～3月に現道部分380㎡を行った。また平成9年12月に千間堀水路改修工事中に発見された第21号井戸跡もE区の調査範囲とした。

平成8年4月に重機による表土除去を開始し、順次、遺構確認を実施した。表土除去終了後、基準点測量を行い、遺構分布図（概略図）を作成した。

遺構確認の結果、溝跡が多く発見された。相当量の排土が予想され、発掘作業の迅速化を図るため、土木作業員を投入し、その掘削を行った。下旬より補助員を導入し、住居跡・掘立柱建物跡等の遺構の精査を開始し、併行して実測図の作成・写真撮影等の作業も始めた。

5月下旬には遺構精査および実測図の作成・写真撮影等の作業を終了し、6月よりF区の調査に着手した。

航空写真撮影はC区発掘調査の進捗状況に合わせて7月4日に実施し、発掘作業を終了した。

平成9年12月上旬に千間堀水路改修工事中に井戸跡1井が発見された。緊急に発掘調査を実施し、記録保存につとめた。この井戸跡の発見から、11日に企業局と緊急会議を行い、千間堀水路改修工事に伴う新たな発掘調査の必要が生じた（C区）。

平成10年2月からE区北西際の現道およびその拓

幅工事に伴う箇所の発掘調査をF区現道部分と併行して実施した。月上旬に表土除去後、遺構確認を実施し、発掘調査に着手した。前半はF区の平面図作成作業と併行して実施していたために人員が少なく、進行は遅かったものの、F区の調査終了後は作業速度も上がり、3月3日に航空写真撮影を実施し、完了した。

F区

発掘調査は平成8年4月～平成9年3月、平成9年11月～平成10年3月に実施した。調査面積は23,150㎡である。平成9年度は未完了の調査範囲に応じて事業規模が縮小され、4月～10月は造成事業計画を考慮して、C・G・H区の調査を先行して行い、F区の調査は中断した。

平成8年4月下旬からE区に引き続いて重機による表土除去を開始し、順次、遺構確認を実施した。5月下旬に基準点測量を行い、続いて遺構分布図を作成し、調査準備が整った。

F区の発掘調査は、E区の発掘調査終了後、6月から本格的に着手した。調査手順は千間堀水路改修工事計画を考慮して、千間堀水路に沿った幅約30mを先行し、東から西へ向かって実施した。

6月8日に埼玉県立埋蔵文化財センターとの共催で、遺跡見学会を開催した。ただし、公開箇所はB・C区で、F区については調査区外からの自由見学とした。

7月から調査員2名が増員となり、9月下旬までに先行範囲を終了した。

9月から重機による未着手部分の表土除去を再開し、順次、遺構確認を実施した。10月上旬には表土除去も終了し、17日に、既に調査を終了している箇所の航空写真を撮影した。また、現場事務所では発掘作業の迅速化を図るため、各種図面の整合作業等の記録類の整理を始める。

遺構の精査は引き続き行い、第48号溝跡および第51号溝跡以北の範囲を実施した。排土量の多い溝跡が多数検出されているため、土木作業員を投入して掘削を

行い、発掘作業の迅速化を図った。

12月中旬より調査進行を妨げていた出水や水没に悩まされることもなくなり、斜面部を画す第78号溝以南の斜面および斜面下の調査に着手した。平成9年2月19日には第48・51号溝跡以北および第78号溝跡以南の範囲の空中写真撮影を実施した。その後、残る図面作成作業や多数検出されている井戸跡の断ち割り作業等を継続した。

2月下旬にはF区の調査と併行して、同事業地内に所在する八ッ島遺跡の遺構確認調査（第一次調査）も実施した。

3月5日には事業地内に所在する築道下遺跡・八ッ島遺跡の立地環境の把握および記録保存のため、両遺跡を網羅する箇所を対象に、空中写真測量を行った。

3月下旬までに第48・51・78号溝跡に画された範囲を除く20,000㎡にわたる範囲の精査・図面作成・写真撮影を完了した。遺構精査に着手していない第48・51・78号溝跡に画された範囲については、シートで覆い、調査区の安全確保、機材を撤収し、平成8年度の調査を終了した。

平成9年度のF区の調査は11月から平成10年3月まで実施した。対象範囲は当初、第48・51・78号溝跡に囲まれた3,000㎡であったが、C区とF区を画する現道部分の改修・拡幅工事計画に伴い150㎡が追加された。

発掘調査は、南側から順次進めた。住居跡が密集重複する箇所においては、相互関係の把握に困難を極めた。また千間堀水路改修工事に伴ってC区に新たな発掘調査の必要が生じたために、12月中旬より調査員・補助員が減少した。さらに平成10年1月は中旬までに3度の大雪にみまわれ、除雪・排水作業の繰り返しが余儀なくされ、作業効率が低下した。

1月下旬には遺構精査がほぼ終了し、1月28日に空中写真撮影を実施した。その後、残る写真撮影・図面作成作業を行い、2月上旬に終了した。

引き続きC区とF区を画する現道の改修・拡幅工事計画に伴う150㎡の発掘調査に着手し、同工事計画に

伴うE区の調査箇所と併行して実施した。上旬に表土除去後、遺構確認を実施し、順次、遺構精査を開始した。2月上旬はF区の図面作成作業と併行して実施していたために人員が少なく、進行は遅かったものの、図面作成作業終了後は作業速度も上がり、さらに2月末にはC区の調査も完了して調査員・補助員が復帰し、その速度は加速した。

3月3日に航空写真撮影を実施し、残る写真撮影・図面作成作業を行い完了した。

G区

発掘調査は平成9年6月下旬～10月に実施した。対象面積は2,600㎡であるが、2つの異なる道路築造工事計画に伴って調査を道路部分と千間堀水路架橋部分の2回に分け、継続して行った。

6月下旬より道路部分の重機による表土除去を開始し、順次、遺構確認を実施した。調査前はC区で発見された中世墓地の一部が検出されることが予想されたが、遺構確認の結果、G区にまでは至っていないことが判明した。表土除去終了後、基準点測量を行い、遺構分布図（概略図）を作成した。

7月4日に気温37度を記録するなどの猛暑のなか、常時の出水に悩まされ、さらに9月には台風19・20号が相次いで接近し、その影響により秋雨前線が活発化して調査区が水没を繰り返すという気象状況に悩まされながら遺構精査を行った。

9月下旬までには大半の遺構精査を終えた。C区の発掘調査の進捗状況に合わせて航空写真撮影を9月24日に実施し、残る写真撮影・図面作成作業を行い、10月初旬に終了した。

残る千間堀水路架橋部分については道路築造部分の調査に引き続いて着手することができた。

10月上旬に重機による表土除去を実施し、順次、遺構確認を行った。狭い調査区ながらも多種の遺構が密集重複し、相互関係の把握に困難を極めた。10月末までには遺構精査・写真撮影・図面作成作業を終了し、G区の発掘作業は完了した。ただし、道路構築工事の進捗状況に合わせて調査箇所を分割するといった状況

で、空中写真撮影は実施できなかった。

H区

発掘調査は平成9年10月に実施し、調査対象面積は500㎡である。H区の調査はG区千間堀水路架橋部分の調査と併行して行われ、G区と同様に道路築造工事の進捗状況に応じて調査区を分割し、調査終了箇所から順に直ちに工事が開始された。

10月上旬にG区千間堀水路架橋部分と同時に重機による表土除去を行い、順次、遺構確認を実施した。続いて基準点測量、遺構分布図（概略図）の作成、遺整理・報告書作成事業

本書の対象となる築道下遺跡E・F・G・H区の整理・報告書作成作業は、平成10年10月1日から平成12年3月24日まで実施した。

平成10年10月に出土遺物および各種記録類の搬入を行い、遺物の水洗・注記、遺構図面・写真の整理に着手した。注記まで終了した遺物は各遺構ごとに接合・復元を実施した。また遺構図面は二次原図の作成に取りかかった。

11月には遺物の注記を終え、以後は遺物の接合・復元、二次原図の作成を重点的に行う。また接合・復元された遺物は、順次、人手・三次元測定機を併用して実測図の作成作業に着手した。

12月には作成された遺構図の二次原図から順に、挿図用の仮版組を始めた。

平成11年1月～3月は遺物の接合・復元、遺構図の二次原図作成・挿図用仮版組、遺物実測図の作成作業も軌道に乗り、これらを重点的に行った。また3月には出土遺物（須恵器の一部）の胎土分析を実施した。

4月は遺物の接合・復元、遺物実測図作成作業を継続し、新たに仮版組の済んでいる遺構図から順に、トレース作業を開始した。4月末までには二次原図作成・挿図用仮版組作業も完了した。

5月から遺構データの処理を始める。

構精査を併行して開始した。道路築造工事の進捗状況に応じた箇所への遺構精査・写真撮影・図面作成作業を繰り返し、調査の進行が阻まれたが、幸い好天にも恵まれ、10月末までにすべての発掘作業が完了した。ただし、作業終了時点には既に工事が点々と進められており、空中写真撮影は実施できなかった。

築道下遺跡の発掘調査は、平成10年3月に現道部分の改修・拡幅工事に伴うE・F区の調査完了後、下旬に機材撤収、現場事務所を解体し、予定されたすべての調査を完了した。

6月までに遺物の接合・復元を完了し、実測作業の終了している一部の遺物については写真撮影用の補修と着色を施した。

7月よりトレースの終了した遺構図面から順次、網掛けや文字記入等の版組作業、下旬より、遺跡全体図・遺構分布図のトレース作業を開始する。

8月中旬に遺構図のトレース作業が完了し、引き続いて遺物実測図のトレースに着手した。また8月末までに遺物実測図の作成が終了した。

9月より遺構写真を選択し、写真図版の版組作業を開始した。また一部原稿の執筆、遺物データ処理も始めた。

10月に遺構図面の版組作業が終了し、遺物の写真撮影用の補修と着色作業を行う。10月末までに遺物実測図のトレース作業が終了し、順次、遺物実測図の版組作業を進めた。

11月中旬に遺物写真撮影を行い、併行して遺構写真の割付を行った。

12月には原稿執筆、遺構・遺物データをもとに表作成を行い、併行して割付・編集作業に着手した。

1月末に入札を行い、2月の校正作業を経て、平成12年3月24日に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘事業

平成8年度

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	富 田 真 也
専 務 理 事	吉 川 國 男
常務理事兼管理部長	稲 葉 文 夫
理 事 兼 調 査 部 長	小 川 良 祐
管 理 部	
専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
庶 務 課 長	依 田 透
主 査	西 沢 信 行
主 任	長 滝 美 智 子
主 事	菊 池 久
調 査 部	
調 査 部 副 部 長	高 橋 一 夫
調 査 第 四 課 長	酒 井 清 治
主 査	今 井 宏
主 任 調 査 員	中 村 倉 司
主 任 調 査 員	劔 持 和 夫
主 任 調 査 員	赤 熊 浩 一
主 任 調 査 員	岩 瀬 讓
主 任 調 査 員	山 本 靖
主 任 調 査 員	大 屋 道 則
調 査 員	栗 岡 潤
調 査 員	松 澤 浩 一

平成9年度

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	富 田 真 也
専 務 理 事	塩 野 博
常務理事兼管理部長	稲 葉 文 夫
理 事 兼 調 査 部 長	梅 沢 太 久 夫
管 理 部	
専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	菊 池 久
庶 務 課 長	依 田 透
主 査	西 沢 信 行
主 任	長 滝 美 智 子
主 任	腰 塚 雄 二
調 査 部	
調 査 部 副 部 長	今 泉 泰 之
調 査 第 二 課 長	杉 崎 茂 樹
主 任 調 査 員	劔 持 和 夫
主 任 調 査 員	西 井 幸 雄
主 任 調 査 員	山 本 靖
調 査 員	伊 藤 暁

(2) 整理・報告書作成事業

平成10年度

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	鈴 木 進
管 理 部	
専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	菊 池 久
庶 務 課 長	金 子 隆
主 査	田 中 裕 二
主 任	長 滝 美智子
主 任	腰 塚 雄 二
資 料 部	
資 料 部 長	増 田 逸 朗
主幹兼資料部副部長	小久保 徹
専門調査員兼資料整理第一課長	坂 野 和 信
統 括 調 査 員	劔 持 和 夫
主 任 調 査 員	山 本 靖

平成11年度

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	広 木 卓
管 理 部	
管理部副部長兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
主 任	菊 池 久
庶 務 課 長	金 子 隆
主 査	田 中 裕 二
主 任	江 田 和 美
主 任	長 滝 美智子
資 料 部	
資 料 部 長	高 橋 一 夫
専門調査員兼資料部副部長	石 岡 憲 雄
専 門 調 査 員	大 和 修
統 括 調 査 員	劔 持 和 夫
主 任 調 査 員	山 本 靖

II 遺跡の立地と環境

築道下遺跡は、埼玉県行田市大字野字3744番地5他に所在する。一般国道17号熊谷バイパスとJR上越新幹線が交差する南西区域、JR高崎線北鴻巣駅の北東約1.4kmに位置している。遺跡付近は行田市の最南東端にあたり、西は吹上町、東は北埼玉郡川里村と接し、元荒川を挟んだ南には鴻巣市が広がっている。

築道下遺跡は元荒川と行田市街から南流する忍川の合流点付近に位置し、元荒川左岸に沿って東西に延びる自然堤防上に立地している。築道下遺跡付近の標高は16m前後である。

この自然堤防は、埼玉古墳群が所在する埋没ローム台地から忍川に沿って形成された自然堤防を経て続いている。さらに熊谷バイパス付近で二又に分かれ、熊谷バイパス東側の北側自然堤防上には八ッ島遺跡が位置し、奈良～平安時代の集落跡が発掘調査されている。八ッ島遺跡の広がる自然堤防は中世以降に元荒川による大きな浸食・氾濫をうけており、南側の自然堤防上はそれ以降に形成されたものである。また自然堤防に挟まれた地帯は比高差は約1mほどの窪地となっている。遺構確認調査の結果、南側の自然堤防上と窪地部

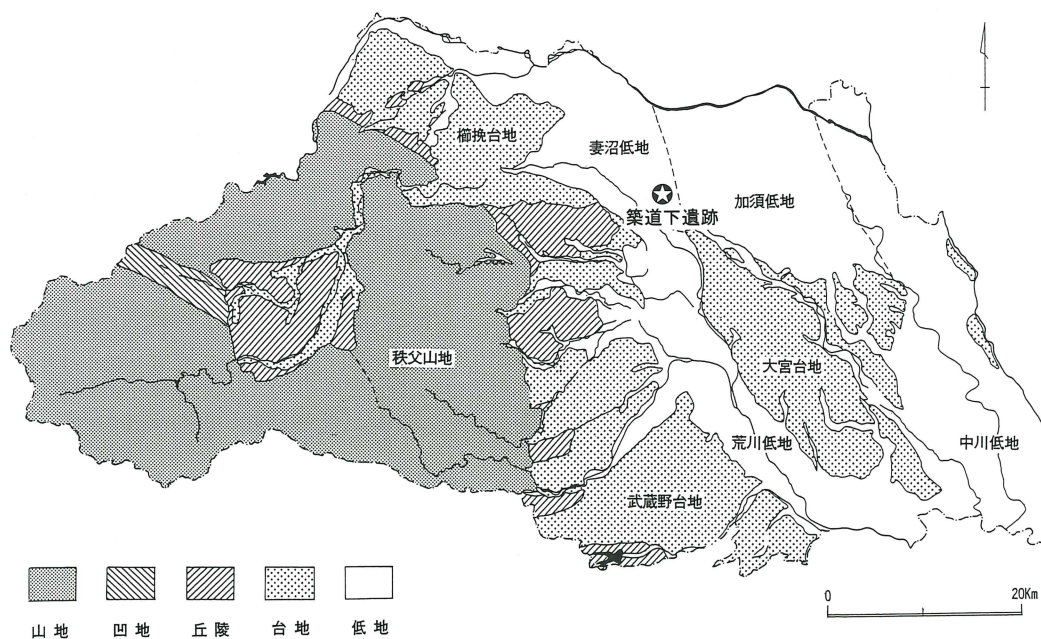
には遺構・遺物は発見されていない。

築道下遺跡の所在する埼玉県行田市周辺の県北東部地域には、利根川・荒川の大川に挟まれた妻沼低地・加須低地が広がっている。この地域では、利根川・荒川や分流する中小河川が激しく乱流し、浸食や氾濫に伴う土砂の流入が繰り返されている。また関東造盆地運動によって大宮台地の北部が沈降し、付近の地形は複数の河川によって形成された低地と自然堤防と埋没したローム台地が複雑に入り組んでいる。河川の浸食・氾濫と地盤の沈降現象という相乗効果により旧地形は埋没し、さらに、寛永6年(1629)の元荒川の瀬替えをはじめとする近世以降の人工的な河川の瀬替えや用水路の開削等によって、近世以前の旧地形の復元はきわめて困難である。

元荒川左岸に分布する築道下遺跡周辺の遺跡は、河川が形成した自然堤防上と埋没台地上に立地している。発掘調査はその多くが点的に行われたもので、旧地形が埋没した地形環境も加わり、遺跡の全容を知り得るものが少ない。

旧石器・縄文・弥生時代の遺跡は少ない。元荒川対

第1図 埼玉県の地形



岸の大宮台地縁辺には旧石器・縄文・弥生時代の遺跡が所在し、対照的な様相を示している。縄文時代では行田市長野中学校校庭（馬場裏）遺跡、行田市下埼玉通遺跡、川里村赤城遺跡、続く弥生時代には著名な熊谷市・行田市池上遺跡、熊谷市・行田市小敷田遺跡をはじめ、吹上町袋・台遺跡、行田市船原・内郷通遺跡などが知られているにすぎない。しかし、近年縄文土器片が発見される発掘調査例が認められ、遺跡発見数の少なさは地形環境に起因するものと考えられ、今後増加していく可能性がある。

続く古墳時代には行田市鴻池遺跡、行田市武良内遺跡、行田市高畑遺跡、行田市陣場遺跡、行田市小針遺跡、袋・台遺跡、行田市長野神明遺跡などの前・中期の遺跡があげられるものの、遺跡数は多くない。これらの遺跡は小規模な集落跡や、数基からなる方形周溝墓群であり、このうち、袋・台遺跡からは、前期の方形周溝墓と後期古墳との合間を埋める資料として注目される円墳が発見されている。

古墳時代後期になると集落遺跡は飛躍的に増加し、陣場遺跡、船原・内郷通遺跡、行田市小針北遺跡、小針遺跡、高畑遺跡、袋・台遺跡などがあげられる。また遺跡数の飛躍的な増加とともに、集落規模の拡大化の傾向も窺われる。

これらの集落遺跡の展開と併行して、国宝・金錯銘鉄剣を出土したさきたま稲荷山古墳の出現を契機に大型前方後円墳が継続的に築造され続けた武蔵国造の奥津城とされる行田市埼玉古墳群を中心に、数多くの前方後円墳や古墳群が造営されている。前方後円墳の若王子古墳を中心に展開する行田市若王子古墳群や行田市佐間古墳群、元荒川右岸の吹上町三島神社古墳（前方後円墳）、元荒川左岸の自然堤防上の鴻巣市安養寺古墳群などが所在している。

相当の権力を有した首長層の墳墓と想定される前方後円墳に着目すると、埼玉古墳群を除く利根川南岸一帯に所在する前方後円墳には前方部を西向する傾向がみられ、埼玉古墳群を中心とした当時の社会構造を垣間見ることができる。さらに、元荒川を下った大宮台

地縁辺部には埼玉古墳群への埴輪の供給が確認されている埴輪生産遺跡の鴻巣市生出塚遺跡やこれに隣接する古墳群の鴻巣市新屋敷遺跡があり、歴史的環境の復元には広範囲に視野を広げる必要がある。

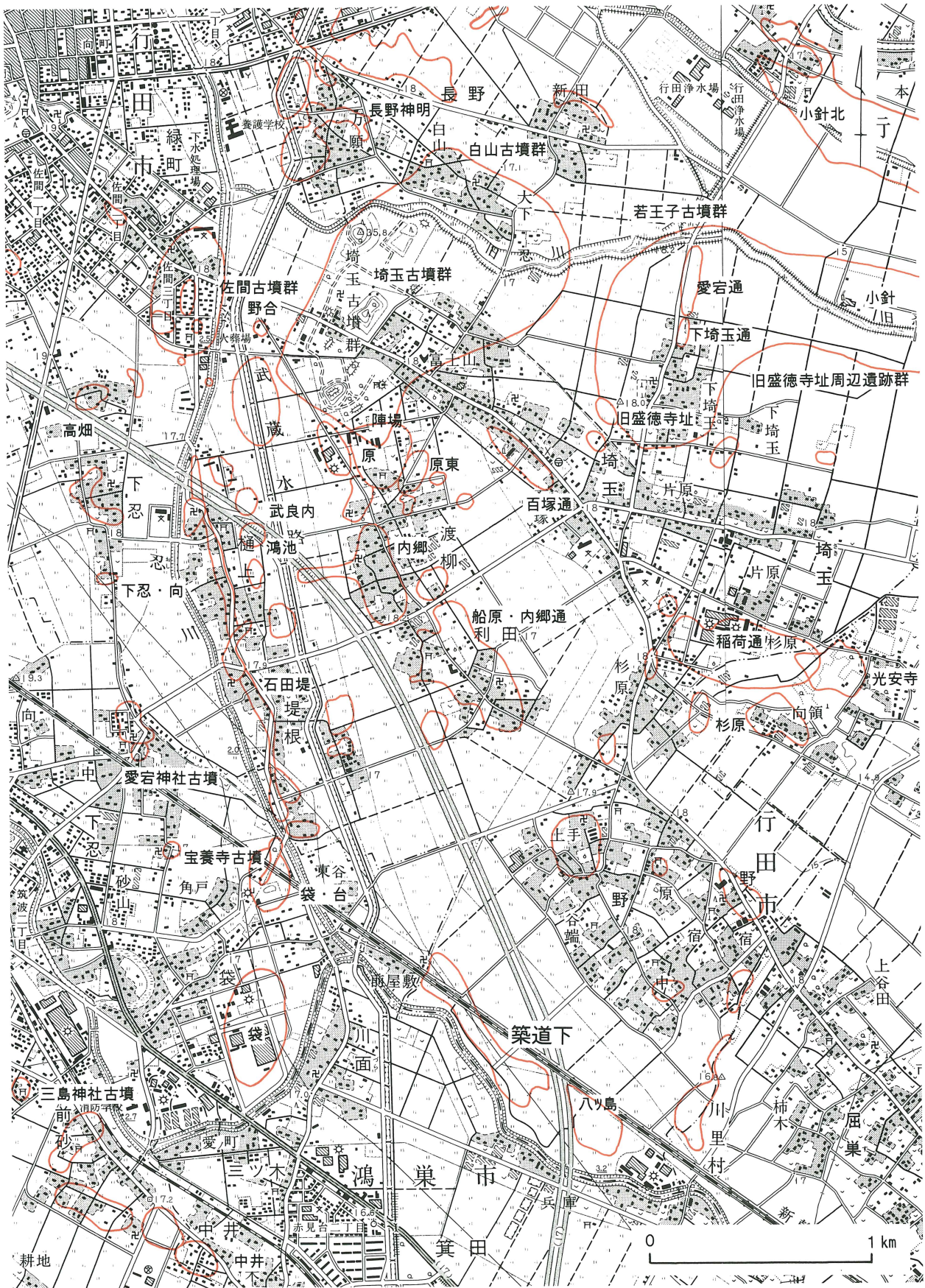
このような古墳の造営には相当な経済力が必要であり、またこれを支える基盤の確立・安定が背景となっている。古墳時代後期集落跡の飛躍的な増加・大型化は、このような社会状況を反映している。

築道下遺跡は、古墳時代後期初頭から突如として営まれはじめた巨大集落である。特に、古墳時代後期の住居跡は、自然堤防上という幅の狭い空間に次々と建て替えられ、重複が激しい。また重複する住居間の時間差がきわめて小さく、各住居跡の存続期間はきわめて短いという特徴がある。このような状況から、築道下遺跡の古墳時代集落は、単に農耕を中心とした生産活動のみを営んだ集落とは考えがたい。北方約4kmの地点に営まれた埼玉古墳群と築道下遺跡集落の開始・展開時期の併行は注目される。また元荒川・忍川の水運という地理的背景もあわせると、埼玉古墳群の築造に関与した（関与させられた）集落である可能性がある。さらに、元荒川と忍川に挟まれた自然堤防上に立地する袋・台遺跡でも築道下遺跡と併行する時期にも集落が展開し、関連深い遺跡である。

奈良・平安時代の遺跡として行田市野合遺跡、行田市原遺跡、行田市百塚通遺跡、内郷遺跡、小針遺跡、下埼玉通遺跡、行田市愛宕通遺跡、鴻池遺跡、行田市八ッ島遺跡などがあげられ、築道下遺跡でも住居跡200軒以上、掘立柱建物跡200棟以上の巨大な集落跡が営まれ続けている。

寺院跡の行田市旧盛徳寺址には、原位置が保たれていないものの、境内に奈良時代特有の円形の柱座造出をもつ礎石が現存している。礎石の規模と焼損状況から、大型建造物の建立と建造物の炎上が想定されている。盛徳寺の寺歴は不詳であるが、寺伝によれば大同年間（806～809）に創建され、保元2年（1157）と天文年間（1532～1554）に再建されたと伝えられる。数度の発掘調査が行われたが、創建時の規模や伽藍配置

第2図 周辺の遺跡



国土地理院発行 1 : 25, 000地形図 「熊谷」「加須」

などは解明されていない。また出土した瓦には大同年間まで遡るものはなく、8世紀第4四半期、9世紀第3四半期、鎌倉時代中期の3時期の瓦と16世紀前半の土器が発見されている。一方、埼玉古墳群の南東の行田市浅間塚古墳上には延喜式内社の行田市前玉神社が鎮座し、武蔵国造一族らが奉斎した可能性がある。

築道下遺跡の周辺は、奈良・平安時代には埼玉郡埼玉郷に属していたと考えられている。郡の前身の評制施行は資料がなく、埼玉郡の成立期についても不明である。郡名は神亀3年(726)山背国計帳や続日本紀天平5年(733)6月条に確認できる。国郡制施行後間もなく埼玉郷が置かれたらしく、郡下5郷の中心として郡衙が設置された。律令制施行後は、埼玉郡の行政・文化の中心となった。旧盛徳寺域の西方隣接地点から「矢作□印」と読める大和古印が発見され、埼玉郡衙との関連から注目されている。また旧盛徳寺址の東方の低地には、宝暦3年(1753)に忍城主阿部正因が小^お埼玉沼と埼玉津と定め、歌碑が建立された。さらに北方の旧忍川北岸には小針沼(埼玉沼)が所在していた。歌碑の背面には、「埼玉の小埼玉の沼に鳴ぞ翼きる己が尾に霧り置ける霜を掃うとにあらし(1744)」「埼玉の津に居る船の風を疾み綱は絶ゆとも言な絶えねぞ(3380)」という2首の万葉歌が刻まれている。しかしながら、埼玉郡衙・埼玉津の所在地には諸説あり、現段階においては比定するに足る明確な傍証がなく、明らかにはなっていない。

築道下遺跡の遺構のなかには大地震に伴う地割れの影響を受けているものが少なくない。特にF区においてはBKグリッド以南にその影響が著しく、地割れ、地滑り、液状化現象に伴う噴砂の通り道である砂脈等

の傷跡が数多く残されている。このような大地震の影響は埼玉県北部の行田市・熊谷市・深谷市・妻沼町・岡部町など広範囲にわたる遺跡の発掘調査で確認され、妻沼低地を中心に分布するものと推定されている。築道下遺跡はその分布域の最南端に位置している。築道下遺跡の発掘調査の成果からは大地震の時期を確定し得ないが、妻沼低地に所在する遺跡の発掘調査成果からは、8世紀後半から10世紀後半までの間と考えられている。『類聚国史』には弘仁9年(818)、『日本三代実録』には元慶2年(878)に武蔵国の地震被害の記述が残され、以後13世紀まで記録はみられない。なお、築道下遺跡の砂脈断面には二時期の地震痕跡が認められ、昭和6年(1931)9月21日に発生した西埼玉地震に伴う砂脈の可能性が示唆されている。

中世に至っては、久下・忍・河原・長野・行田・麻績・渡柳・野・津之戸・笠原・真名板・多賀谷などの武士が蟠踞した地域である。これらの氏名は現在も地名として残り、館跡と推定される遺跡も多い。周辺では中世遺跡の調査例は少ないが、内郷遺跡で館跡に伴うものと推定される溝跡が発見されている。築道下遺跡で発見された中世墓跡もこの時期の武士との関連が推定される。戦国時代には行田に忍城が築かれている。天正18年(1590)に豊臣秀吉が後北条氏を滅ぼした小田原征伐に伴い、後北条氏の配下にあった忍城は水攻めにされ、この際に石田三成が築いた石田堤は部分的に現存している。この堤は幾重にも版築を繰り返して築き上げられたもので、想像を絶する人員を徴発・動員を可能にした豊臣方の軍事力・経済力を垣間見ることができるといえる。

III 遺跡の概要

築道下遺跡は、埼玉県行田市大字野字3744番地5他に所在し、一般国道17号熊谷バイパスとJR上越新幹線が交差する南西区域に広がる。行田市の最南端に位置し、東経139°29'15"、北緯36°05'51"付近である。元荒川左岸に沿って延びる自然堤防上に立地し、遺跡の範囲は長さ約800m、幅80~250mに及ぶ。遺跡の北東半部に上越新幹線が貫き、北辺部に沿って千間堀水路が流れる。

発掘調査は公園緑地として保存される箇所を除く64,300㎡を対象とし、平成7年4月から平成10年3月まで実施された。上越新幹線・千間堀水路・現道を目安として、便宜的にA~H区の8調査区に分割して調査を進めた。本書の対象とする区域はE・F・G・H区の32,550㎡である(第3図)。

E区の範囲はAU~BB-35~58グリッドにあたり、調査面積は6,300㎡である。また千間堀水路護岸工事中に発見された第21号井戸跡も、E区の遺構として扱う。

発見された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒・掘立柱建物跡3棟、奈良時代~中世の土壙39基・井戸跡20井・溝跡53条・茶毘跡9基・ピット多数である。

F区は立地する自然堤防が二又に分かれる箇所にあたり、又部は河川の氾濫によって抉られている。自然堤防は元荒川に向かって下降し、自然堤防と平行方向に大地震に伴う地滑りの被害を受け、段差が生じている。F区の範囲はAX~BS-32~60グリッドにあたり、調査面積は23,150㎡である。F・C区は両区に跨る第59号溝跡—C区第125号溝跡が境となる。ただし、従来のC区範囲に所在する土壙・井戸跡・C区第125号溝跡土層断面は『築道下遺跡III』に、C区第125号溝跡出土遺物はF区第59号溝跡出土遺物と併せて本書に報

告する。

発見された遺構は、古墳時代末~奈良・平安時代の竪穴住居跡196軒、古墳時代末~奈良・平安時代~中世にかかる掘立柱建物跡89棟・柵列跡12列・土壙543基・井戸跡244井・溝跡137条・茶毘跡5基・墓壙1基・性格不明遺構2基・ピット多数である。

G区は遺跡北西端の道路築造工事に伴う調査で、C~U-2~18グリッドにあたる、調査面積2,600㎡である。

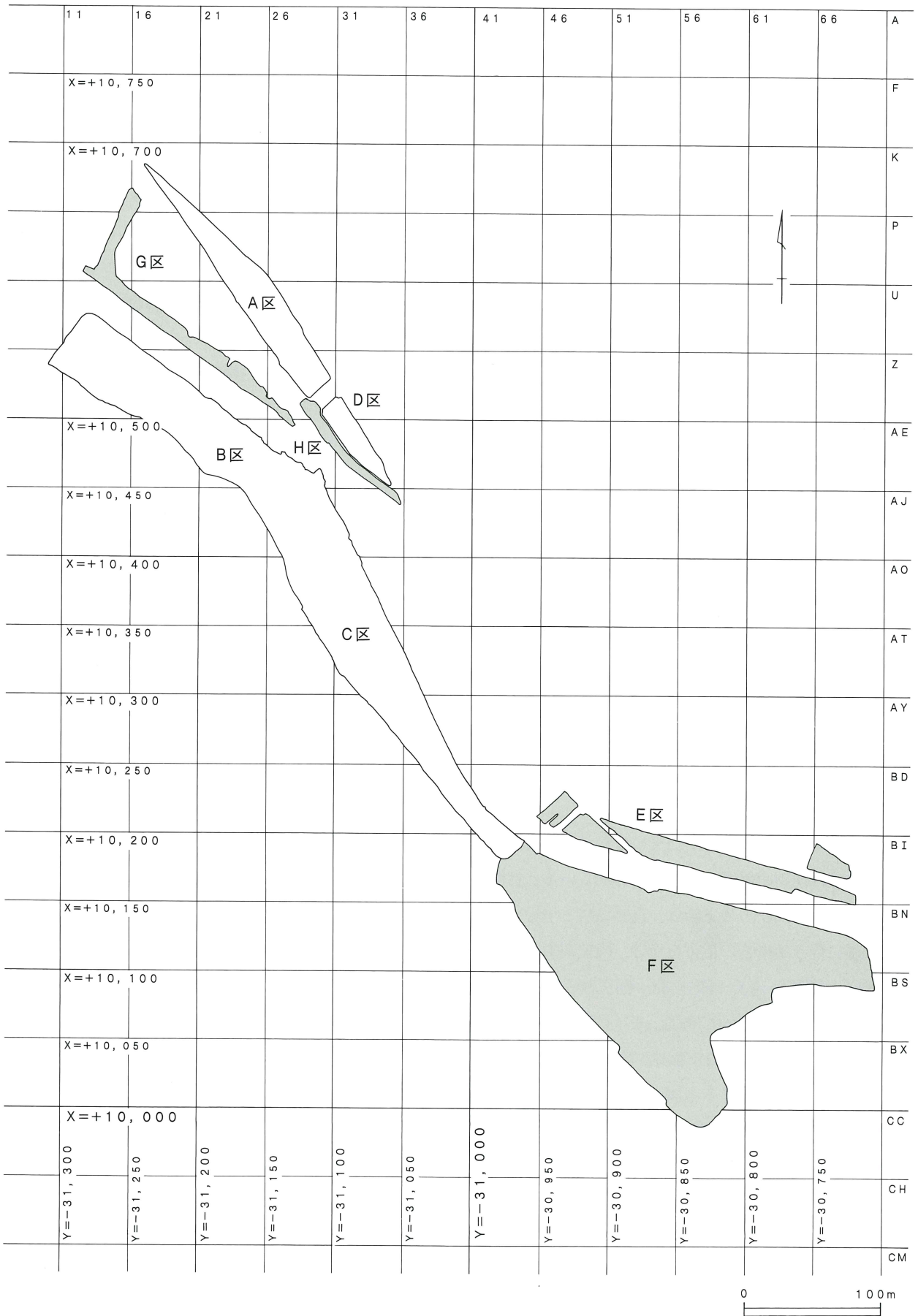
発見された遺構は、古墳時代後期~奈良・平安時代の竪穴住居跡20軒、奈良・平安時代の掘立柱建物跡9棟、古墳時代後期~中世の土壙69基・井戸跡16井・溝跡49条・ピット多数である。

H区はD区南辺に沿った道路築造工事に伴う調査である。DII区として調査計画を立てたが、調査着手段階には既にD区の報告書が刊行され、遺構番号や遺物取り上げ方法等も煩雑となるため、H区と称して調査を行った。D区との境には既に側溝が埋設されており、この際に幅約1mほどが攪乱されている。H区の範囲はR~Z-18~26グリッドにあたり、調査面積は500㎡である。

発見された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒・掘立柱建物跡5棟・柵列跡2列、奈良時代~中世の土壙22基・井戸跡9井・溝跡14条・ピット多数である。

遺物は住居跡、掘立柱建物跡、土壙、井戸跡、溝跡などの遺構から土師器、須恵器を中心に、中世陶器、石製模造品、砥石、紡錘車、玉類、鉄製品(錠・火打金・鉄鎌・鎌・斧・刀子)、木製品(椀・横槌・曲物)などが出土している。なかでも須恵器は南比企産を主体に末野産が次いでいるが、湖西産・群馬産・新治産も含まれ、数量も多い。

第3図 調査区配置図



IV E区の遺構と遺物

E区から発見された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒・掘立柱建物跡3棟、主に奈良時代～中世の土壇39基・井戸跡20井・溝跡53条・茶毘跡9基・ピット多数である。

住居跡はF区に広がる住居跡群の北辺にあたる。1軒は大半が調査区外にあり、土壇・溝跡と重複し、詳細は不明である。残る1軒も残存状態は悪く、出土遺物も少ない。

掘立柱建物跡はいずれも桁行3間×梁行2間と想定される側柱建物跡である。建物や柱掘形の規模、軸方位などからF区から続く掘立柱建物跡群の北端にあたる。

土壇は調査区全体に分布している。一部に集中する傾向が窺えるものの、平面形態や規模は多岐にわたり、関連性を見いだせない。いずれの土壇も用途・性格は不明である。第33号土壇からは縄文時代後期後葉の土器片が出土し、注目される。ただし、築道下遺跡ではこの時期の住居跡は発見されていない。

井戸跡も調査区全体に分布しているが、2井の井戸跡が隣接する箇所が3地点で認められる。平面規模では、径1m以下の井戸跡と径2m前後の井戸跡に大別される。発掘の安全を図るため、底面まで掘削できたものは少ないが、さほど深く掘り込まなくても、湧水点に達しているようである。

溝跡は調査区全体に分布している。遺跡の立地する自然堤防に直交もしくは平行する直線的な一群と、蛇

行し走行距離が短い一群に大別される。前者は数条が併行し、A・B・C・D・G・H区で確認されている中世段階の区画溝として捉えられる。後者は浅く、走行方位も乱れ、用途・性格は不明である。第11号溝は幅広の割に浅く、他の溝跡と堆積していた覆土が明らかに異なる。奈良・平安時代の遺物が出土し、該期の溝跡と認定される。第3号掘立柱建物跡の存在を例外とするならば、該期の集落北辺を区画する性格も想定される。

ピットは調査区全域にわたって、多数検出されている。このうち、大多数のピットは用途・性格が不明で、時期を確定し得る遺物も出土していない。なかには柱痕や柱抜取痕を明瞭に残すものも認められる。配置の規則性や組み合わせを把握することはできなかったが、建物跡の存在も想定される。また直径0.3～0.4m程度、深さ1.5mを超えるものが数本みられ、F区の調査成果から鑑みると、井戸跡であった可能性が高い。

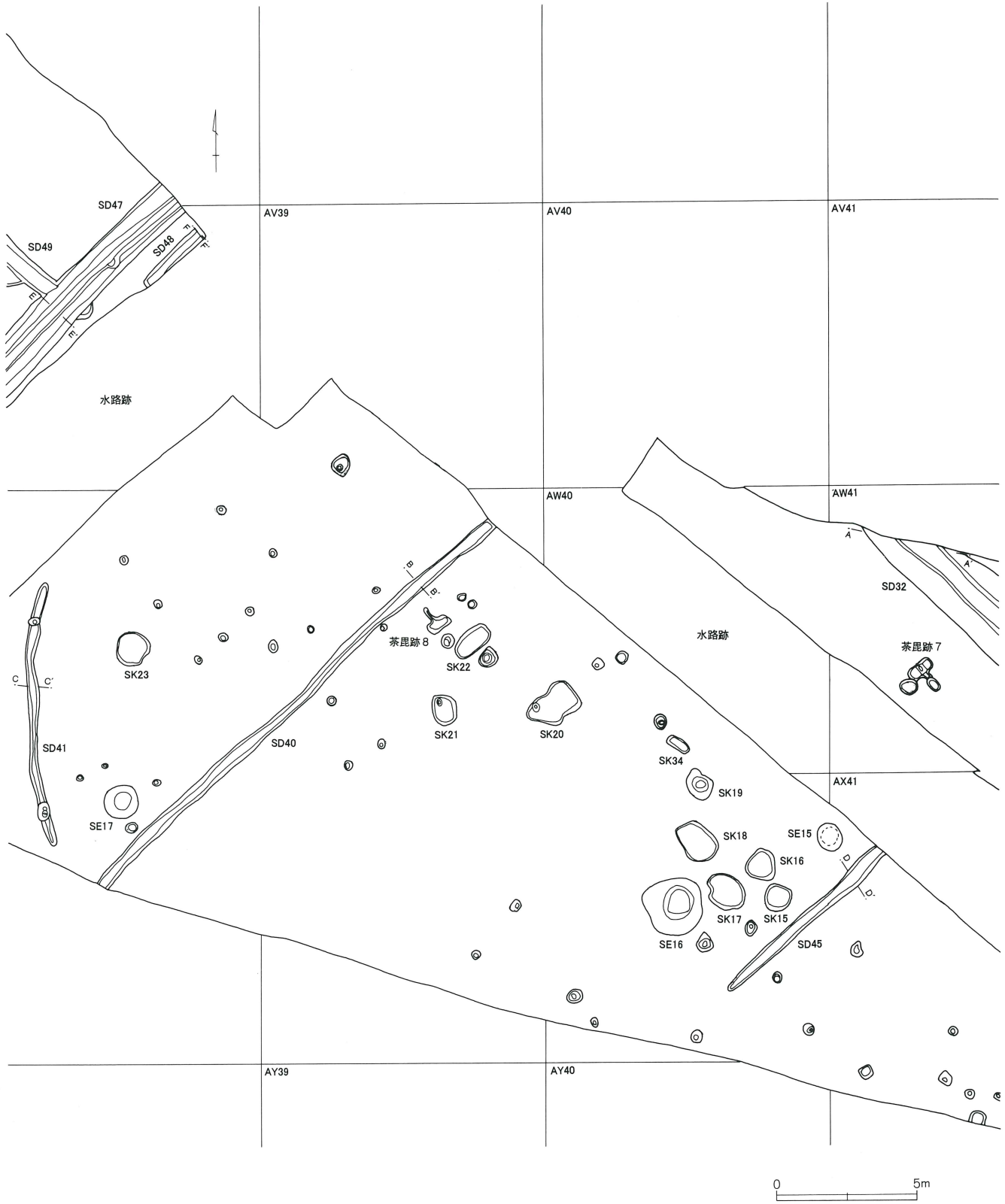
茶毘跡は10基発見されているが、群を形成せず、方向性も一定していない。中世の集落は確認されていないため確かなことはいえないが、可住地が限られる自然堤防上の集落の在り方から推測すると、集落縁辺部に展開しているようである。

遺物は住居跡、土壇、井戸跡、溝跡などの遺構から土師器、須恵器を中心に、中世陶器、土製品、石製品などが出土している。

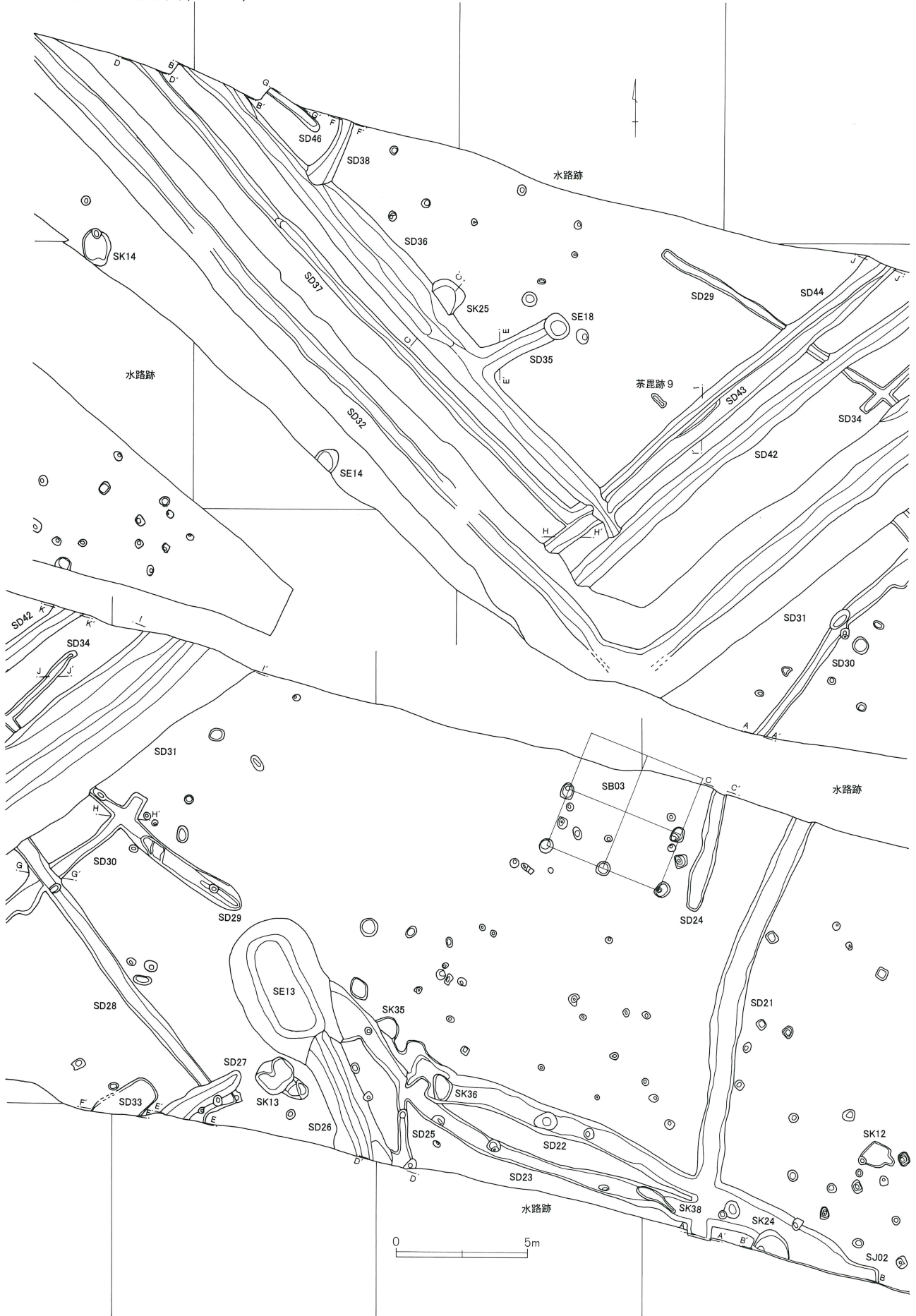
第4図 E区全体図(1)



第5图 E区全体图(2)



第6図 E区全体図(3・4)



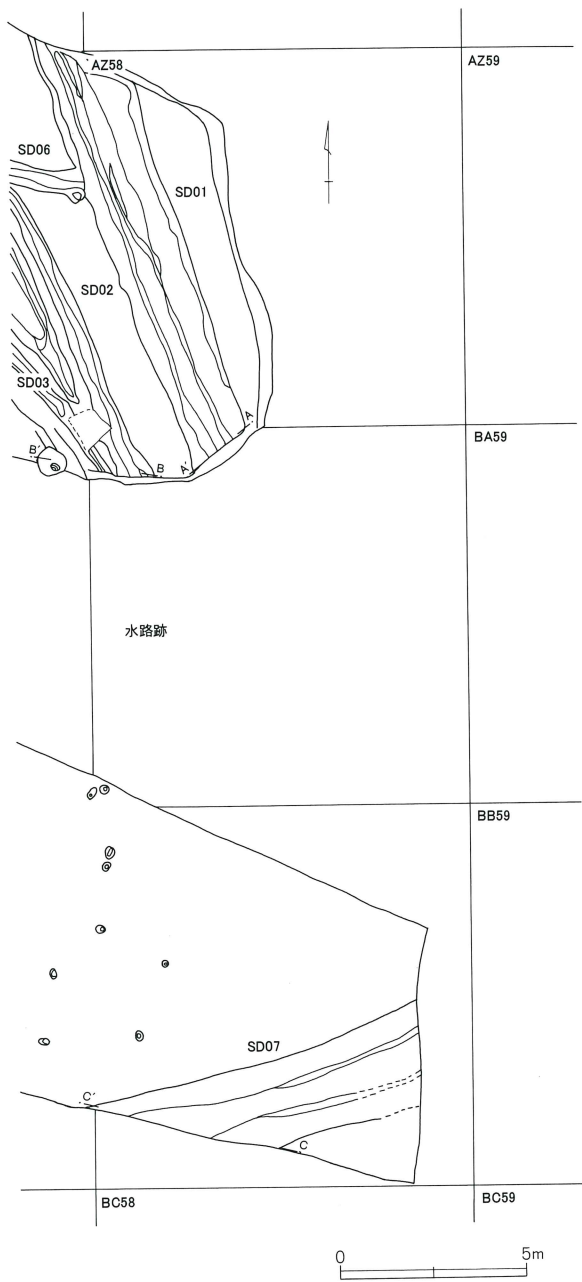
第7图 E区全体图(5·6)



第8図 E区全体図(7)



第9図 E区全体図(8)



1. 住居跡

第1号住居跡 (第10・8図)

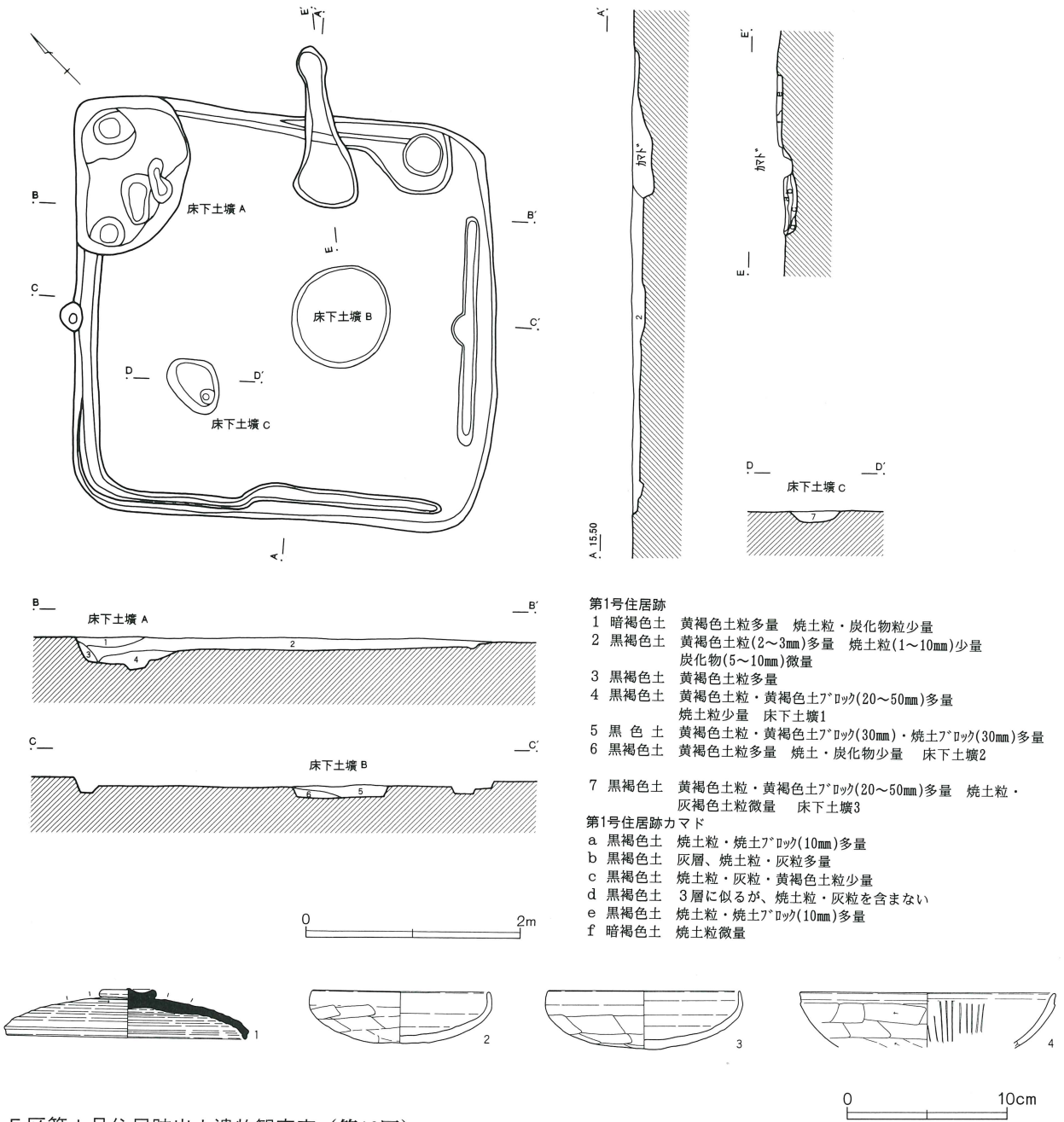
BA55・56、BB55・56グリッドに位置し、重複する遺構はない。

平面形態は方形で、主軸長3.77m、東西幅3.98m、

深さ0.12m、主軸方位N-37°-Eを測る。覆土には黄褐色土粒が多量に含まれているが、基本的には単層で、埋没状況は明確ではない。

カマドは北東壁中央東よりに設置されている。残存

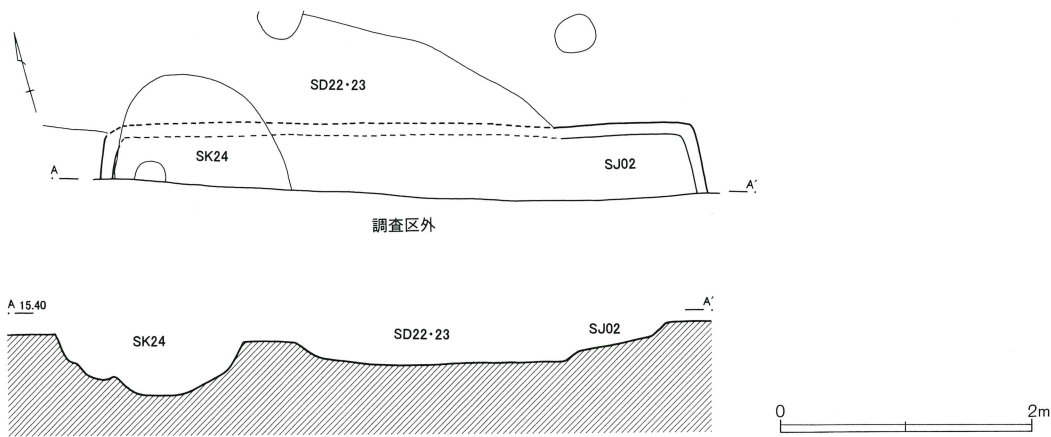
第10図 E区第1号住居跡・出土遺物



E区第1号住居跡出土遺物観察表 (第10図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	蓋	(14.7)	3.0	3.1	W針	A	灰白	40	床下土壌 南比企産
2	坏	10.9	3.2	10.3	WBR	A	橙	95	貯蔵穴
3	坏	11.9	3.6	11.8	WBR	A	にぶい橙	75	貯蔵穴
4	坏	(15.9)	(3.5)		WBR	A	橙	5	床下土壌 内面一部暗文

第11図 E区第2号住居跡



状態が悪く、袖部の所在の有無は明らかではない。燃焼部には灰層が形成されているが、火床面には被熱による焼土化はみられない。壁溝は北東コーナー・南東コーナー付近を除きほぼ全周し、幅0.13～0.24m、深さ0.07mほどである。柱穴は検出されていない。

床下土壌と思われるものが3基確認されている。床下土壌Aは北西コーナー部に付設され、土層の断面観察では判断できないものの、付設位置から貯蔵穴の可能性が高い。平面不整形円形、規模は長径1.46m×短径1.08m×深さ0.12mほどである。床下土壌Bは住居跡中央部に付設され、平面円形、規模は長径0.93m×短

径0.91m×深さ0.11mほどである。床下土壌Cは住居跡南西部に付設され、平面円形、規模は長径0.60m×短径0.43m×深さ0.1mほどである。

出土遺物は少なく、図示したほかに須恵器坏片、土師器甕片が出土している。

第2号住居跡 (第11・6図)

AZ47グリッドに位置し、大半が調査区外にある。また第24号土壌、第22・23号溝跡と重複し、埋没状況やカマド・柱穴等の施設については明確ではない。平面形態は方形と思われ、東西4.36m、深さ0.12mを測る。出土遺物もなく、時期も不明である。

2. 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第12・8図)

桁行3間の側柱掘立柱建物跡で、梁行は2間と想定される。BA55、BB55グリッドに位置し、南半は調査区外にある。

柱間は桁行2.40m、梁行2.30m、規模は桁行7.20mを測り、梁行4.60m、面積33.12m²と推定される。桁行は南北に面し、軸方位をN-8°-Eに向ける。

柱痕がP1・P2・P4・P5・P8で確認されている。柱掘形は方形を基本とし、黄褐色土粒・ブロックを含む黒褐色土が互層に充填されている。P5では柱根固めとして褐色粘質土が詰められている。

遺物は図示したほかに、須恵器甕・坏片、土師器甕・坏片が出土している。

第2号掘立柱建物跡 (第13・7図)

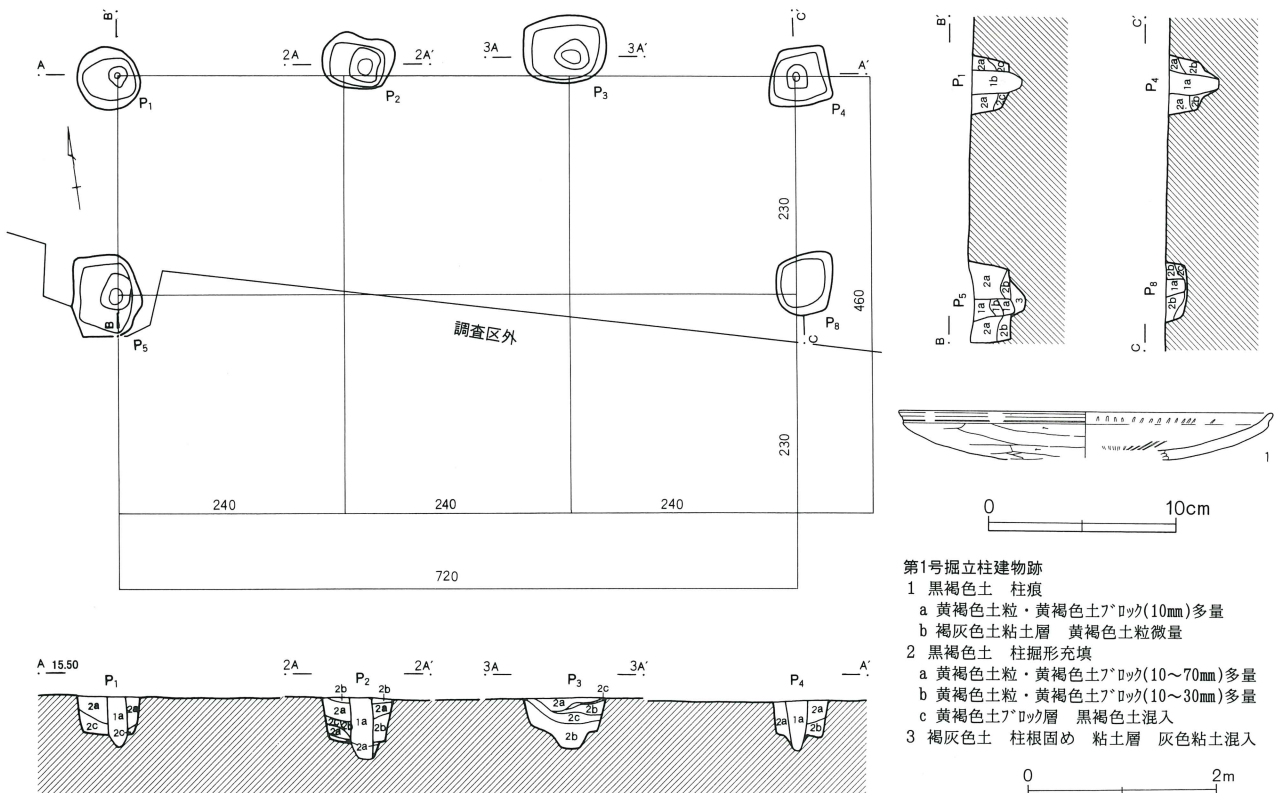
桁行3間の側柱掘立柱建物跡で、梁行は2間と想定される。BA52・53グリッドに位置し、南半は調査区外にある。

柱間は桁行2.10m、梁行2.10m、規模は桁行6.30mを測り、梁行4.20m、面積26.46m²と推定される。桁行は南北に面し、軸方位をN-9°-Eに向ける。

柱痕がP1・P2・P3・P4・P8で確認されている。柱掘形は隅柱がL字形を呈し、ほかは方形である。黄褐色土粒・ブロックを含む黒褐色土が互層に充填されている。P3では柱根固めとして褐色土が敷かれている。

遺物は図示し得ないが、須恵器坏片、土師器甕・坏片が出土している。

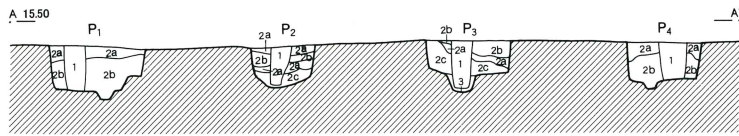
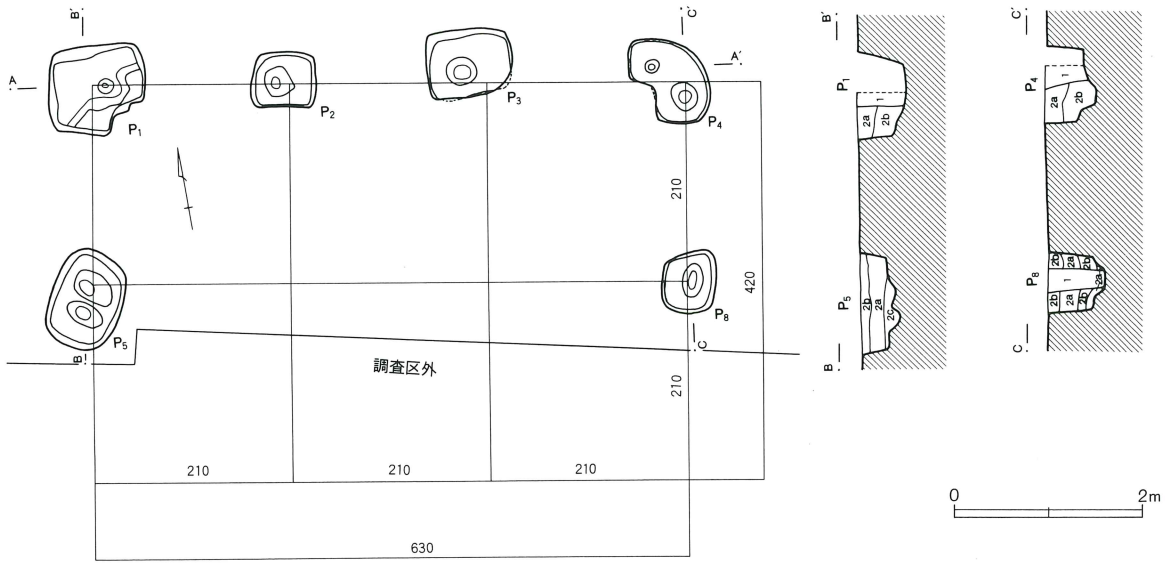
第12図 E区第1号掘立柱建物跡・出土遺物



E区第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第12図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	盤	(19.8)	(2.5)		WBR	A	灰黄褐	10	P2

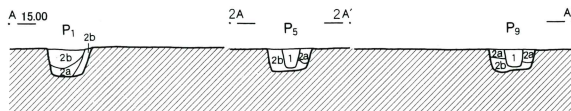
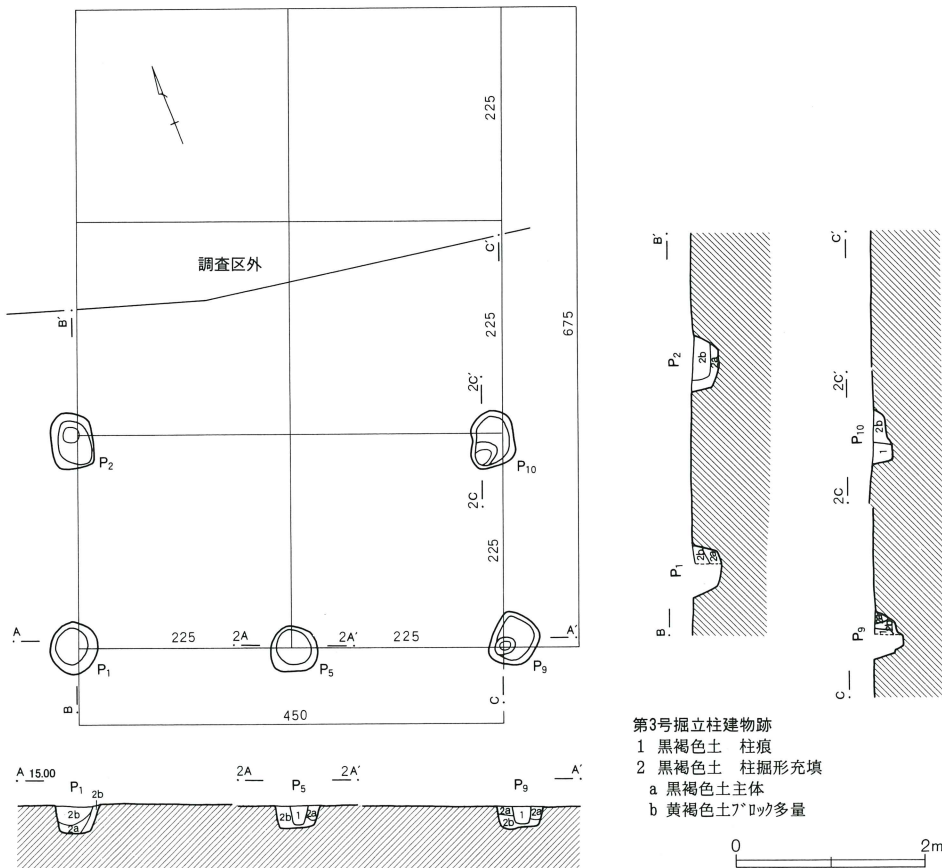
第13図 E区第2号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡

- 1 黒褐色土 柱痕 黄褐色土粒(1mm)多量
- 2 黒褐色土 柱掘形充填
 - a 黄褐色土粒・黄褐色土7°ロツク(50~100mm)多量
 - b 黄褐色土粒・黄褐色土7°ロツク(30mm)少量 焼土粒微量
 - c 黄褐色土7°ロツク少量
- 3 褐色土 柱根固め 黒褐色土粒多量

第14図 E区第3号掘立柱建物跡



第3号掘立柱建物跡

- 1 黒褐色土 柱痕
- 2 黒褐色土 柱掘形充填
 - a 黒褐色土主体
 - b 黄褐色土7°ロツク多量

第3号掘立柱建物跡（第14・6図）

梁行2間の側柱掘立柱建物跡で、桁行は3間と想定される。AX46・47、AY46・47グリッドに位置し、北半は調査区外にある。

柱間は桁行2.25m、梁行2.25mで、規模は梁行4.50mを測り、桁行6.75m、面積30.375㎡と推定される。

桁行は東西に面し、軸方位をN-21°-Eに向ける。

柱痕がP5・P9・P10で確認されている。柱掘形は隅丸方形を基本とし、黒褐色土と黄褐色土ブロックの混合土が互層に充填されている。

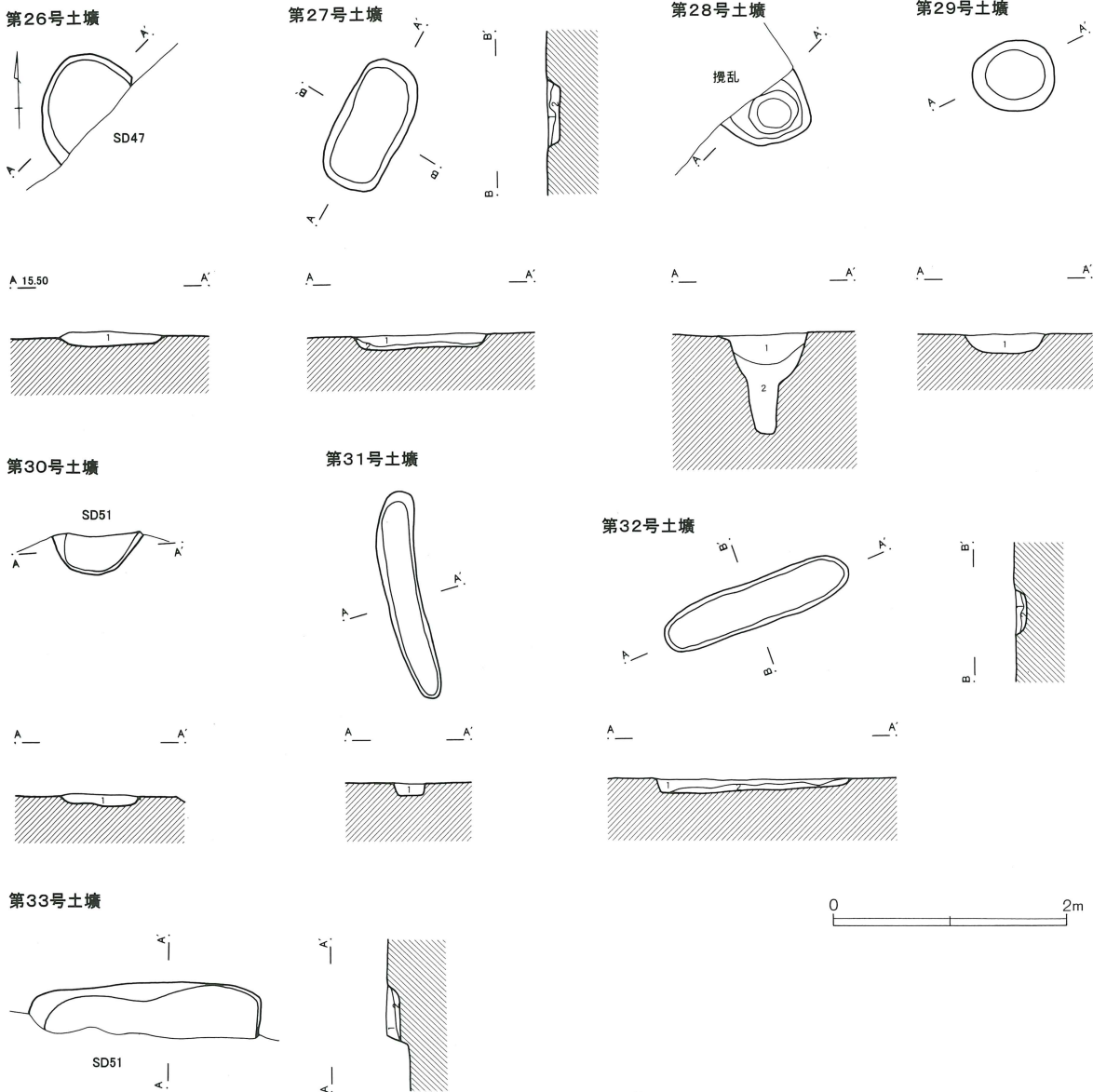
遺物は図示し得ないが、須恵器坏片、土師器甕・坏片が出土している。

3. 土壙

発見された土壙は39基あり、調査区全体にわたって分布している。一部に集中する傾向が窺えるものの、平面形態や規模は多岐にわたり、関連性を見いだせない。いずれの土壙も用途・性格は不明である。

出土遺物は少なく、図示し得たのは第3・20・33号土壙の3基のみである。時期を特定し得る資料に欠くものの、集落が展開する古墳時代後期～奈良・平安時代もしくは中世に求められよう。第33号土壙からは縄

第15図 E区土壙(1) (第4図)



第28号土壙
1 黒褐色土 黄褐色土粒(2~5mm)若干
2 黒褐色土 黄褐色土粒(2~5mm)少量

第29号土壙
1 黒褐色土 人為的堆積 黄褐色土フック(5~30mm)少量

第30号土壙
1 灰黄褐色土 人為的堆積 黄褐色土フック(5~20mm)少量

第26号土壙
1 灰黄褐色土 黄褐色土粒・炭化物粒(2~5mm)若干

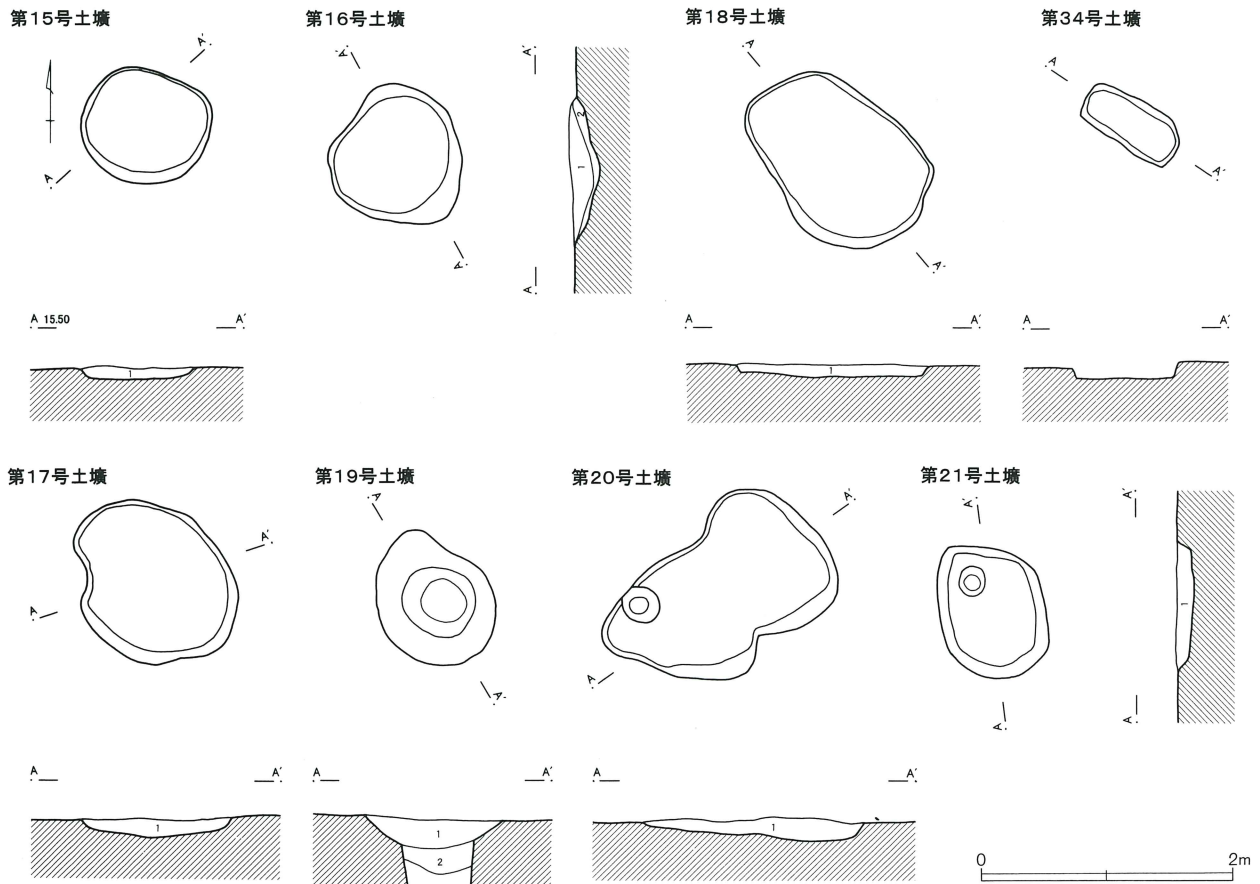
第27号土壙
1 黒褐色土 炭化物粒(2~10mm)少量
2 黒褐色土 炭化物(2~30mm)多量 焼土粒・フック少量

第31号土壙
1 黒褐色土 黄褐色土粒少量 若干だが、ザラ感がある

第32号土壙
1 黒褐色土 鉄分粒・黄褐色土フック(10~20mm)少量
2 暗褐色土 黒褐色土フック(5~10mm)微量

第33号土壙
1 灰黄褐色土 黒褐色土フック(20~30mm)多量
2 濃い黄褐色土 鉄分粒微量

第16図 E区土壌(2) (第5図)



第15号土壌
1 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土小片⁷ (10~20mm)多量

第16号土壌
1 黒褐色土 黄褐色土粒多量
2 褐色土 黒褐色土粒多量 黄褐色土

第17号土壌
1 黒褐色土 黄褐色土粒多量

第18号土壌
1 黒褐色土 黄褐色土粒多量

第19号土壌
1 黒褐色土 黄褐色土粒多量 白色粒火山灰少量
2 黒褐色土 黄褐色土粒少量 焼土粒・黄橙色土粒(1~2mm)微量
3 暗褐色土 黄褐色土粒多量
4 黒褐色土 粘質土 黄褐色土粒多量

第20号土壌
1 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土小片⁷ (10~20mm)多量

第21号土壌
1 黒褐色土 黄褐色土粒多量

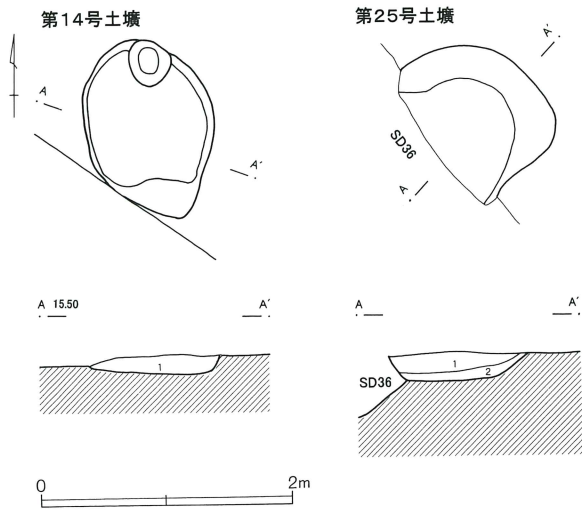
第22号土壌
1 黒褐色土 黄褐色土粒多量

第23号土壌
1 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土小片⁷ (10~20mm)多量

文時代後期後葉の深鉢片が出土している。築道下遺跡では縄文時代の遺構は発見されていないことから、概に時期を特定し得ないものの、縄文時代後期後葉の

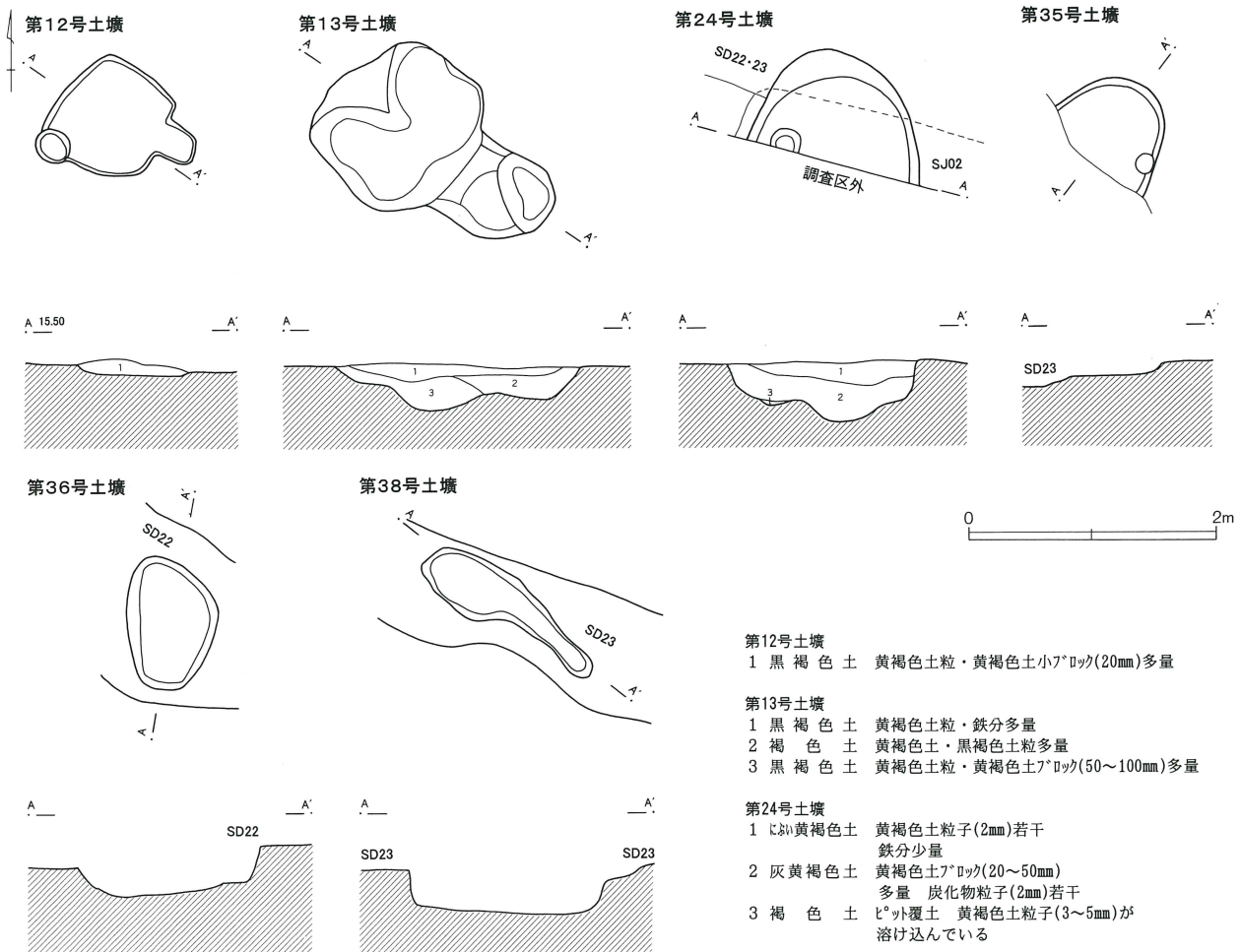
深鉢片のみが出土している状況からこの時期の土壌として捉えられよう。

第17図 E区土壌(3) (第6図)



- 第14号土壌
 1 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土小7°ツツ(10~30mm) 多量 焼土粒微量
- 第25号土壌
 1 にお黄褐色土 黄褐色土粒(3mm)若干 白色土粒をまばらに混入 粘質土
 2 にお黄褐色土 黄褐色土7°ツツ(5~20mm)多量 粘質土

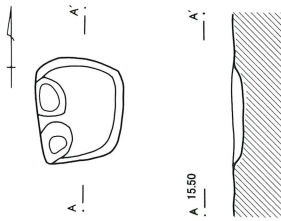
第18図 E区土壌(4) (第6図)



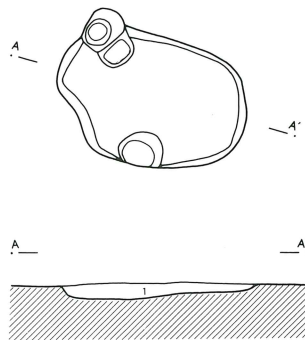
- 第12号土壌
 1 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土小7°ツツ(20mm)多量
- 第13号土壌
 1 黒褐色土 黄褐色土粒・鉄分多量
 2 褐色土 黄褐色土・黒褐色土粒多量
 3 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°ツツ(50~100mm)多量
- 第24号土壌
 1 にお黄褐色土 黄褐色土粒子(2mm)若干 鉄分少量
 2 灰黄褐色土 黄褐色土7°ツツ(20~50mm) 多量 炭化物粒子(2mm)若干
 3 褐色土 ヒット覆土 黄褐色土粒子(3~5mm)が溶け込んでいる

第19図 E区土壌(5)(第7図)

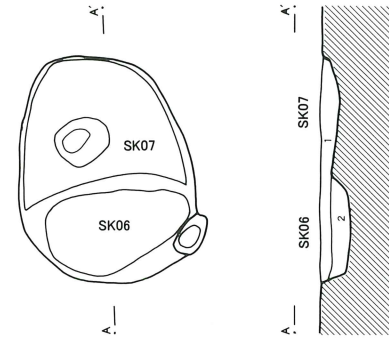
第4号土壌



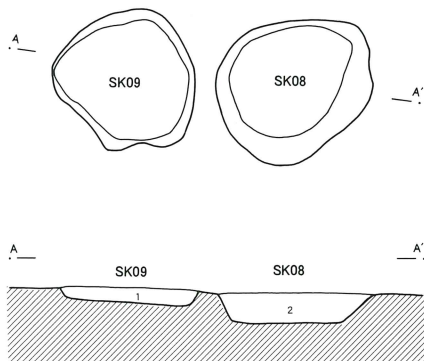
第5号土壌



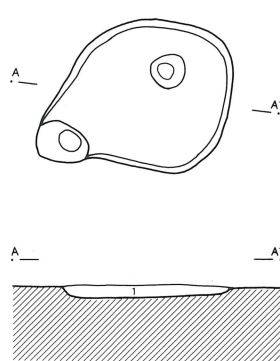
第6・7号土壌



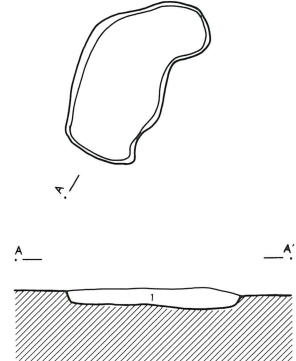
第8・9号土壌



第10号土壌

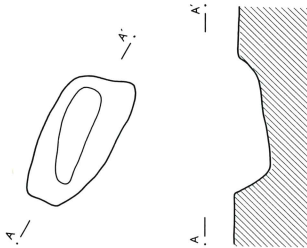


第11号土壌



0 2m

第39号土壌



第4号土壌

1 黒褐色土 黄褐色土粒多量

第5号土壌

1 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°ブロック(50mm)多量

第6・7号土壌

1 暗褐色土 黄褐色土粒多量
2 黒褐色土 黄褐色土粒少量

第8・9号土壌

1 黒褐色土 SK9覆土 黄褐色土粒多量 黄褐色土7°ブロック少量
2 黒褐色土 SK8覆土 黄褐色土粒・黄褐色土7°ブロック(50~100mm)多量

第10号土壌

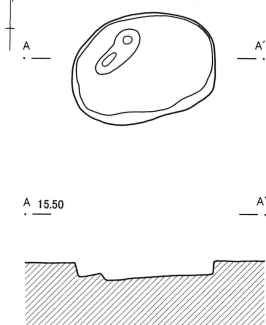
1 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°ブロック(30~50mm)多量

第11号土壌

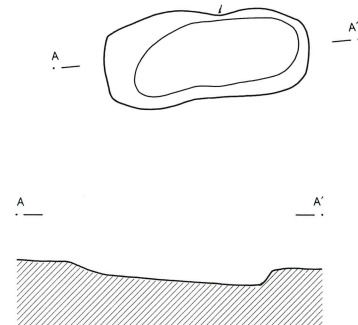
1 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°ブロック(50~100mm)多量

第20図 E区土壌(6)(第8図)

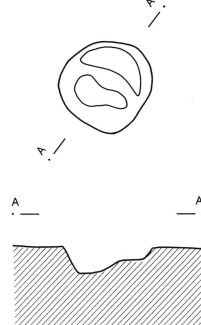
第1号土壌



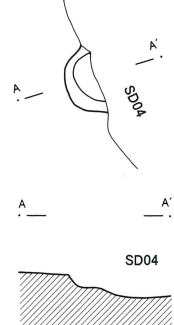
第2号土壌



第3号土壌



第37号土壌



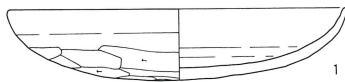
0 2m

E 区土壌

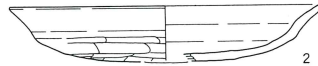
番号	グリッド	遺構図	全体図	形 状	長径m	短径m	深さm	重 複 遺 構	出土遺物・その他
1	AZ55	20	8	楕 円	1.15	0.84	0.14		土師器甕 灰釉
2	AZ55/56	20	8	楕 円	1.64	0.63	0.19		
3	BA56	20	8	円	0.71	0.66	0.22		土師器甕/坏
4	AY49	19	7	隅 丸 方	0.82	0.68	0.08		
5	AY48/49	19	7	不 整	1.54	1.03	0.11		
6	AZ49	19	7	不 整 楕 円	(0.85)	1.40	0.24	SK07	
7	AZ49	19	7	不 整	(1.07)	1.36	0.15	SK06	土師器甕
8	AZ48	19	7	不 整	1.30	1.07	0.24		須恵器坏 土師器甕
9	AZ48	19	7	不 整	1.16	0.99	0.13		須恵器坏 土師器甕
10	AZ48	19	7	不 整	1.70	1.27	0.09		須恵器甕/坏 土師器甕/坏
11	AZ49	19	7	不 整	1.43	0.58	0.16		
12	AZ47	18	6	不 整	1.16	0.92	0.12		土師器甕
13	AY45	18	6	不 整	2.00	1.30	0.37		須恵器甕 土師器甕
14	AW41 AX41	17	6	楕 円	1.46	1.02	0.16		土師器甕/坏
15	AX40	16	5	円	1.00	0.89	0.10		
16	AX40	16	5	円	1.05	0.97	0.24		須恵器坏 土師器甕
17	AX40	16	5	円	1.34	1.16	0.14		
18	AX40	16	5	楕 円	1.53	1.05	0.09		
19	AW40 AX40	16	5	不 整 円	1.12	0.90	1.20		土師器甕
20	AW39/40	16	5	不 整	1.84	0.93	0.18		土師器甕/坏
21	AW39/40	16	5	隅 丸 方	1.03	0.84	0.13		土師器甕
22	AW39/40	16	5	隅 丸 長 方	1.40	0.76	0.13		
23	AW38	16	5	円	1.16	1.10	0.10		土師器甕
24	AZ47	18	6	円	(0.89)	1.42	0.48	SJ02 SD22/23	
25	AX42	17	6	円	(0.96)	1.24	0.22	SD36	
26	AV37	15	4	円	(0.60)	0.95	0.12	SD47	
27	AW37	15	4	隅 丸 長 方	1.14	0.58	0.11		
28	AV37	15	4	不 整	(0.48)	0.72	0.83		
29	AU37	15	4	円	0.70	0.60	0.15		
30	AV37	15	4	円	(0.32)	0.72	0.09	SD51	
31	AV36	15	4	楕 円	1.78	0.28	0.10		
32	AW36	15	4	楕 円	1.66	0.40	0.11		
33	AV36	15	4	楕 円	1.97	(0.49)	0.11	SD51	
34	AW40	16	5	長 方	0.83	0.37	0.12		
35	AY46	18	6	円	(0.76)	0.96	0.10	SD23	
36	AY46	18	6	楕 円	1.08	0.74	0.40	SD22/23	
37	AY56 AZ56	20	8	円	(0.25)	0.54	0.24	SD04	
38	AZ47	18	6	不 整	1.59	0.46	0.40		
39	AZ49	19	7	隅 丸 長 方	1.08	0.56	0.29		

第21図 E 区土壌出土遺物

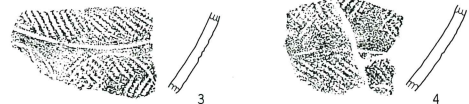
第3号土壌



第20号土壌



第33号土壌



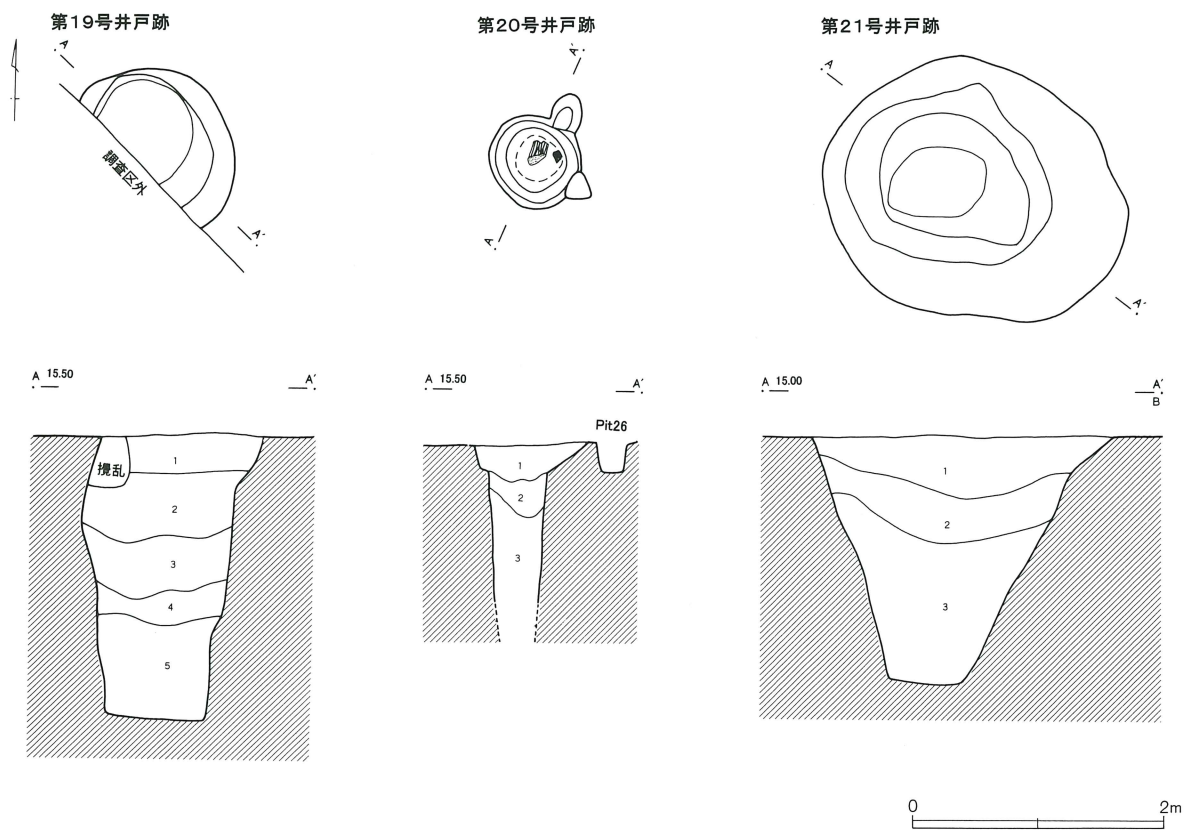
0 10cm

E 区土壌出土遺物観察表 (第21図)

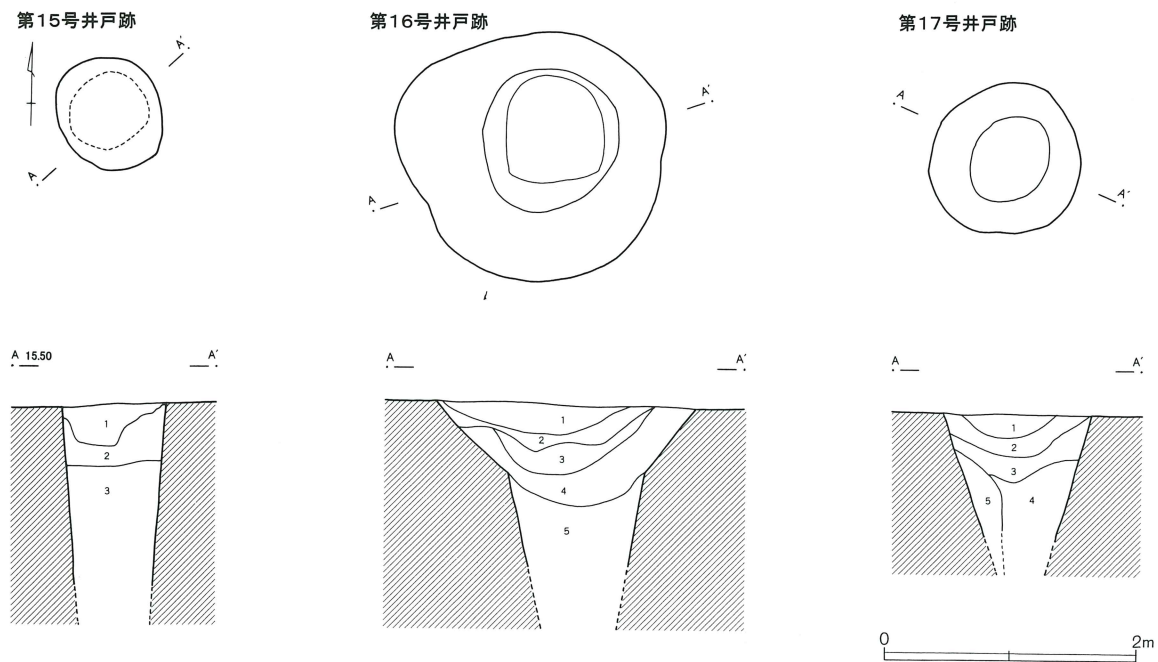
番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	坏	17.9	3.7	16.1	WBR	A	橙	75	SK03
2	盤	(16.6)	2.9	(13.9)	WBR	A	にぶい橙	20	SK20
3	深鉢				BR	B	にぶい橙		SK33 後期後葉
4	深鉢				BR	B	にぶい橙		SK33 後期後葉

4. 井戸跡

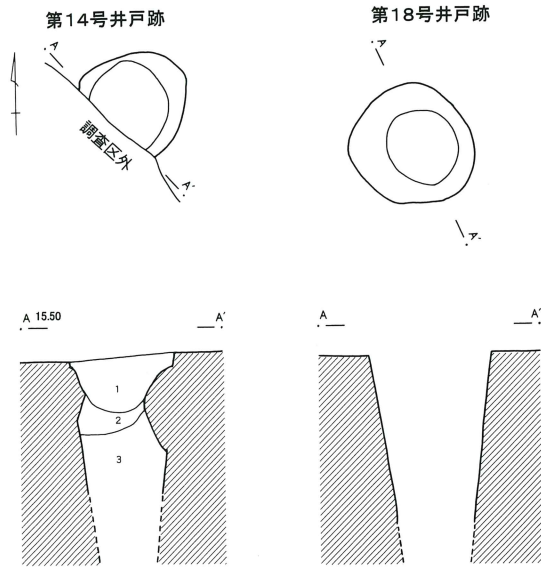
第22図 E区井戸跡(1) (第4図)



第23図 E区井戸跡(2) (第5図)



第24図 E区井戸跡(3)(第6図)



第19号井戸跡

- 1 黒褐色土 黄褐色土 7° ブロック(30~50mm)・粘土 7° ブロック(20~30mm)多量
- 2 灰黄褐色土 粘土 7° ブロック(20~40mm)・鉄分粒多量 礫包含土
- 3 褐灰色土 鉄分粒少量 黄褐色土粒微量
- 4 暗青灰色土 白色土 7° ブロック(20~30mm)少量 水分多量
- 5 青黒色土 水分多量 粘性強

第20号井戸跡

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒・鉄分粒多量 粘土 7° ブロック(10~20mm)微量
- 2 黒褐色土 鉄分粒多量 粘土 7° ブロック(20~40mm)混入
- 3 灰黄褐色土 鉄分粒混入 下層青灰色土 木片は根幹部分がしっかり残る

第21号井戸跡

- 1 暗褐色土 褐色土 7° ブロック混入 焼土 7° ブロック・炭化物少量
- 2 褐灰色土 粘土層
- 3 黒色土 ヒ - ト 層 植物が多く杭等も出土

第15号井戸跡

- 1 2層の黒褐色土・黄褐色土混入層
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒少量
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒少量 粘質土

第16号井戸跡

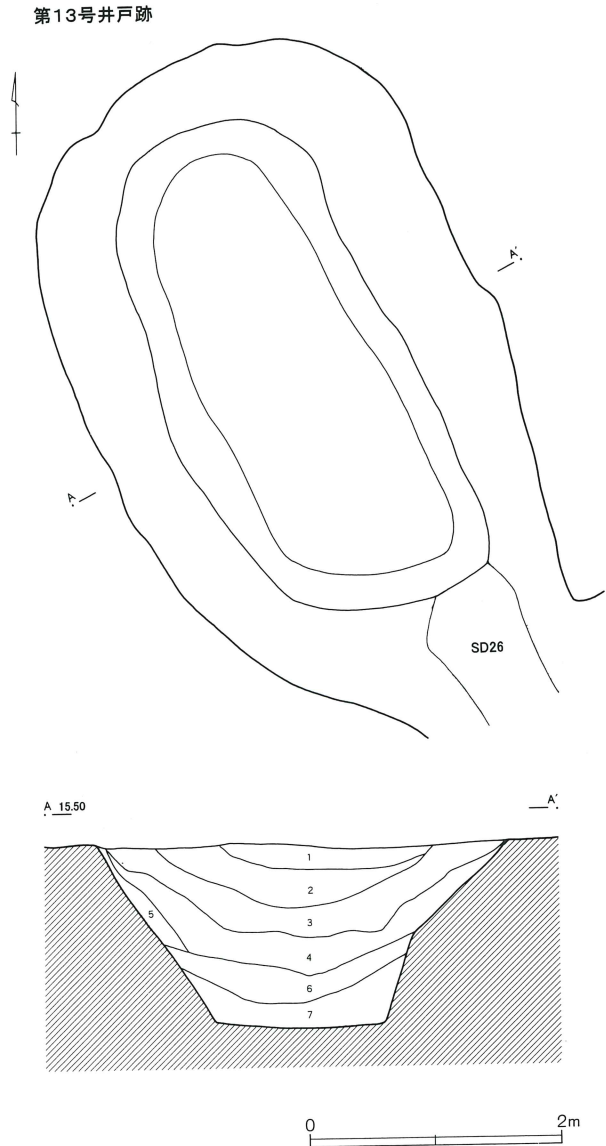
- 1 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒(2~5mm)多量
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒(2mm)多量
- 3 黒褐色土 炭化物粒・焼土粒(2~10mm)多量
- 4 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土 7° ブロック(3~5mm)多量
- 5 黒褐色土 黄褐色土粒少量 粘質土

第17号井戸跡

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土 7° ブロック(30~70mm)多量
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土小 7° ブロック(20~30mm)少量
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土小 7° ブロック(20~30mm)少量
- 4 黒褐色土 黄褐色土粒少量 弱粘質土
- 5 ヒ 黄褐色土 黒褐色土粒多量 弱粘質土

発見された井戸跡は20井あり、第21号井戸跡はE区の調査範囲内になが千間堀改修工事に発見されたもので、周辺には他の遺構は検出されていない。調査区全体に分布し、3地点で2井の井戸跡が併置されて

第25図 E区井戸跡(4)(第6図)



第14号井戸跡

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒多量 黄褐色土 7° ブロック(50mm)・黒色土粒少量
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土 7° ブロック(50~100mm)多量
- 3 黄灰色土 黄褐色土粒多量 黄褐色土 7° ブロック少量 粘質土

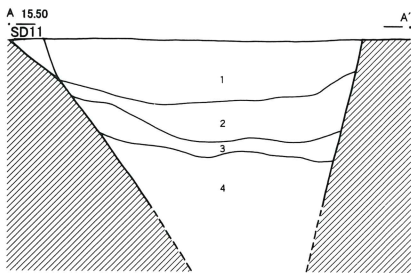
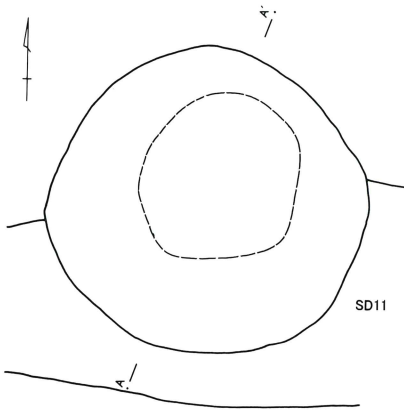
第13号井戸跡

- 1 灰黄褐色土 黄褐色土粒(3~8mm)多量 粘質土
- 2 灰黄褐色土 黄褐色土粒(3~8mm)多量 粘質土
- 3 褐灰色土 黄褐色土混入 灰白色粘土 7° ブロック(20~30mm)多量 粘質土
- 4 灰黄褐色土 灰白色粘土 7° ブロック(10~20mm)多量 粘質土
- 5 灰黄褐色土 黄褐色土多量 粘質土
- 6 黒褐色土 灰白色粘土 7° ブロック(10~30mm)若干 粘質土
- 7 黒色土 粘質土

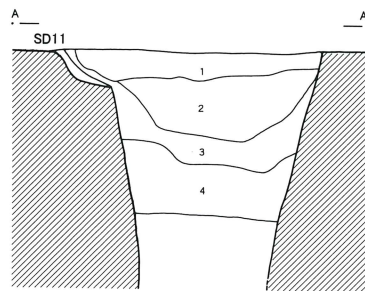
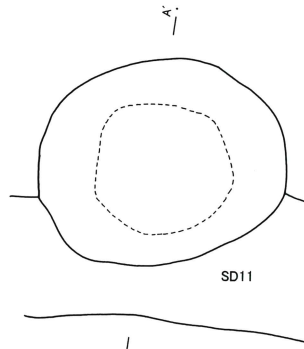
いる。平面規模では、径1m以下の井戸跡と径2m前後の井戸跡に大別される。底面まで掘削できたものは少ないが、比較的浅い位置で湧水点に達しているようである。

第26图 E区井戸跡(5)(第7图)

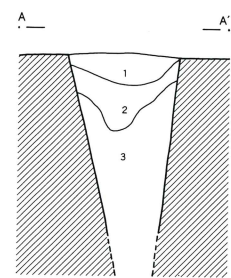
第7号井戸跡



第8号井戸跡

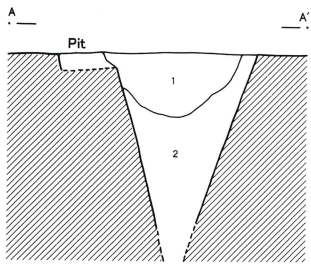
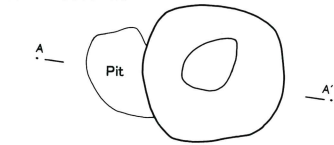


第9号井戸跡

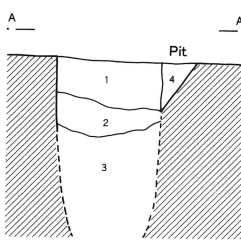
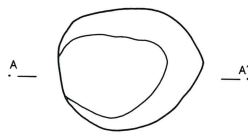


第27图 E区井戸跡(6)(第7图)

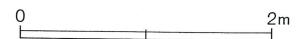
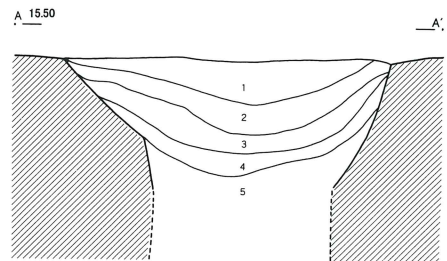
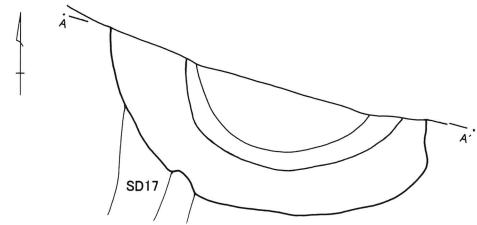
第10号井戸跡



第11号井戸跡



第6号井戸跡



第7号井戸跡

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒(2~5mm)少量
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク(10mm)多量炭化物粒少量
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク少量 粘質土
- 4 褐色土 黒褐色土粒少量 粘質土

第8号井戸跡

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒多量
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒多量
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒少量 粘質土
- 4 黒褐色土 黄褐色土粒微量 粘質土

第9号井戸跡

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒 焼土粒・白色土粒多量 火山灰少量 下面炭化物
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒多量

第10号井戸跡

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク(30~50mm)多量 焼土粒微量
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク(50mm)少量 粘質土
- 3 褐色土 小ビツト

第11号井戸跡

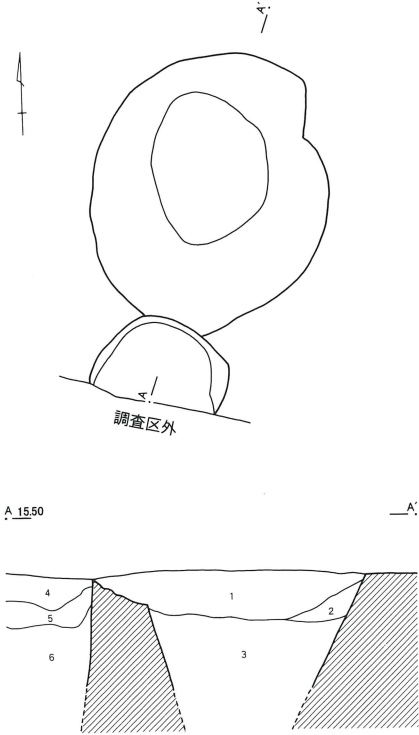
- 1 暗褐色土 黄褐色土粒 鉄分多量
- 2 褐灰色土 黄褐色土粒多量 炭化物少量
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒少量 粘質土 小ビツト
- 4 黒褐色土 黄褐色土粒多量 焼土粒微量

第6号井戸跡

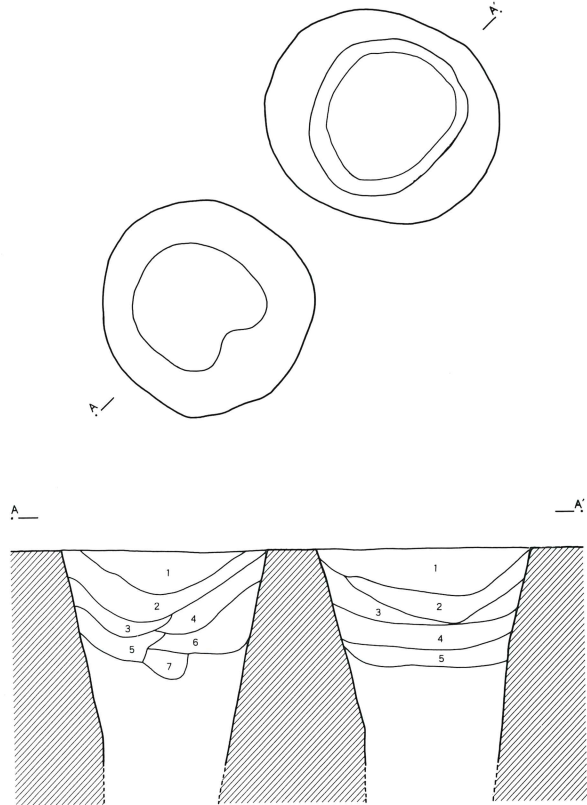
- 1 褐灰色土 黄褐色土粒多量
- 2 黄灰色土 黄褐色土粒少量
- 3 褐灰色土 黄褐色土粒少量 粘質土
- 4 黄灰色土 黄褐色土粒少量 粘質土
- 5 小ビツト黄褐色土 黄褐色土粒多量 粘質土

第28図 E区井戸跡(7) (第8図)

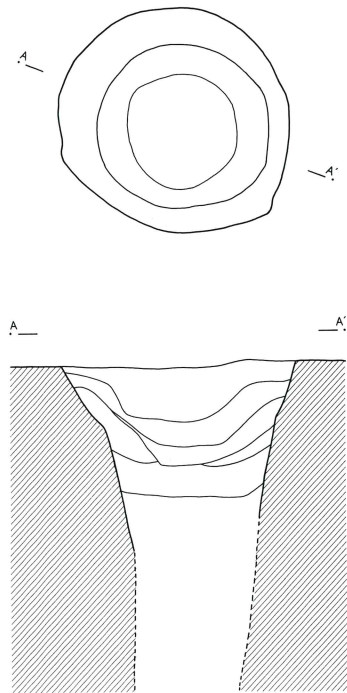
第1・2号井戸跡



第4・5号井戸跡



第3号井戸跡



第1・2号井戸跡

- 1 黒褐色土 SE2覆土 黄褐色土粒(1~3mm)多量 炭化物粒少量
- 2 黒褐色土 SE2覆土 黄褐色土粒・黄褐色土 7°Dツク(50mm)多量
- 3 黒褐色土 SE2覆土 黄褐色土粒・黄褐色土 7°Dツク(30~70mm)多量 粘質土
- 4 黒褐色土 SE1覆土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク(30mm)少量炭化物粒・焼土 7°Dツク微量
- 5 黒褐色土 SE1覆土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク(50~100mm)多量
- 6 暗褐色土 SE1覆土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク多量 焼土7°Dツク微量 粘質土

第4号井戸跡

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク多量
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク少量
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク・灰黄褐色粘土少量
- 4 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク少量
- 5 褐灰色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク多量 粘質土
- 6 暗褐色土 黄褐色土を基調 黒褐色土粒多量
- 7 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク多量 粘質土

第5号井戸跡

- 1 黒褐色土 黄褐色土7°Dツク(10~30mm)多量
- 2 黒褐色土 黄褐色土7°Dツク(10~100mm)少量
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク少量
- 4 褐灰色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク多量 粘質土
- 5 黒褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク多量 粘質土

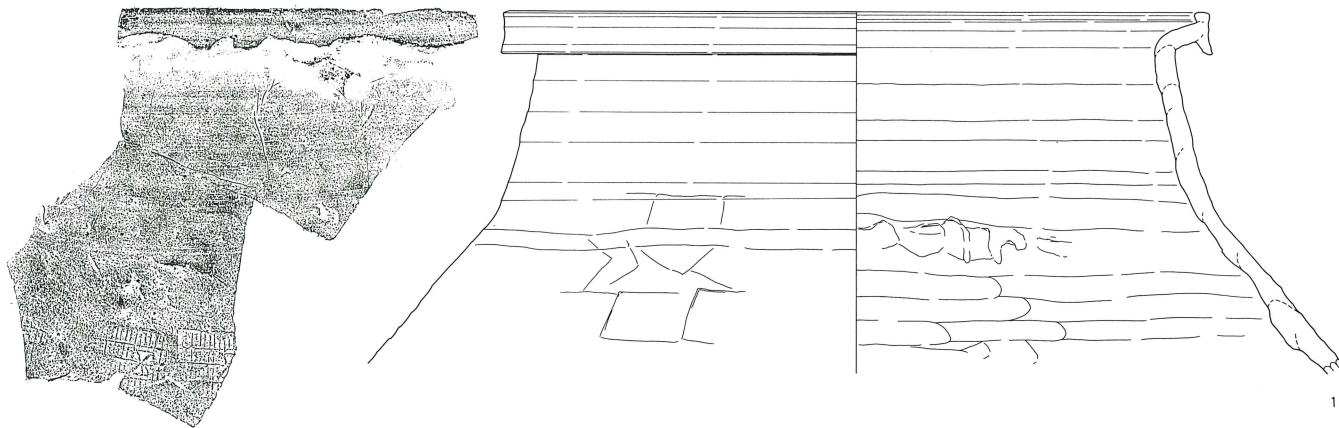
0 2m

出土遺物は少なく、図示し得たのは第2・6・16・21号井戸跡のみで、このうち時期を特定し得るのは常滑甕片を出土した第6号井戸跡のみである。第16号井

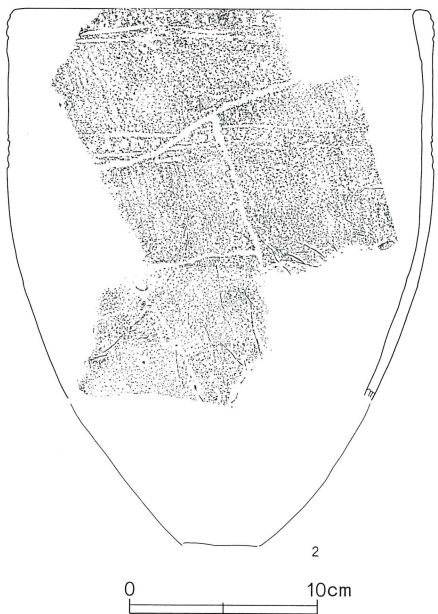
戸跡からは縄文時代晩期初頭の深鉢片が出土しているが、積極的にこの時期の井戸跡と認定しがたく、流入遺物として捉えた方が妥当なようである。

第29図 E区井戸跡出土遺物

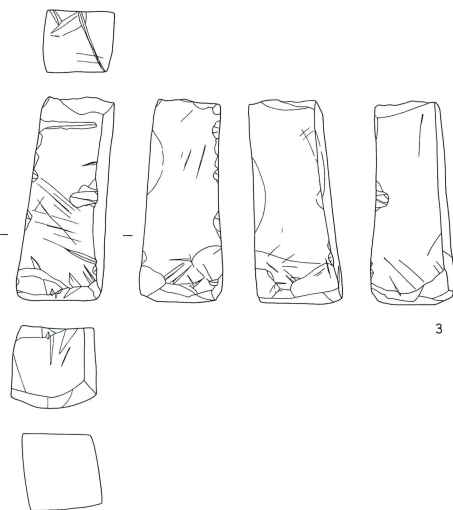
第6号井戸跡



第16号井戸跡



第2号井戸跡



第21号井戸跡



E区井戸跡出土遺物観察表（第29図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	常滑甕	(37.6)	(19.1)		W	A	褐灰	5	SE06 No.15
2	深鉢	(22.0)	(20.5)		WR	B	灰黄褐	15	SE16
3	砥石								SE02 長さ8.0×幅3.4×厚さ3.0×重さ139.0g
4	砥石								SE21 長さ11.5×幅3.0×厚さ2.6×重さ93.7g

E区井戸跡

番号	グリッド	遺構図	全体図	形状	長径m	短径m	深さm	重複遺構	出土遺物・その他
1	AZ56	28	8	円	(0.70)	1.07	—	SE02	
2	AZ56	28	8	円	2.20	1.92	—	SE01 SD05	
3	BB56	28	8	円	1.90	1.78	—		
4	BA56	28	8	円	1.73	1.65	—	SD09	須恵器甕 土師器甕/坏
5	BA56	28	8	円	1.88	1.64	—		
6	AY51 AZ51	27	7	円	(1.02)	2.65	—	SD17	須恵器甕 土師器甕/坏 陶器
7	AZ50	26	7	円	2.56	2.42	—	SD11	
8	AZ50	26	7	円	2.00	1.62	—	SD11	土師器甕
9	AZ48	26	7	不整	0.98	0.86	—		土師器甕/坏
10	AZ48	26	7	円	1.20	1.08	—		
11	AZ49	26	7	円	1.16	0.95	—		
12	欠番								
13	AY45	25	6	楕円	5.63	3.30	1.45	SD26	須恵器甕
14	AX42	24	6	円	(0.69)	0.86	—		須恵器坏 土師器甕
15	AX40/41	23	5	円	0.96	0.84	—		
16	AX40/41	23	5	不整	2.20	2.00	—		土師器甕/坏
17	AX38	23	5	円	1.25	1.20	—		須恵器坏 土師器甕
18	AX43	24	6	円	1.01	0.92	—		
19	AW36	22	4	円	(0.78)	1.45	2.26		須恵器甕 灰釉
20	AV36	22	4	円	0.75	0.75	—		
21	AV34/35	22	4	楕円	2.40	2.10	2.00		

5. 溝跡

発見された溝跡は53条あり、調査区全体に分布している。遺跡の立地する自然堤防に直交もしくは平行する直線的な一群と、蛇行した走行距離の短い一群に大別される。

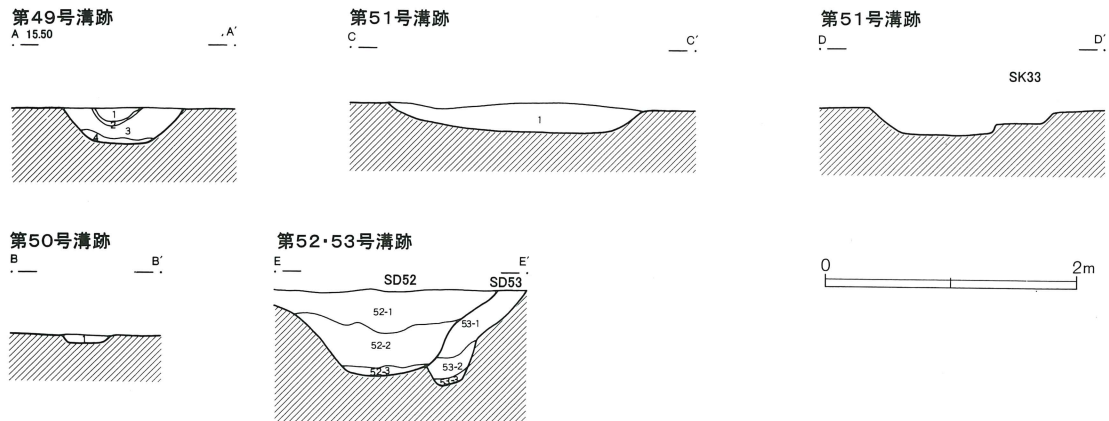
立地する自然堤防に直交もしくは平行する直線的な一群には第1・2・3・14・15・16・31・32・36・37・42・43・48号溝跡があげられる。第31・42・43号溝跡はF区第47・56・57号溝跡から続く溝跡で、これに第32号溝跡が第31号溝跡、第36号溝跡が第42号溝跡、第37号溝跡が第43号溝跡に直交する。第14・15・16号溝跡はF区第16・11・17号溝跡から続き、一方、第1・2・3号溝跡に対応する溝跡はF区では検出されてい

ない。これらの溝跡は数条が平行し、覆土の状態も近似している。数値上の走行方位は異なるが、立地する自然堤防に直交することからA・B・C・D・G・H区で確認されている中世段階の区画溝として捉えられる。

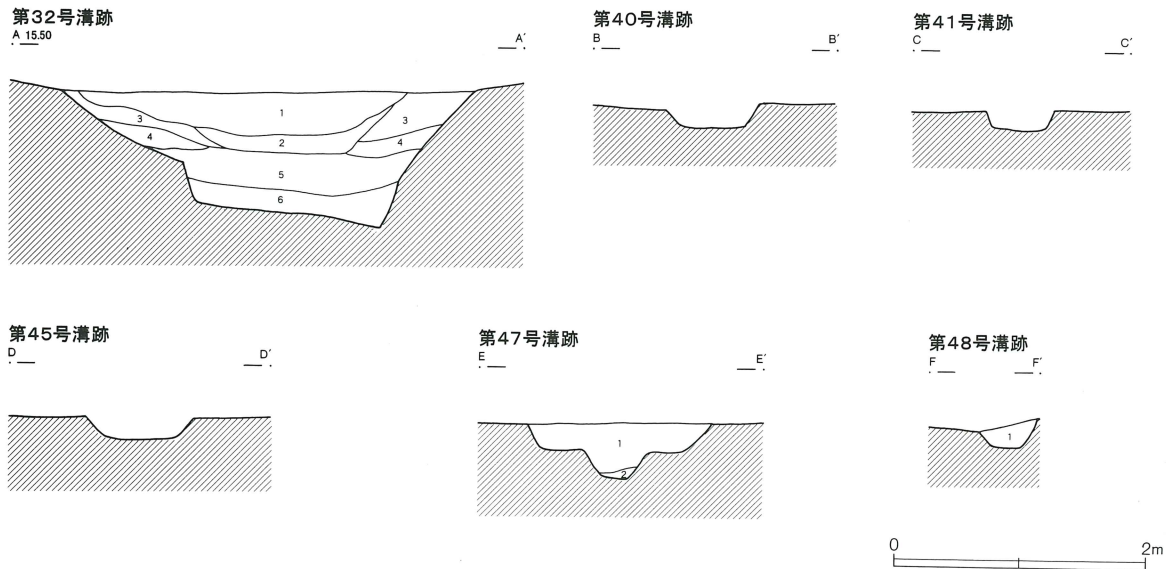
蛇行した走行距離の短い一群には第5・8・9・10・17・18・29・34・41号溝跡があげられる。浅く、走行方位も乱れ、用途・性格は不明である。また出土遺物は少なく、同一遺構から長期間にわたる時期の遺物が出土しており、時期の特定はしがたい。

第11号溝は幅広の割に浅く、他の溝跡と堆積していた覆土が明らかに異なる。奈良・平安時代の遺物が出

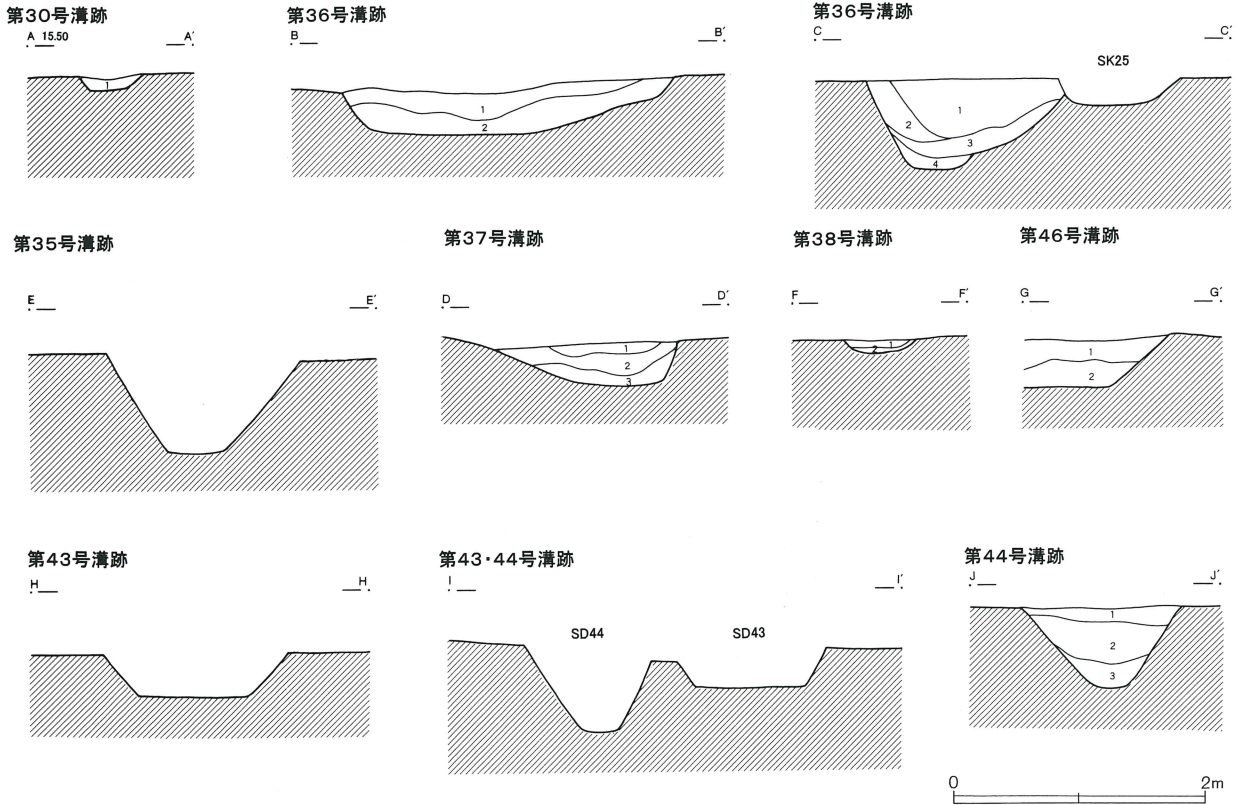
第30図 E区溝跡(1) (第4図)



第31図 E区溝跡(2) (第5図)



第32図 E区溝跡(3)(第6図)



第53号溝跡

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒(2~5mm)若干
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒(2mm)少量
- 3 褐灰色土 黄褐色土7°ブロック(5~20mm)多量 崩落土

基本土層

- I 灰色土 耕作土 白粒少量
- II 黒褐色土 鉄分少量
- III 黄灰色土 鉄分多量
- IV 黄褐色土 黄褐色土層

第49号溝跡

- 1 黄褐色土 黄褐色土粒(2~5mm)少量 白粒多量
- 2 灰黄色土 火山灰層
- 3 灰黄色土 黄褐色土粒(2~5mm)少量
- 4 暗灰黄色土 黄褐色土7°ブロック(7~25mm)多量 崩落土

第50号溝跡

- 1 黄灰色土 黄褐色土粒・7°ブロック(2~20mm)多量

第51号溝跡

- 1 灰黄褐色土 黄褐色土粒(2~10mm)少量

第52号溝跡

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒・炭化物粒(2~5mm)少量
- 2 黒色土 黄褐色土粒・炭化物粒(2~5mm)少量
- 3 黒色土 黄褐色土7°ブロック(5~50mm)多量 崩落土

第32号溝跡

- 1 褐灰色土 黄褐色土粒多量 炭化物少量
- 2 褐灰色土 黄褐色土粒・炭化物多量 炭化物はいくつかの層状
- 3 黄灰色土 黄褐色土粒多量
- 4 黄灰色土 黄褐色土粒多量
- 5 灰色土 粘質土 黄褐色土粒多量
- 6 褐灰色土 粘質土 黄褐色土粒多量

第47号溝跡

- 1 灰色土 黄褐色土粒(2~10mm)少量
- 2 灰色土 黄褐色土7°ブロック(5~30mm)多量 崩落土

第48号溝跡

- 1 灰黄褐色土 黄褐色土粒(2~8mm)少量

第30号溝跡

- 1 褐灰色土 粘質土 黄褐色土粒・白色火山灰多量

第36号溝跡

- 1 褐灰色土 黄褐色土若干 粘質土
- 2 褐灰色土 黄褐色土多量 粘質土
- 3 灰黄褐色土 黄褐色土7°ブロック(30mm)少量 粘質土
- 4 褐灰色土 黄褐色土多量 粘質土

第37号溝跡

- 1 灰黄褐色土 黄褐色土粒(3~5mm)多量
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒(3~5mm)多量
- 3 灰黄褐色土 黄褐色土7°ブロック(20~30mm)多量

第38号溝跡

- 1 灰黄褐色土 白色土粒若干 粘質土
- 2 灰黄褐色土 黄褐色土多量

第44号溝跡

- 1 灰黄褐色土 黄褐色土7°ブロック(20~50mm)少量
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒・炭化物粒(3mm)多量
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒(3mm)多量 黄褐色土7°ブロック(10~30mm)少量

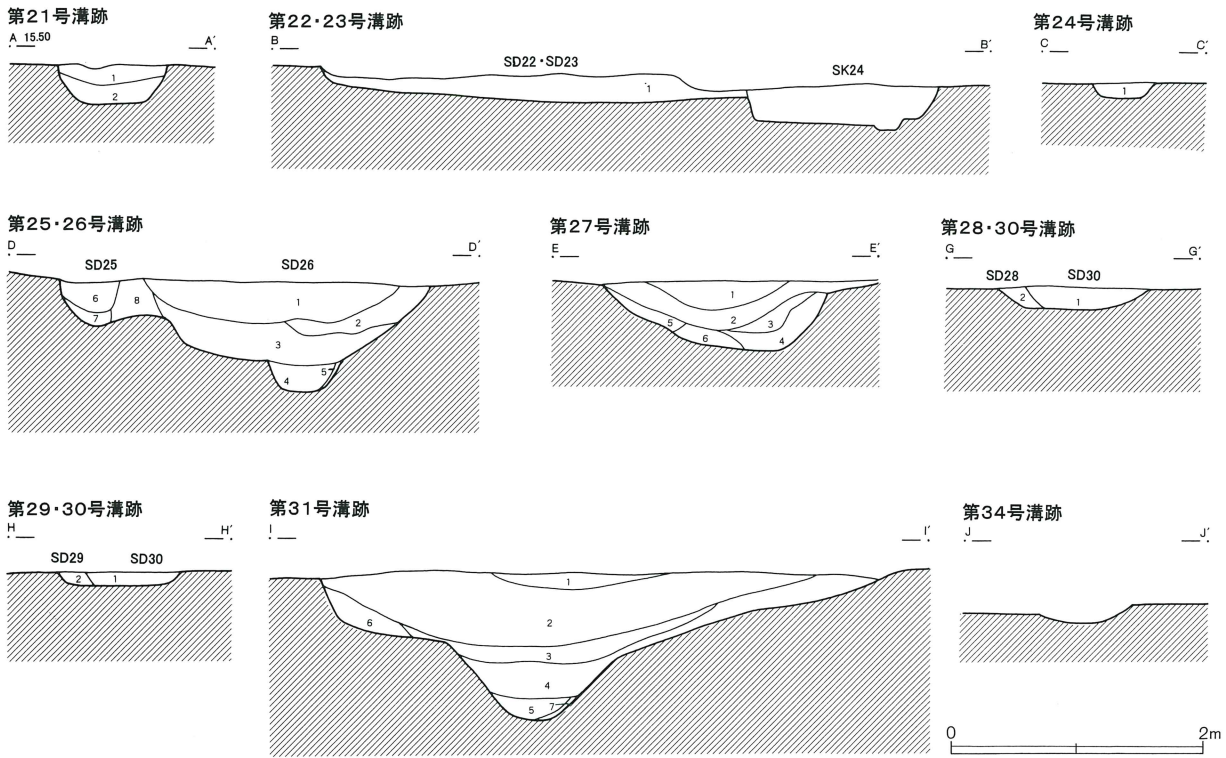
第46号溝跡

- 1 灰黄褐色土 黄褐色土粒(2mm)少量
- 2 褐色土 黄褐色土粒(5mm)多量

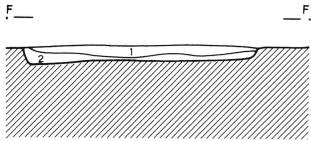
土し、該期の溝跡と認定される。第3号掘立柱建物跡の存在を例外とできるならば、該期の集落北辺を区画

する性格も想定される。

第33図 E区溝跡(4) (第6図)



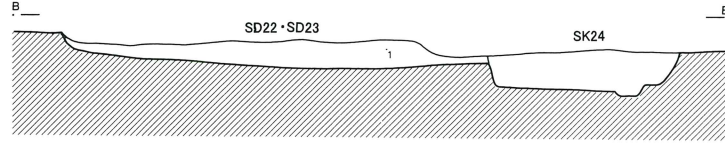
第21号溝跡



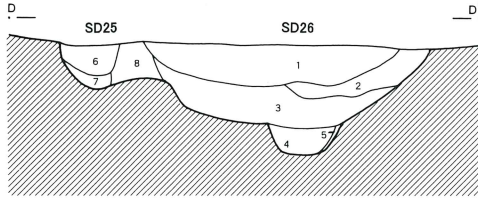
第21号溝跡

- 1 におい黄褐色土 黄褐色土粒(2~5mm)多量
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒(2~5mm)少量 炭化物粒(1~3mm)微量

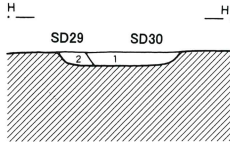
第22・23号溝跡



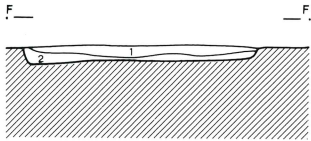
第25・26号溝跡



第29・30号溝跡



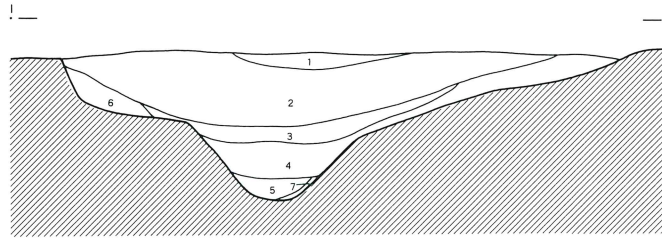
第33号溝跡



第21号溝跡

- 1 におい黄褐色土 黄褐色土粒(2~5mm)多量
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒(2~5mm)少量 炭化物粒(1~3mm)微量

第31号溝跡



第27号溝跡

- 1 褐灰色土 黄褐色土粒(2~5mm)少量 灰白色粘土7°ブロック状 粘質土
- 2 灰黄褐色土 1層より、黄褐色土粒(2~5mm)多量 灰白色粘土带状
- 3 灰黄褐色土 黄褐色土粒(2mm)若干
- 4 灰黄褐色土 黄褐色土7°ブロック(10~30mm)多量
- 5 灰黄褐色土 黄褐色土粒(2~10mm)多量
- 6 褐色土 黄褐色土多量 砂層

第28・30号溝跡

- 1 褐灰色土 SD30覆土 粘質土 黄褐色土粒・白色火山灰多量
- 2 褐色土 SD28覆土 黒褐色土粒多量

第29・30号溝跡

- 1 褐灰色土 SD30覆土 粘質土 黄褐色土粒・白色火山灰多量
- 2 におい黄褐色土 SD29覆土 黒褐色土粒多量

第31号溝跡

- 1 褐灰色土 黄褐色土粒(1~3mm)多量
- 2 灰黄褐色土 黄褐色土粒(1~3mm)多量
- 3 褐灰色土 黄褐色土若干 粘質土
- 4 灰黄褐色土 黄褐色土粒・炭化物粒・焼土粒(3~5mm)少量 粘質土
- 5 暗赤~灰褐色土 黄褐色土若干 粘質土
- 6 灰黄褐色土 黄褐色土7°ブロック(10~50mm)多量 粘質土
- 7 赤~灰褐色土 粘質土 砂多量

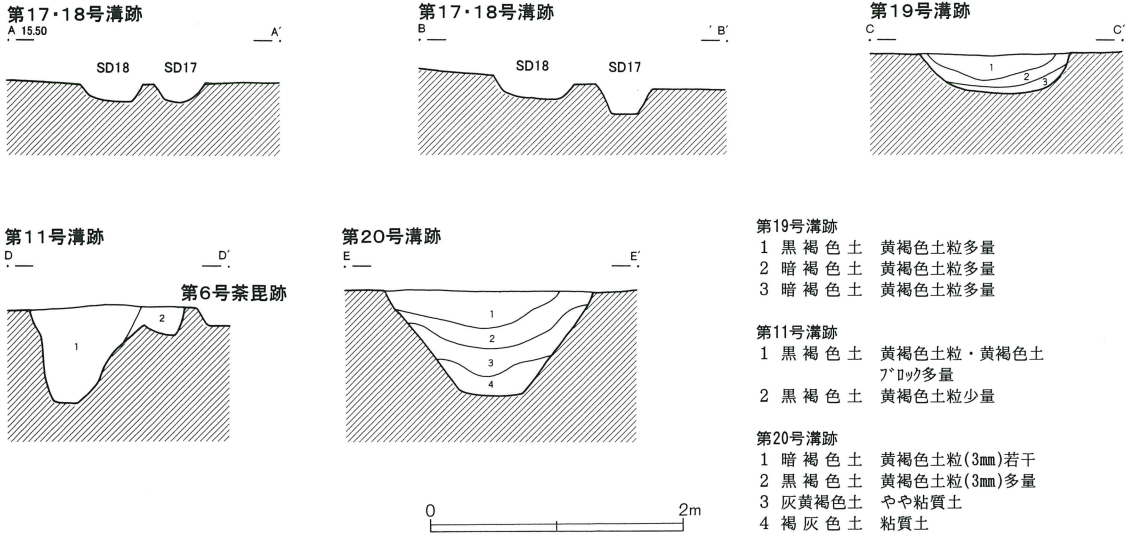
第33号溝跡

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒(2~10mm)少量
- 2 暗褐色土 黄褐色土7°ブロック(10~30mm)多量

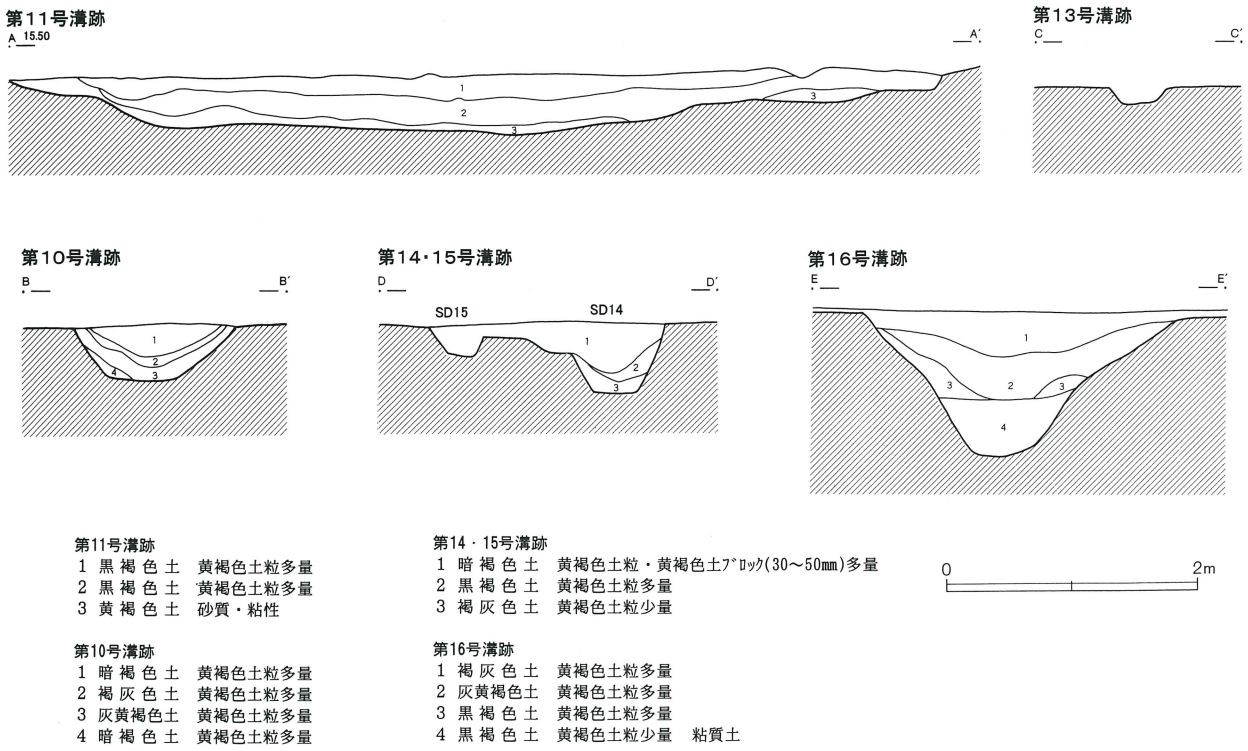
第42号溝跡

- 1 褐色土 黄褐色土粒(2mm)・黄褐色土7°ブロック(20~50mm)多量
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒(2~5mm)多量

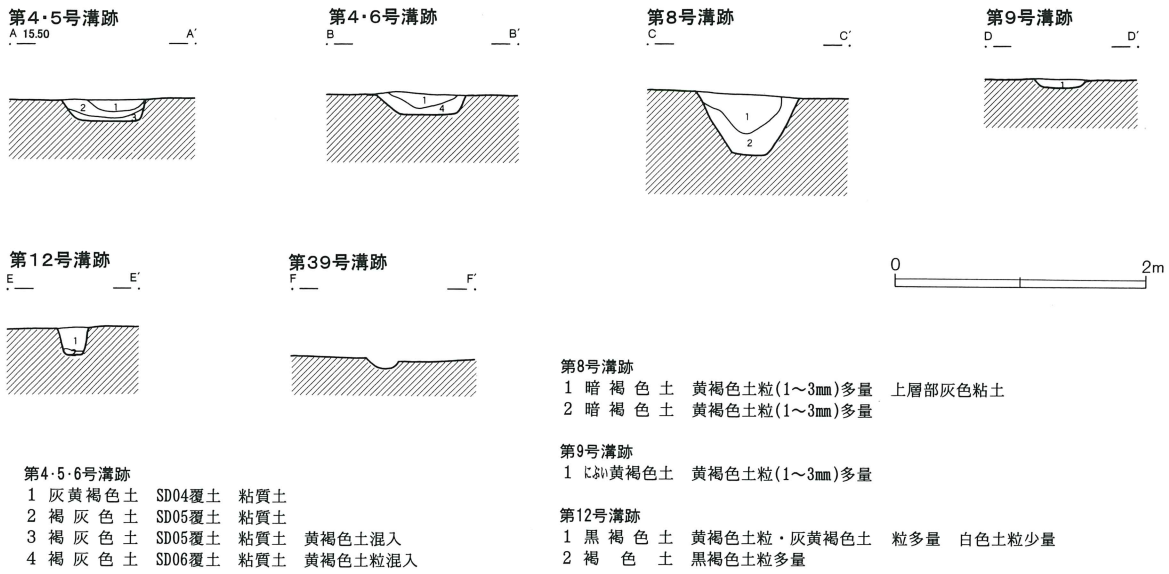
第34图 E区沟迹(5) (第7图)



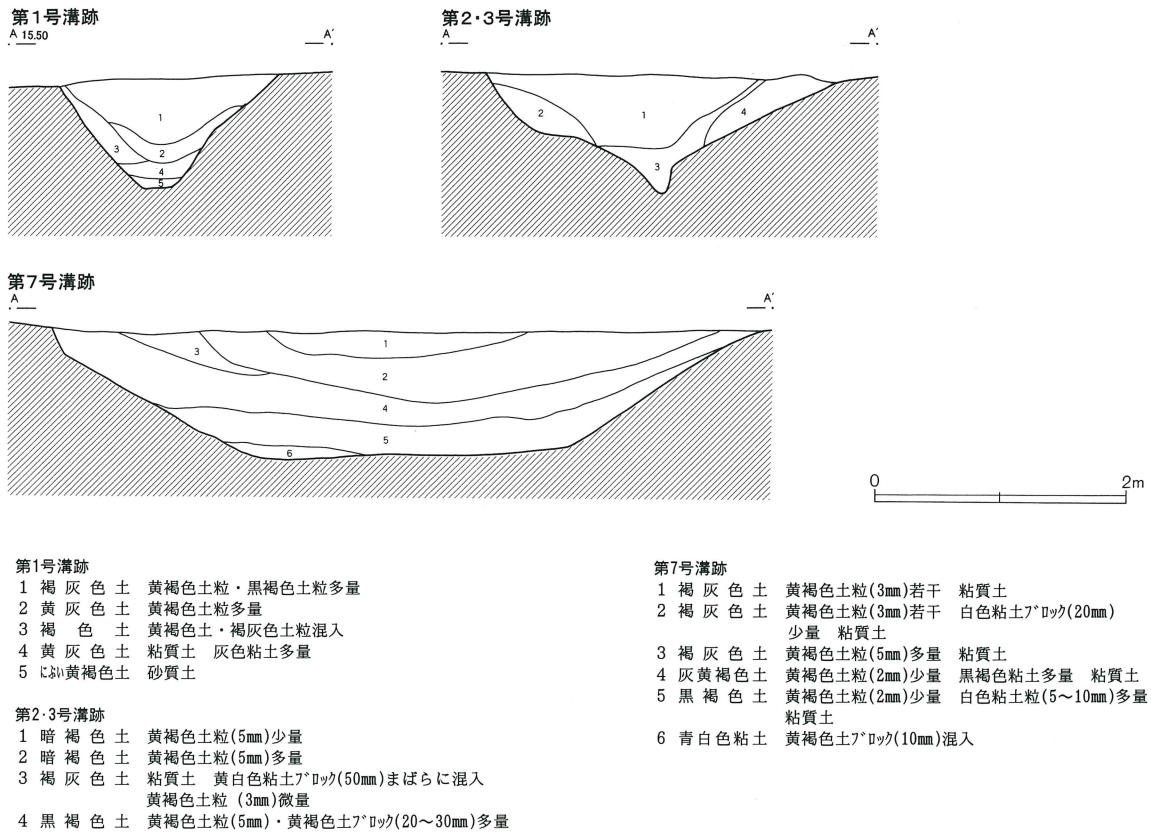
第35图 E区沟迹(6) (第7图)



第36图 E区沟迹(7)(第8图)



第37图 E区沟迹(8)(第9图)

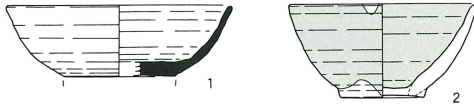


E区溝跡

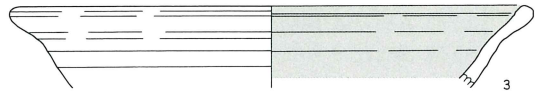
番号	グリッド	幅 (m)	深さ (m)	走行方位	出土遺物・その他
1	AY57 AZ57/58 BA58	1.70~2.30	0.90	N-18°-W	須恵器甕/坏/蓋 土師器甕/坏
2	AY57 AZ57/58 BA57/58	0.52~1.20	0.38	N-25°-W	須恵器甕/坏/蓋 土師器甕/坏
3	AY57 AZ57/58 BA57/58	1.01~1.60	1.03	N-19°-W	
4	AX56 AY56 AZ56/57	0.42~1.25	0.17~0.18	N-25°-W	須恵器甕
5	AZ56/57	0.49~0.71	0.17	N-88°-W	
6	AY55~57 AZ57	0.45~0.55	0.11	N-67°-W	
7	BB58	2.20~2.35	1.06	N-108°-W	土師器坏
8	BA57 BB57	0.61~0.95	0.48	N-37°-E	
9	BA55/56	0.18~0.46	0.06	N-67°-W	土師器坏 近世陶器
10	AZ54 BA54	0.35~1.30	0.44	N-107°-W/N-23°-W	須恵器甕 土師器甕
11	AZ49~54 BA49	0.71~1.58	0.48	N-87°-W/N-33°-E	須恵器甕/坏/蓋 土師器甕/坏
12	BB56/57	0.15~0.25	0.22	N-50°-W/N-141°-W	
13	BA54	0.20~0.45	0.10	N-6°-W	
14	AZ52 BA52	0.39~0.60	0.56	N-4°-E	須恵器甕 土師器甕
15	AZ52 BA52	0.60~1.05	0.23	N-4°-E	須恵器坏 土師器甕/坏
16	AZ52 BA51/52	2.20~2.65	1.08	N-5°-E	須恵器甕/坏/蓋 土師器坏 中世陶器
17	AZ51	0.20~0.40	0.08~0.16	N-15°-E	須恵器甕 土師器甕/坏 中世陶器
18	AZ50/51	0.30~0.50	0.14~0.16	N-16°-E	
19	AZ49/50 BA50	0.90~1.20	0.32	N-26°-W	土師器甕 中世陶器
20	AY48	0.40~1.45	0.80	N-16°-W	須恵器坏 土師器甕
21	AX47 AY47 AZ47	0.70~1.02	0.31	N-14°-E	土師器甕
22	AY46 AZ46/47	0.65~1.20	0.28	N-64°-W	須恵器甕/蓋 土師器甕/坏
23	AY45/46 AZ46/47	0.40~0.80	0.28	N-68°-W	
24	AX47 AY47	0.50~0.70	0.12	N-15°-E	
25	AY46 AZ46	0.20~0.30	0.35	N-0°	
26	AY45 AZ45/46	1.40~1.80	0.89	N-23°-W	須恵器甕/坏 土師器坏
27	AY45 AZ45	0.40~0.90	0.56	N-56°-E	土師器甕 中世陶器
28	AY44/45	0.30~0.70	0.17	N-38°-W	
29	AX44/45 AY45	0.20~0.90	0.10	N-54°-W	須恵器甕/坏/蓋 土師器甕/坏/高坏 中世陶器
30	AX44/45 AY44	0.30~0.90	0.17	N-44°-E	
31	AX44/45 AY43/44	3.20~3.75	1.13	N-52°-E	須恵器甕 土師器甕 編物石
32	AW41/42 AX41~43 AY43	2.10~2.60	1.09	N-44°-W	須恵器甕 土師器高坏
33	AY44/45 AZ44/45	0.90~1.20	0.14	N-55°-E	須恵器甕
34	AX44	0.25~0.30	0.07	N-49°-E	
35	AX43	0.80~0.95	0.47	N-62°-E	
36	AW41/42 AX42/43 AY43	0.20~1.60	0.71	N-46°-W	須恵器甕/坏 土師器甕 中世陶器 編物石
37	AW41/42 AX42/43 AY43	0.40~0.60	0.35	N-43°-W	須恵器甕
38	AW42	0.40~0.95	0.10	N-26°-E	
39	AY55/56	0.08~0.24	0.04	N-99°-E	
40	AW38/39 AX38	0.30~0.48	0.11~0.14	N-47°-E	
41	AW38 AX38	0.20~0.40	0.13	N-2°-W	土師器甕
42	AX43/44 AY43	0.75~0.95	0.31	N-53.5°-E	
43	AX43/44 AY43	0.20~0.70	0.19	N-51°-E	須恵器坏 土師器甕/坏
44	AX43/44 AY43	0.45~0.60	0.63	N-50°-E	
45	AX40/41	0.15~0.45	0.10~0.14	N-48°-E	
46	AW42	0.20~0.35	0.38	N-49°-W	
47	AV37/38 AW37	0.70~1.60	0.46	N-46°-E	土師器甕/坏
48	AV38	0.30~0.35	0.18	N-45.5°-E	土師器甕/坏
49	AU37/38 AV37/38	0.60~1.20	0.28	N-50°-W	
50	AU37/38	0.30~0.49	0.07	N-88°-W	
51	AV36~38	0.70~1.70	0.20	N-87°-W/N-33°-E	
52	AV35/36 AW36	0.60~1.20	0.67	N-56°-W	
53	AV35/36 AW36	0.10~0.35	0.28	N-36°-W	

第38图 E区沟迹出土遗物(I)

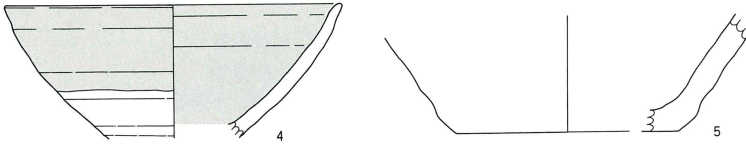
第1号沟迹



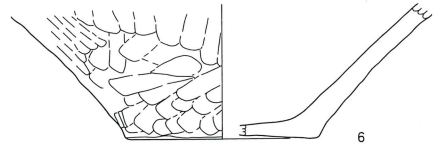
第2·3号沟迹



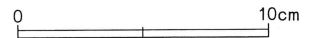
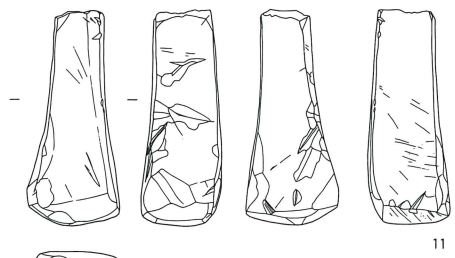
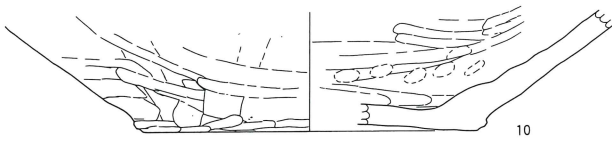
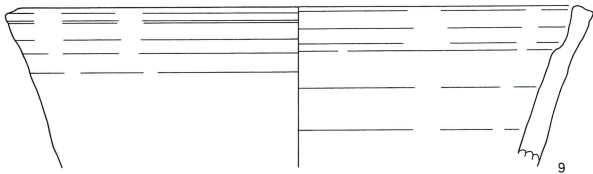
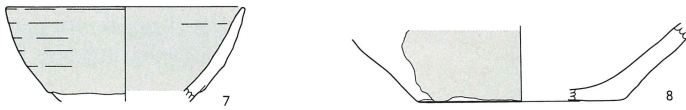
第7号沟迹



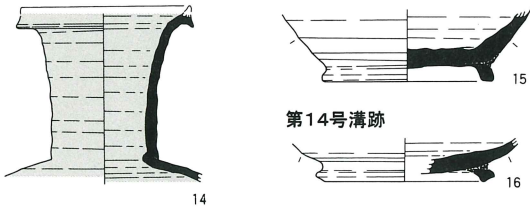
第8号沟迹



第10号沟迹



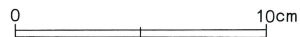
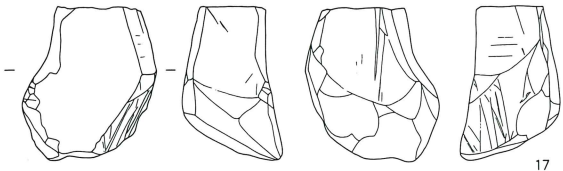
第11号沟迹



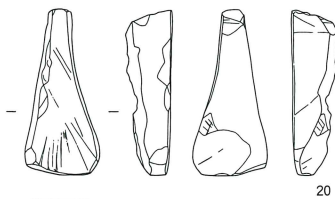
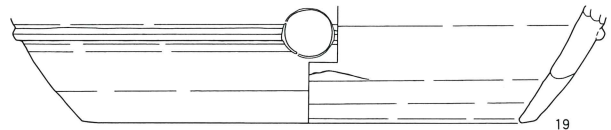
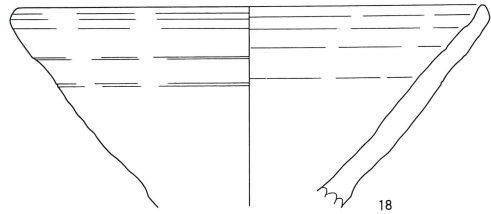
第14号沟迹



第12号沟迹

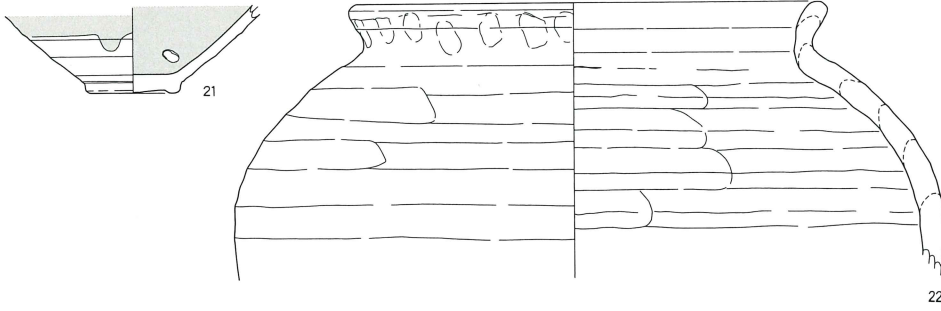


第16号沟迹

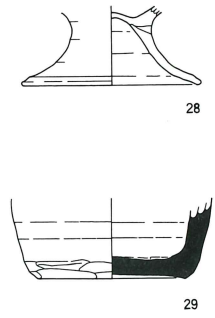


第39图 E区沟迹出土遗物(2)

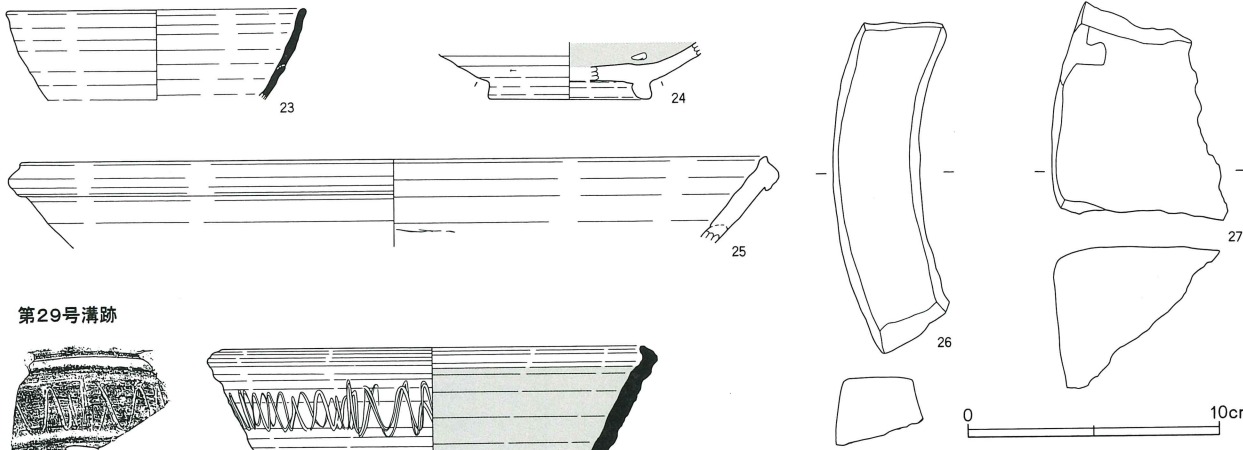
第19号沟迹



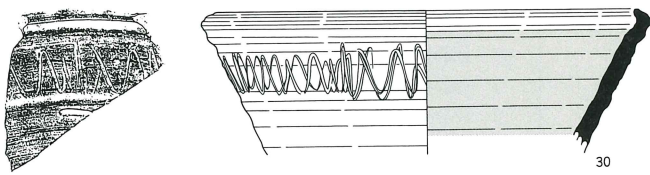
第23号沟迹



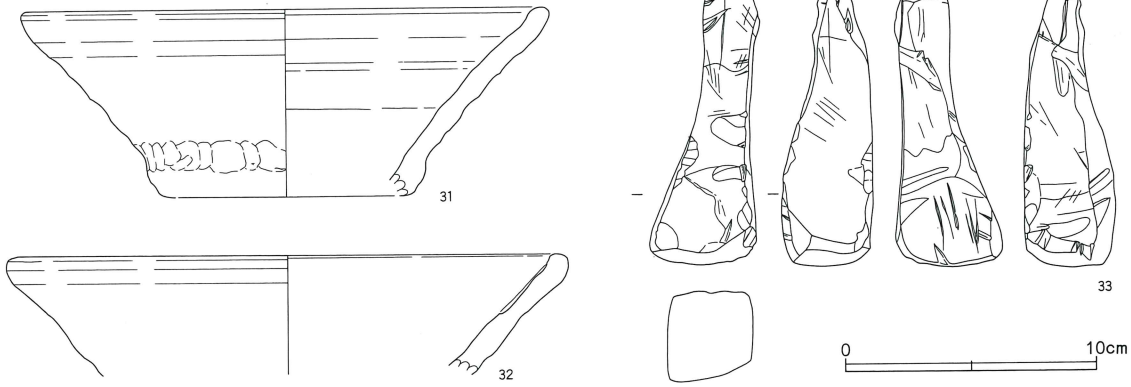
第20号沟迹



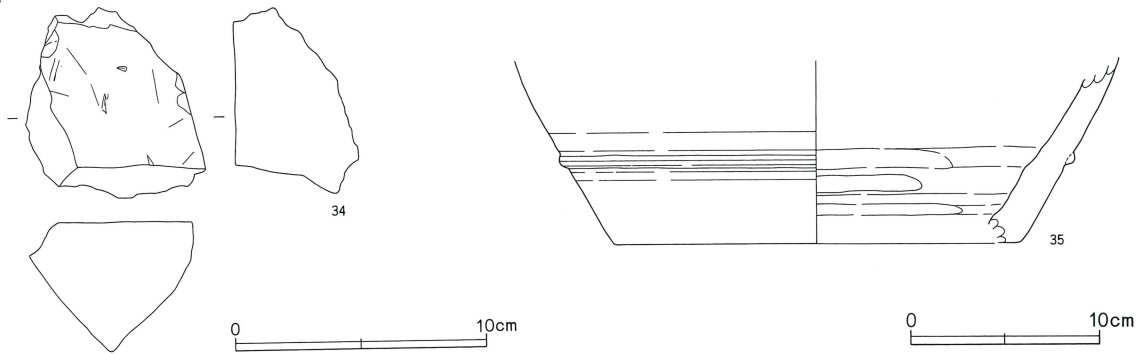
第29号沟迹



第31号沟迹

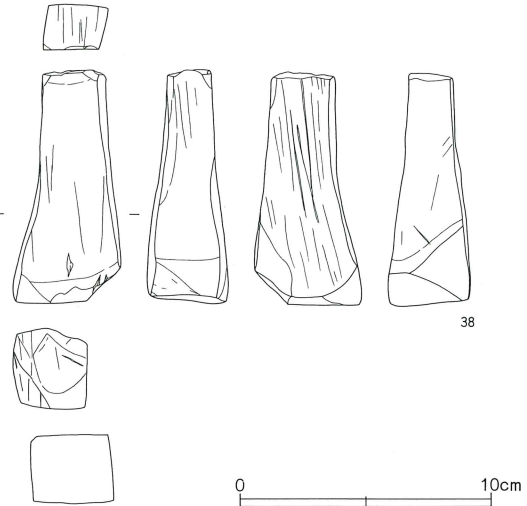
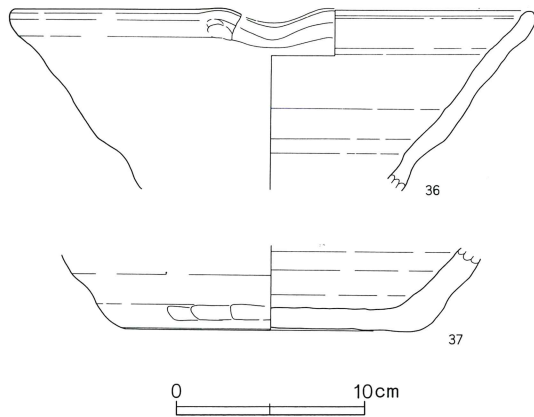


第26号沟迹



第40図 E区溝跡出土遺物(3)

第36号溝跡



E区溝跡出土遺物観察表(第38・39・40図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	3.8	(6.0)	W針	A	灰白	10	SD01 南比企産 底部全面へラ
2	碗	(9.9)	5.0	(4.4)	W	A	にふい橙	20	SD01 底部糸切離し 施釉一浅黄色
3	鉢	(26.9)	(4.4)		WB	A	灰白	5	SD02・03 自然釉薄い付着
4	碗	(17.8)	(7.1)		W	A	灰白	10	SD07 トチン跡か? 施釉一浅黄色
5	鉢		(6.2)	12.8	WB	B	にふい黄橙	5	SD07
6	鉢		(7.1)	10.2	WBR	B	にふい橙	5	SD08
7	碗	(12.6)	(5.0)		W	A	灰白	20	SD10 施釉一灰褐色
8	鉢		(4.0)	11.0	WB	B	灰白	5	SD10 煤の様な黒色物付着
9	内耳鍋	(29.4)	(8.5)		WR片	C	灰黄褐	5	SD10 外面煤状物付着
10	常滑甕		(6.3)	17.8	W	A	赤灰	5	SD10
11	砥石								SD10 長さ8.4×幅3.6×厚さ2.3×重さ122.1g
12	坏	(12.0)	3.2	(6.0)	W針	B	灰	20	SD11 南比企産 底部糸切離し
13	坏	(13.3)	3.8	(7.0)	W針	A	灰	50	SD11 南比企産 底部糸切離し
14	長頸壺		(8.9)		WB	A	灰白	10	SD11 秋間産 内外面自然釉付着
15	長頸壺		(3.8)	9.1	W針	A	灰	5	SD11 南比企産
16	長頸壺		(2.3)	(9.4)	WB	A	灰	5	SD14 南比企産 貼付高台
17	砥石								SD12 長さ5.1×幅4.5×厚さ3.0×重さ130.9g
18	鉢	(24.8)	(10.6)		WB	A	灰白	10	SD16
19	甕	(24.0)	(6.1)		WBR	B	褐灰	5	SD16
20	砥石								SD16 長さ6.5×幅3.0×厚さ1.5×重さ30.1g
21	碗		(4.8)	5.0	W	A	灰白	10	SD19 施釉一浅黄色 高台ケズリだし
22	甕	(23.2)	(14.5)		WBR片	B	にふい褐	10	SD19
23	椀	(16.0)	(4.8)		WR針	A	褐灰	5	SD20 南比企産
24	碗		(3.0)	(8.8)	W	A	灰白	5	SD20 トチン跡 貼付高台施釉一灰白色
25	常滑甕	(39.8)	(4.6)		W針	A	褐灰	5	SD20 南比企産 施釉
26	石臼								SD20 長さ13.0×幅3.5×厚さ2.5×重さ180.4g
27	石臼								SD20 長さ8.3×幅6.7×厚さ5.4×重さ289.8g
28	台付甕		(4.2)	(9.2)	WBR	A	にふい橙	5	SD23
29	長頸壺?		(4.2)	(8.0)	W	A	灰	5	SD30 群馬産?
30	甕	(22.4)	(7.6)		WB	A	灰白	5	SD29 湖西産? 内面自然釉付着
31	鉢	(27.7)	9.9	(13.6)	WBR	B	にふい橙	10	SD31
32	鉢	(28.8)	(6.3)		WBR	B	浅黄橙	5	SD31
33	砥石								SD31 長さ10.8×幅4.2×厚さ3.6×重さ163.2g
34	磨石								SD26 長さ7.3×幅6.7×厚さ5.1×重さ268.8g
35	鉢		(9.7)	(21.6)	WBR	B	浅赤橙	5	SD?
36	片口鉢	(27.7)	(9.6)		WBR	C	にふい黄橙	5	SD36
37	鉢		(4.5)	(16.0)	WB	B	灰白	5	SD36 底部糸切離し
38	砥石								SD36 長さ9.2×幅4.1×厚さ2.7×重さ145.0g

6. その他の遺構と遺物

(1) 茶毘跡

第1号茶毘跡 (第41・8図)

AZ56グリッドに位置する。

燃焼部は長方形で、西壁中央に煙道状の突出部が付設されている。長軸0.94m、短軸0.53m、深さ0.21m、突出部は幅0.18m、長さ0.58m、主軸方位N-110.5°-Wを測る。

燃焼部の壁は直立し、被熱による焼土化が著しい。

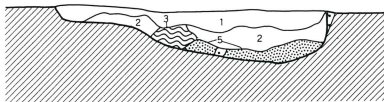
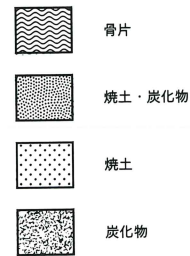
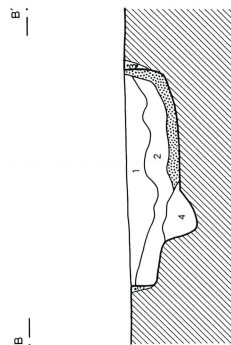
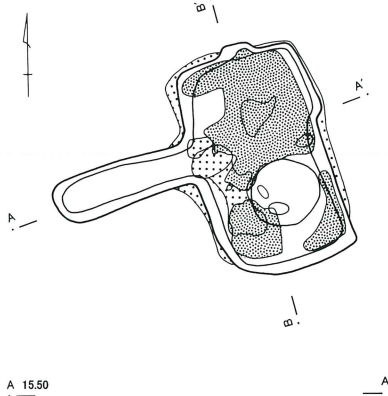
底面は緩やかに窪み、南半部にはピット状の掘り込みがみられる。燃焼部と突出部の連結部は0.05mほどの段を持つ。突出部の底面は緩やかな登り傾斜しながら突端に至る。

燃焼部の覆土下層には、多量の焼土・炭化物が含まれ、突出部との連結部付近には骨片が堆積している。

遺物は出土していない。

第41図 E区茶毘跡(1)

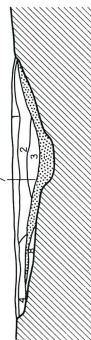
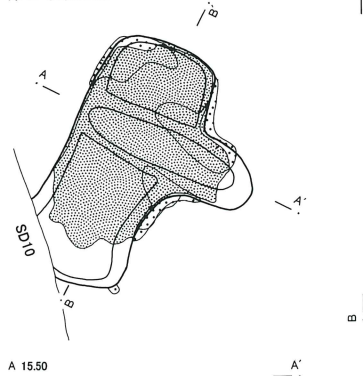
第1号茶毘跡



第1号茶毘跡

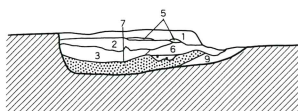
- | | | | |
|---|------|---------------------------|-----------|
| 1 | 黒褐色土 | 黄褐色土粒・黄褐色土フロック(30~50mm)多量 | 焼土粒微量 |
| 2 | 黒褐色土 | 黄褐色土粒・黄褐色土フロック(20~30mm)多量 | 焼土粒微量 |
| 3 | 黒褐色土 | 炭化物・骨片多量 | |
| 4 | 黒褐色土 | 黄褐色土粒多量 | 炭化物・焼土粒少量 |
| 5 | 炭化物層 | 焼土・灰多量 | |

第2号茶毘跡



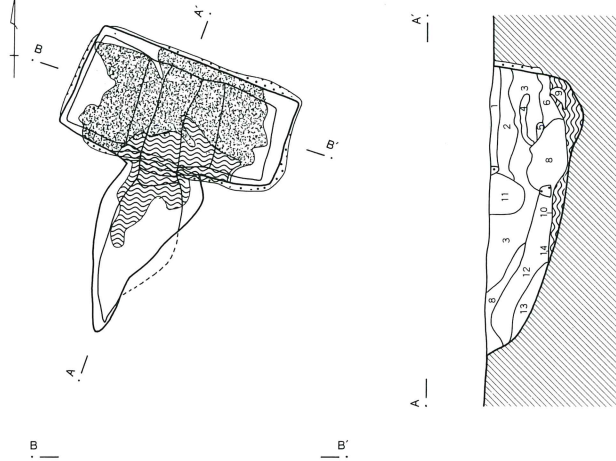
第2号茶毘跡

- | | | | |
|---|------|------------------------|----------|
| 1 | 暗褐色土 | 黄褐色土粒多量 | 焼土粒・骨片少量 |
| 2 | 黒褐色土 | 黄褐色土粒・焼土粒多量 | |
| 3 | 黒褐色土 | 黄褐色土粒・黄褐色土フロック(10mm)多量 | |
| 4 | 褐灰色土 | 黄褐色土粒・焼土粒・炭化物多量 | 骨片少量 |
| 5 | 赤褐色土 | 焼土 | 天井部焼土層 |
| 6 | 黒褐色土 | 黄褐色土粒・炭化物粒・焼土粒・骨片少量 | |
| 7 | 炭化物層 | 炭化物・灰・骨片・焼土 | |
| 8 | 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物少量 | |
| 9 | 褐色土 | 焼土粒・炭化物少量 | |



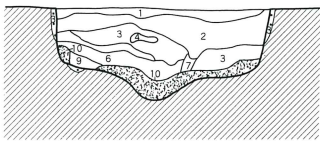
第42図 E区茶毘跡(2)

第3号茶毘跡

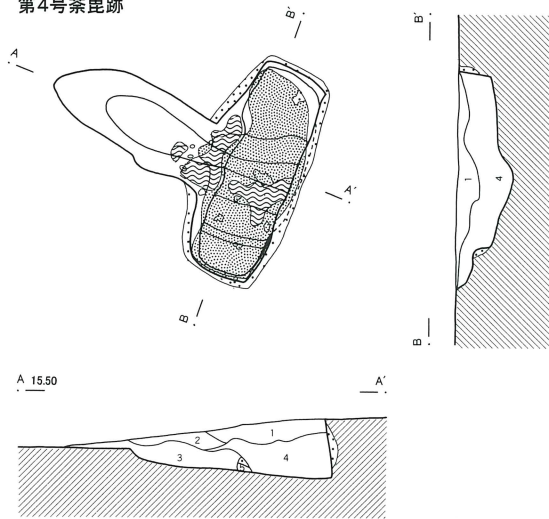


第3号茶毘跡

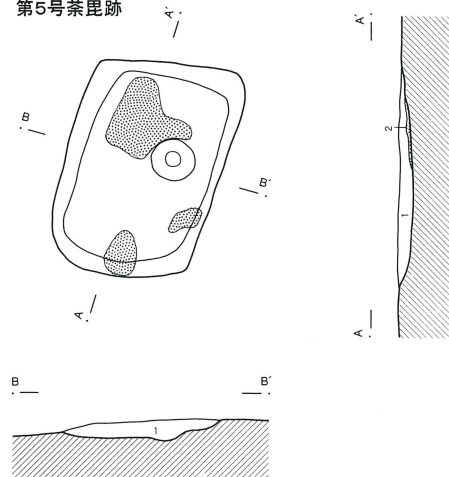
- 1 黒褐色土 黄褐色土粒少量 焼土粒微量
- 2 黄褐色土 黄褐色土基調 黒褐色土混入
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒少量
- 4 赤黒色土 焼土
- 5 黒褐色土 黄褐色土粒多量
- 6 褐灰色土 黄褐色土粒少量 焼土粒・炭化物粒微量
- 7 黒褐色土 炭化物多量 黄褐色土粒少量
- 8 明黄褐色土 黄褐色土粒多量
- 9 褐色土 黄褐色土7°Dツク
- 10 炭化物層 炭化物・灰(一部骨片)
- 11 褐色土 焼土粒微量
- 12 黒褐色土 焼土粒・黄褐色土粒少量
- 13 暗褐色土 黄褐色土粒少量
- 14 暗褐色土 骨片・炭化物堆積層 焼土粒・7°Dツク多量



第4号茶毘跡



第5号茶毘跡



第4号茶毘跡

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土7°Dツク(30~50mm)多量 焼土粒・炭化物粒少量
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒少量
- 3 黒褐色土 焼土粒・黄褐色土粒少量
- 4 炭化物層 上層部炭化物は形を残すものも見られる 太さ6cm長さ17cm
- 5 炭化物・灰層・骨片混入

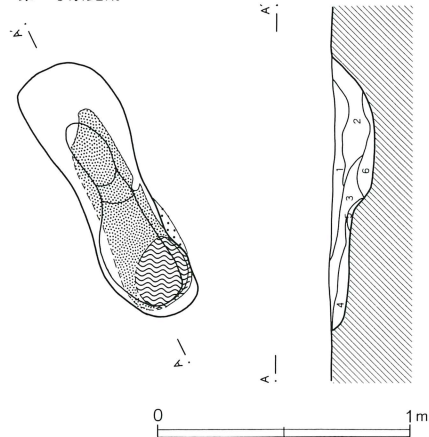
第5号茶毘跡

- 1 黒褐色土 炭化物粒(3~5mm)・焼土粒(2~5mm)多量 黄褐色土粒少量
- 2 炭化物層 焼土粒・黄褐色土粒少量

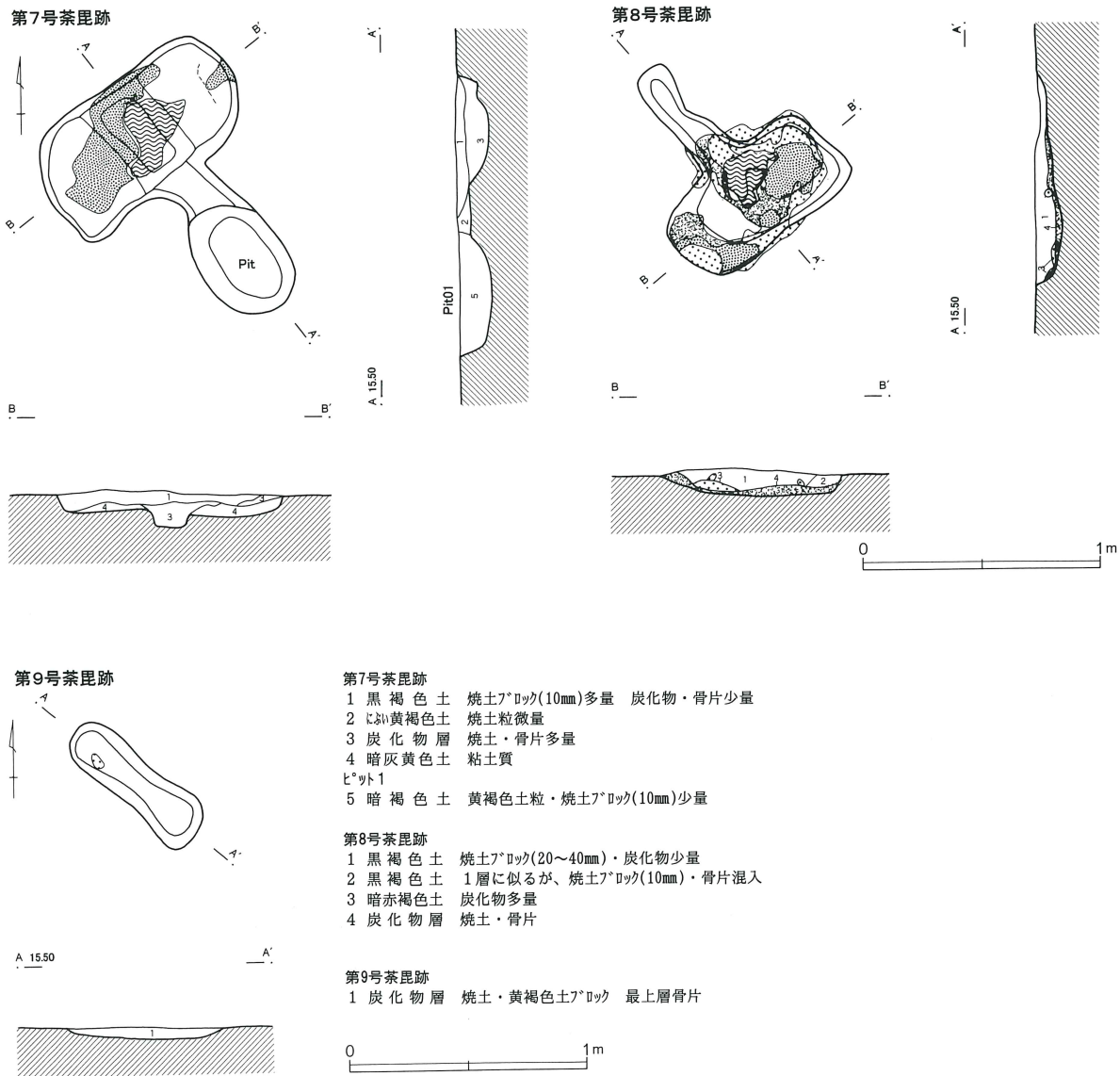
第6号茶毘跡

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土粒多量
- 2 黒褐色土 黄褐色土粒少量
- 3 黒褐色土 焼土粒・焼土7°Dツク(30mm)多量 骨片・黄褐色土粒少量
- 4 炭化物層
- 5 黒褐色土 炭化物多量
- 6 褐色土 炭化物・焼土粒少量

第6号茶毘跡



第43図 E区茶毘跡(3)



- 第7号茶毘跡**
- 1 黒褐色土 焼土フック(10mm)多量 炭化物・骨片少量
 - 2 黄褐色土 焼土粒微量
 - 3 炭化物層 焼土・骨片多量
 - 4 暗灰黄色土 粘土質
 - 5 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土フック(10mm)少量

- 第8号茶毘跡**
- 1 黒褐色土 焼土フック(20~40mm)・炭化物少量
 - 2 黒褐色土 1層に似るが、焼土フック(10mm)・骨片混入
 - 3 暗赤褐色土 炭化物多量
 - 4 炭化物層 焼土・骨片

- 第9号茶毘跡**
- 1 炭化物層 焼土・黄褐色土フック 最上層骨片

第2号茶毘跡(第41・7図)

BA54グリッドに位置し、第10号溝跡と重複する。

燃焼部は長方形で、東壁中央やや北寄りに煙道状の突出部が付設されている。長軸1.05m、短軸0.48m、突出部は幅0.25m、長さ0.31m、主軸方位N-117-Eを測る。

突出部は西壁から溝状に掘り込まれて東壁外方に突出したもので、深さ0.17mと燃焼部底面よりも深い。結果的に燃焼部の底面は突出部延長部に向かって傾斜する。壁は0.03mほどの深さで外傾し、被熱による焼土化が著しい。

燃焼部の覆土下層には炭化物が堆積し、焼土・骨片

が含まれている。

遺物は出土していない。

第3号茶毘跡(第42・8図)

BA55グリッドに位置する。

燃焼部は台形で、南壁中央に煙道状の突出部が付設されている。長軸長辺0.88m、長軸短辺0.83m、短軸0.48m、深さ0.27m、突出部は長さ0.72m、深さ0.37m、主軸方位N-160.5-Wを測る。

突出部は北壁から溝状に掘り込まれて南壁外方に突出したもので、燃焼部の底面は突出部延長部分が溝状に掘り込まれている。燃焼部の壁は外傾し、被熱による焼土化が著しい。突出部の東壁は内傾し、底面は北

壁から突端にかけて緩やかに上がっていく。

燃焼部の覆土下層には焼土・炭化物が多量に堆積し、燃焼部と突出部の連結部付近には骨片が集中している。

遺物は出土していない。

第4号茶毘跡 (第42・7図)

AY50、AZ50グリッドに位置する。

燃焼部は長方形で、西壁中央に煙道状の突出部が付設されている。長軸0.87m、短軸0.34m、深さ0.14m、突出部は長さ0.68m、深さ0.23m、主軸方位N-68°-Wを測る。

突出部は東壁から溝状に掘り込まれて西壁外方に突出したもので、燃焼部の底面は突出部延長部分が溝状に掘り込まれている。燃焼部の壁は外傾し、被熱による焼土化が著しい。突出部の底面は東壁から突端にかけて緩やかに上がり、途中0.05mほどの段をもつ。

燃焼部の覆土下層には焼土・炭化物が堆積し、燃焼部と突出部の連結部付近および東壁突出部延長部分には骨片が集中している。

遺物は出土していない。

第5号茶毘跡 (第42・7図)

AZ50、BA50グリッドに位置する。

燃焼部は長方形で、煙道状の突出部は付設されていない。長軸0.88m、短軸0.62m、深さ0.06m、長軸方位N-17°-Eを測る。

壁は緩やかに傾斜し、被熱による焼土化は認められない。底面は凹面を成し、北東半部にはピット状の掘り込みがみられる。

覆土下層には炭化物が集中して堆積している。

遺物は出土していない。

第6号茶毘跡 (第42・7図)

AZ49グリッドに位置する。

長方形の燃焼部南短辺に同規模の突出部が付設されている。燃焼部は長軸0.59m、短軸0.36m、深さ0.16m、突出部は長さ0.50m、主軸方位N-154°-Eを測る。

燃焼部の壁は緩やかに外傾し、被熱による焼土化は認められない。底面は平坦である。突出部は燃焼部底

面より0.08mほどの段をもち、底面は平坦である。東壁の一部に被熱による焼土化がみられる。

燃焼部・突出部の覆土下層には焼土・炭化物が堆積し、突出部先端付近には骨片が集中している。

遺物は出土していない。

第7号茶毘跡 (第43・7図)

AW41グリッドに位置する。

燃焼部は長方形で、南壁中央に煙道状の突出部が付設されている。突出部先端はグリッドピットによって攪乱されている。長軸0.96m、短軸0.52m、深さ0.10m、突出部は幅0.20m、深さ0.15m、主軸方位N-141.5°-Eを測る。

燃焼部の壁は外傾し、一部に被熱による焼土化が認められる。底面は平坦で、中央の突出部延長部分は溝状に掘り込まれている。突出部と燃焼部の連結部は0.10mほどの段をもつ。

燃焼部の覆土下層には焼土・炭化物が堆積し、燃焼部中央の突出部延長部には骨片が集中している。

遺物は出土していない。

第8号茶毘跡 (第43・5図)

AW39グリッドに位置する。

燃焼部は長方形で、北壁中央に煙道状の突出部が付設されている。長軸0.78m、短軸0.51m、深さ0.11m、突出部は幅0.18m、長さ0.49m、主軸方位N-40.5°-Wを測る。

燃焼部の壁は緩やかに外傾し、被熱による焼土化が著しい。底面は緩やかな凹面を成す。突出部と燃焼部と連結部には段がなく、緩やかに突出部突端に向かって登り傾斜する。

燃焼部の覆土下層には焼土・炭化物が堆積し、燃焼部の突出部との連結部付近には骨片が集中している。

遺物は出土していない。

第9号茶毘跡 (第43・6図)

AX43グリッドに位置する。

燃焼部は長方形で、煙道状の突出部は付設されていない。長軸0.67m、短軸0.21m、深さ0.05m、長軸方位N-50°-Wを測る。

壁は緩やかに傾斜し、被熱による焼土化は認められない。底面は凹面を成し、北西部には一部被熱による焼土化がみられる。

覆土には炭化物が堆積し、最上層には骨片が散っている。

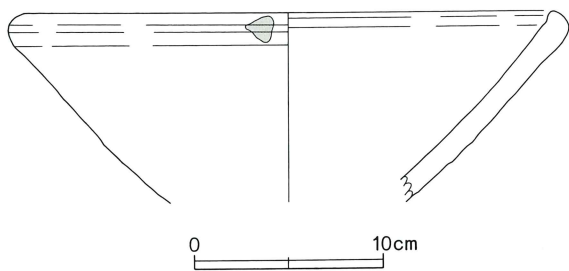
遺物は出土していない。

(2) ピット

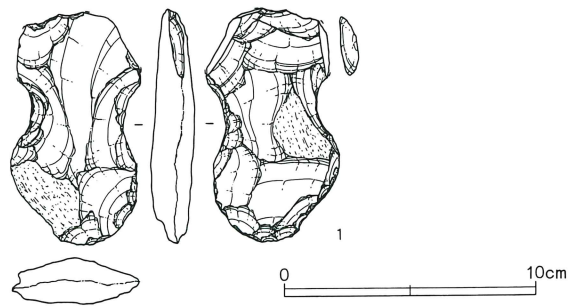
ピットは調査区全域にわたって、多数検出されている。このうち、大多数のピットは用途・性格が不明で、時期を確定し得る遺物も出土していない。なかには柱痕や柱抜取痕を明瞭に残すものも認められる。配置の

規則性や組み合わせを把握することはできなかったが、建物跡の存在も想定される。また直径0.3~0.4m程度、深さ1.5mを超えるものが数本みられ、F区の調査成果から鑑みると、井戸跡であった可能性が高い。

第44図 E区ピット出土遺物



第45図 E区表採遺物



E区ピット出土遺物観察表 (第44図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	鉢	(28.4)	(9.9)		WB片	B	にぶい黄橙	5	AY50Gr-P01 黒色物付着

E区表採遺物観察表 (第45図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	打製石斧								ホルンフェルス 長さ9.2×幅5.05×厚さ1.2×重さ89.6g